THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿四年 第五號

第二百四十二號

此廣告によりお申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

御奈良天皇恩賜　本派本願寺所藏

宮内省御歌所寄人　坂正臣先生序

宮内省御歌所寄人　大口鯛二先生撰及跋

三十六人家集寫眞帖

装幀用、コロタイプ印刷、用紙菊倍判、純良鳥の子、奉書、江戸川別漉、上質洋紙等各種　一組六十葉特別實價金拾圓（但用帋鳥の子に限り一圓増）

遞送料金貳拾四錢（但東京市内無遞送料）

本帖歌集の原本は、藤原氏時代の舊物にして、長年月の間幸にも蠹魚の災を免れ、料紙の下繪に聊かの變色剝落なく、墨痕亦淋漓たれは、寫眞印刷極めて鮮明にして、一帖の裏、直ちに平安朝時代の書と畫とを併せ見るを得べし、其の如何に天下の貴重品なるかは、乞ふ左の撰者の跋文に就きて知らるべし、本帖は本願寺に乞ひて百部を限り、世の仝好者に頒つものなれば速かに申込まざれば、直ちに賣切となるべし

大口鯛二先生の跋に曰く

去明治二十九年の八月、おのれ賜暇にて、京都に遊びたりし頃、故明如上人の許にありて本願寺の庫裡に藏せらるゝ古書ども、これかれ取調べし中に、家集と外題したる一函あり、ひらき見れば卽ちこの三十六人家集三十九帖なりけり。筆者の名もなく、傳來の故由もみえねど、その書は、道風、佐理、行成の三蹟をはじめ、公任、俊頼などの筆蹟とおぼしくて、料紙など、目もあやにいみじうめでたければ、先うちおどろかれつゝ、かく貴き天下の寶物を、なにとてよのつねの圖書の中に、うちまじへてはおかれたるならん、といぶかりあやしみつゝ（中略）時なるかな、時なるかな、天文日記とて六十餘卷あるを

上人がとうてられてこは證如上人(光教)の自筆にかゝる座右日記なり、見ずや、といはるゝまゝに、まづそか中なる一巻をうけて、ひらきみしに、そのはじめ程に、ふと目にたまりたるは、左の一條なり。

天文十八年正月

二十日従禁裏以女房奉書三十六人家集令拜領、門跡經乘へ以御書被仰越候、僧正事來二日以前御申沙汰有度下由被仰候。

天文は、後奈良天皇の御代なり、これなり〳〵、此の時拜領の御品こそ、この三十六人家集なりけれ、六十餘巻の日記かたはしより見もてゆかば、數日を費すべきを、たま〳〵何心なくひらきみつるその一巻の初にしも、記この事を見いでたるは、まづ不思議の縁なるに、明如上人が、その事ともなしに、見せたまひし日記の中に、この事のまさしく記されてありしは、全く本書の世に出づる時到來せるにて、證如上人のみたまの、暗に示したまへるわざにこそ、とかしこくおぼえたりき(中略)やがて上人より本書を借受けて、東京にたづさへかへり、ひろくその道の博士等にも見せて、その説をもとめしに、誰も未だ見聞せざる珍書なり、寶物なりとて、ひたすらおどろきたふとむばかりなりけり、(中略)本書はかくの如く、後奈良天皇恩賜の由緒貴き平安朝の舊物にて、世に傳へたる三十六人家集中の**最古最良**ノ**證本**たるのみならず、その筆者は前に記せる如く、**本朝三蹟**とたゝへられたる能書たちの筆もまじり、その料紙はた世にたぐひを見ざる結構にて、**藤原氏全盛時代**の**美術**の粋を鍾めたる物なれば、美術家の參考品としても、**無比の重寶**たるものなり。本書中の一片にして、また〳〵世に傳はれるは、千金の價値あり、然るに、後西院天皇の返させたまひしより後、二百餘年の間塵埃のそこに埋もれて、しかも蠣喰のうれひなく、今日に至れりとは、おもへども〳〵、不思議の至ならずや、おのれはからずも、これを發見して、かく世に紹介することを得しは、實におのれが一生のさいはひにて、うれしきことのきはみになん。本書一たび世にあらはれて、古筆家の從來の鑑定を一變せしめたること、又本書の料紙の下繪その切り繼、破り繼、重ね繼などの製によりて、美術家の意匠を啓發せしめたる力の頗る大なることなどは、既に洽く世に知られたれば今又いはず。又おもふに、本書のかくの如く貴重なること、もしはやく世に知られてありしならんには、かの戰亂の時代などに、よからぬものどもありて、いかにもてはふらかしけんも、はかられざるを、なか〳〵に絕えて知るものなかりしは、今日まで満足に傳はれるもとゐなりけんかし、とにもかくにも**天下の致寶**なれば、**神佛の加護**ありしなるべし(中略)又本書は、もと御室關白道長公の意匠になりて、上東門院の御遺物ならや、と紫式部の日記によりて、おのれが思ひよれることゞもは、坂ぬしの序文にもいはればゞらしつ、さてこの**寫眞版**は、故明如上人世にいまそかりしころ、本書を見ることあれはざる人にも、ひろく見せ、又おのれらが**手習**の本にもせまほしとて、おのれせちに上人にこひきこえて、一帖のうちより、一葉二葉あるは五六葉あるはまでづゝえりいで寫しとり、かくはものしつるなりけり。

發賣所 婦人社

東京市本郷區西片町十番地ノ十四
電話下谷九百十九番
振替口座東京卅四番



銀製洋盃及木盃

紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達を致し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一　金七圓五拾錢也　同径三寸丸　同目方正味二十五匁付
一　金拾圓九拾錢也　同径三寸八分丸　同目方正味四十匁付
一　金拾參圓貳拾錢也　同径四寸丸　同目方正味五十匁付
一　金拾六圓五拾錢也　同径四寸八分丸　同目方正味五十五匁付
一　金貳拾壹圓八拾錢也　同径五寸丸　同目方九十匁付

三ッ組ノ部

一　金拾貳圓六拾錢也　純銀製径二寸五分丸盃三ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一　金拾七圓貳拾錢也　同径三寸丸　同　同目方正味五十五匁付
一　金貳拾壹圓八拾錢也　同径三寸八分丸　同　同目方正味八十匁付
一　金參拾壹圓也　同径四寸丸　同　同目方正味百卅匁付
一　金四拾圓八拾錢也　同径四寸五分丸　同　同目方正味百八十匁付
一　金五拾壹圓九拾錢也　同径五寸丸　同　同目正味二百卅匁付

一定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢
一文字彫刻　一字　金拾錢
一大字彫刻　一字　金七拾錢

其他御好に依り彫刻類返送製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

商　玉　寶　堂

東京市下谷區池之端仲町二十九番地
（電話下谷特九六五・一二四四）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

日本國民代表之大著出づ

帝國大學名譽教授文學博士 重野安繹先生
帝國大學講師 日下寛先生
共纂（著者肖像寫眞版貳葉入）

新刊

日本武士道

全壹册

菊版總クロース美術的製本
紙數五號活字四百五十頁

正價金壹圓五拾錢 內地送料拾貳錢 臺灣清韓、樺太金卅五錢

本書は漢學並に歷史の大家にして武士道の先倡者たる重野日下兩先生が憂世の餘建國以來の武士道を一々事實に據て發揮されたる者にて其深奧該博なる意見は何人と雖も首肯せざるを得ざる者あり故是迄世に有ふれたる書の如く空論を以て妄斷せる者とは同日の談に非るなり苟も武士道の神髓を知らんと欲せば本書を措いて他に求むべきものなし。

發行所 東京市神田區表神保町貳番地 大修堂書店

大賣捌 東京 大倉、東京堂、三省堂、上田屋 大阪、寶文館、名古屋川瀨、九州菊竹、長崎次郎、吉田、

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

眞宗信徒生命保險株式會社

●當會社の約款に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし

●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり

●當會社の保險は凡べて嶄新にして且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり

●當會社は掛金割增（年增契約）の代りに保險金控除（或ル年限内ニ死亡セバ）の新法を用ゆ

●當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり

●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし

●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

京都本店　京都市下京區油小路御前通角　（電話　七貳貳番）

東京支店　東京市京橋區南槇町壹番地　（電話本局五壹八番）

大阪出張所　大阪市東區大川町御靈筋角　（電話東壹貳五參番）

長崎出張所　長崎市榎津町六十五番地　（電話　七貳六番）

廣島出張所　廣島市紙屋町（秦　忠兵衛方）　（電話　六〇八番）

徳田秋聲君著

出産

四六版布表紙

紙數三百七十餘頁

箱入美本

定價金八拾七錢

送費金拾錢

目次

田山花袋君著

花袋集 第貳

再版出來

定價金壹圓十五錢

送費金十四錢

目次

東京神田區富山町一八 佐久良書房發行

東京高等商業學校教授 花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

▼一冊 定價五拾錢郵税金四錢▲

各地の中學校を卒業し進んで各種高等の學校に入學せんとするも、都會に出て、親しく其準備をなし能はざる青年諸子に同情して、先生が高等商業學校教授の傍ら、東京專修學校、明治大學等の高等豫科の英語教壇に立て、親しく教授せらるゝ教材につき、和文英譯、英文和譯、文法、書取の四科目の內、日本學生の最も誤り易きもの、又は學習に難澁なるものに重きを置き、其程度を斟酌して、假りに**試驗問題**に**擬**し、別に**詳密叮嚀**なる**解釋**を附せられたるものにして、問題の數實に**七百以上**に及べり

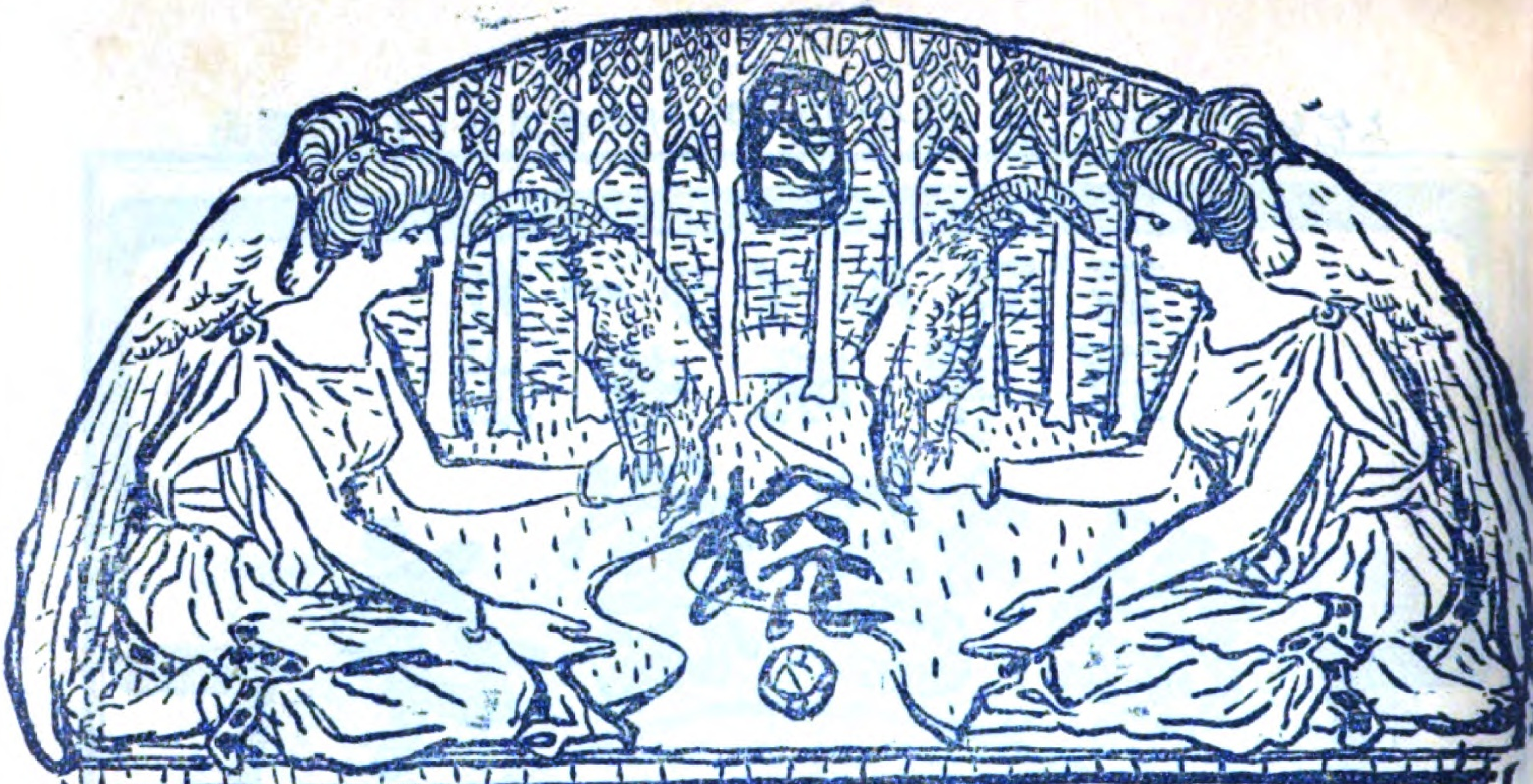
されば、一航英語を學習するものにありても、之れを繙讀練習するときは深き興味の內に、英語の知識を得ること尠少ならざるべし

發行所 東京市本鄉區駒込西片町十番地 **反省社出版部** （電話下谷九百十九番）（振替東京三十四番）

發賣所 東京堂 上田屋 東海堂 北隆館 三共社等其他



中央公論第二十四年第五號目次



カーライル原著
土井晩翠譯

衣裳哲學

全一冊

定價金壹圓參拾錢　郵稅金八錢

本書はカーライルの作中第一傑出せるものにして英文學界唯一の奇書と稱せらる其一面は惡罵嘲笑たり其一面は滑稽諧謔たり其一面は慷慨悲憤たり其一面は文明史の一部たり其一面は教訓懲戒たり而して之を綜合して崇高なる一大哲學を成せるもの本書即ち是なり吾人の視て以て獸毛布帛唯身を蔽ふに過ぎずとせる衣服其者より斯の如き驚天動地の大議論を生出し來る天才以外絕對に企及する能はざるものなり。

大日本圖書株式會社發行
東京京橋區銀座壹丁目

An Interior.



PIETER DE HOOGH.



第二十四年
第五號
第二百四十二號

桂西園寺兩侯の苦心

（一）

第廿五議會の形勢を綜覽するに、兎にも角にも好結果を擧げ得たりと稱して可なるべし、而して玆に至るまで、桂侯、西園寺侯の苦心の尋常ならざりしとは、之を想察するに難からず

桂侯が去年七月起て內閣を組織せるは、財政の難局を節理するために外ならざりき、而して其の節理の眼目が、第一に事業繰延を斷行して歲入出の均衡を保ち、第二國債を整理して其の償還方法を堅確ならしむるに在ると亦世の擧げて知悉する所なりき、彼れは斯くして一方に我が財政の基礎を鞏固ならしむると共に、一面にはまた外國に對する我が財政の信用を恢復し、漸次に機を看て外債の借替を行ひ、

以て國庫の負擔を輕くせんとを期待するが如し、現在の如く年利五分（其の實利廻は六分以上七八分に當るもあり）のものを三分に借換得ば、國庫は優に三千萬圓以上の餘裕を生ず可ければ也、所謂税制整理の如きも、此の餘裕を得るに至て能く實行せらる可ければ也、彼れが豫算の編成を改むると同時に、又公債利子に對する所得税免除の手段を執り、百方して公債所有者の便宜を圖れるは實に此の目的に外ならざるの

故に議會に於て萬一衝突を生じ、其の豫算をして不成立ならしむるが如きあらば、彼れは全く其の內閣組織の目的を失はざるを得ず、豫算不成立の結果は、前年度豫算に據らざるを得ずして、而して其の前年度（四十一年度）豫算は、實に膨脹の極度、紊亂の頂點に達したるものなれば也、若し之に據らば、事業繰延に由て歲出入の均衡を得ると能はず、國債整理を實行する能はざれば也、是れ彼れの內閣組織をして、政權を奪ふといふの外、全く無意義ならしむるものならずや、彼れ自から立憲政事家として、其の前內閣と異なる抱負を實行して以て其の面目を立てんと欲せば、何物を犧牲としても必らず其の自から編成せる四十二年度の豫算を成立せしめざる可らざりし也

彼れは政黨に對して一視同仁を唱へたるに拘らず、之を蹂躪せられても尙ほ政友會の意を迎ふるに努め、阿里山經營案を否決せられても我執せず、其の不本意千萬なる商業會議所打擊案（其の經費の徵收に國稅滯納處分法を應用するとを廢止する法律）をも通過せしめて、一意政友會の歡心を得んと欲し、貴族院の一部をして恰かも降伏的態度なりとまで痛罵せしめたるも、全く豫算成立のために外ならず、

其の忍耐に忍耐を重ねたるの苦心は、寧ろ之を諒とするに足る

(二)

四十三年度豫算に至ては、假令不成立に歸することありと雖も、彼れは甚だしく苦痛を感ぜざるべし、事業繰延の大本既に立ち、國債整理の調節また總て成れる以上、近く兩三年後に財政上著るしき變化あるべしとも覺へず、否、政府に取ては四十二年豫算に憑據するも、未だ甚だしき苦痛と爲すに足らざる可ければ也、苦痛を感ずるものは寧ろ在野黨也、何となれば、在野黨は豫算不成立に由て其の民心收攬の唯一策とする税制整理を行ふこと能はざる可ければ也、税制整理が到底國庫收入の減少を來すに於て、政府は寧ろ其の期間の遲延を便とす可ければ也

故に彼れは第廿六議會に於ては、必らずしも政友會の意を迎ふるにのみ力めざるべし、苟くも自家の面目を毀損する虞あるが如きものあらば、極力之を爭ふて讓歩せざる可く、時としては頗ぶる強硬なる態度を執ることもあるべし、彼れは廿五議會に於ける忍耐を以て、自から尺蠖の伸んがために暫らく屈するものと做し、又大鵬の將に搏んとする時先づ翼を收むるにも比するなるべし、彼れが大體の形勢を揣摩するに長じて、而して屈伸自在の才あるに視れば、此の推想は蓋し中らずと雖も遠からざるべし、然れども此の抱負を有するに拘らず、第廿五議會に於て堅忍自重せる其の苦心に至ては、何人も之を否認すること能はざるべし

彼の新政黨組織の計劃は、素より彼れの關與せざりし所なるべし、否、彼れは其の組織を以て或は政

友會の邪推と憤怒とを招かんことを慮かつて、百方苦慮したりし痕迹あり、一び政友會の憤怒を招けば、豫算不成立の虞あり、彼れが九仞の功殆んど一簣にして缺けんとする掛念あり、彼れ豈新政黨に關與す可んや、思ふに新政黨の成らんとして成らざりしは、彼れ及び彼れの部下が之に關與せざりし故ならざらんや、然れども來るべき第廿六議會に於て、彼れの態度必らずしも從前の如くならざるべし、彼れ政友會に迎へらるゝか、自から進んで之に加はるの決心を爲さゞる限り、彼れは必らず新政黨と路傍人たらざるべし、彼れは啻だ水到りて渠自から成るとのみ視ざるべし、尺蠖の伸ぶる、大鵬の飛ぶ必らず第廿六議會以後にありと做すべし

（三）

桂侯洵に苦心せりと雖も、政友會亦得意なりしにはあらず、桂侯を苦めたるは、能く大政黨の威力を示すものたるも、然かも世を擧げて政友會の暴横とし、却つて往々にして大政黨の威信なしとするの論すら少からず

西園寺內閣の倒れたる最重の原因は、其の財政上の不檢束に由て人望を失へるにあり、之に代れる桂侯の財政々策は素より奇想天外より墜つる底の好案にあらず、寧ろ平凡に過ぐるものなれども、此の平凡なる政策にすら氣付かざりし西園寺內閣の不信用は、桂侯の財政々策の確立に由て益々顯著となれり、西園寺內閣を目して自個の內閣とせる政友會は、義宜しく桂內閣の編成したる豫算に反對せざる可らず、少くも反對的態度を以て、十分に打擊を加へざる可らず、今日の策たる、唯だ桂侯の財政方針の外奈何

ともすべきものあらずとし、國家のため己れを捨てゝ公に殉ずると做すも、所謂自家の内閣と全然別異なる財政策に賛成するが如きは、自から其の前過に裏書するに異ならずとす、而して之を敢てしたりし政友會の苦境と、之を敢てせしめたりし西園寺侯との苦心は、幾んど桂侯以上なるべき也

　政友會として桂内閣の豫算を攻撃せんと欲せば、先づ直ちに陸海軍を擣かざる可らず、西園寺内閣にも陸相たりし寺内將軍は、當時軍事費の到底繰延ぶべき餘地なきことを斷言して、以て大藏大臣松田氏等の協議に應ぜざりき、然るに桂侯が更らに繰延を斷行するに及びては、將軍稍々難色ありしも、竟に唯々として之に從ふに至りき、此の一事は政友會が十二分に非難し攻撃すべき所たり、殊に軍備擴張の必要を唱へて、其の縮小と見るべき主張には、一切反對し來りたる政友會は、此の繰延には理に於ても亦反對すべき筈なりき、則ち筈なりしに拘らず、一辭の以て之に及ぶなかりしは、世の多く嗤笑したりし所ならずや、政友會は素より寺内將軍を推戴して第二の西園寺侯たらしめんとする志なきにあらず、常に進んで慇懃を通ずるに怠らず、將軍が此の落花に對して流水の情あるや否や疑問なるも、政友會の意や明白にして蔽ふ可らず、思ふに内閣組織の第一條件は宮中の御信任にあり、第二條件は陸海軍の同意を失はざるにあり、此の二個の條件は從來在野黨の最も不用意にして而して常に困頓したりしもの也、自由黨は多年の苦き經驗によりて、先づ伊藤公に事へて政友會となり、次で西園寺侯を總裁とせるが、然かも第二の條件には、尙ほ甚だ心を用ひざるを得ず、桂侯が身陸軍大臣として、海陸軍部内に威望あるに比すれば、政友會は殊に此の威なきを得ざるべし、現に西園寺侯の内閣の成す能はざりし軍事費の

緩延をば、桂侯が容易に之を成し得たりしは、單に其の見る所の正鵠に中りしが故のみにあらず、實に海陸軍部內を威壓すべき重望を有せるに由る、政友會は則ち海陸軍の歡心を結び、其の信用を得て以て內閣組織の前路を容易ならしめんと欲し、寺內將軍が比較的公平にして且つ重きを此の方面に置かるゝを看破し之を他日の總裁とせざる迄も、尙ほ將軍を透して手を海陸軍に延ばさんと欲するなり、此がため敢て將軍を擒くとをせず、其の反覆を攻擊せざりしのみ、然るも世上の嗤笑は竟に免かれざりき、是れ政友會苦心の存する所、頗ぶる諒とすべきものなくんばあらず

(四)

政友會は衆議院を左右すべき全權を掌握し得たり、其所屬議員は議場の中央に龍蟠虎踞し、議長は素より自黨のものたり、元田、大岡、鳩山の院內總理令を傳へ、恒松某等傳令使となりて、全然議事を左右したるを以て、衆議院は恰かも政友會本部の如き觀ありき、此の勢力を以てせば、豫算按の成否素より其の掌中にあり、桂內閣を殺活すべき鋭刀實に其の懷裏に在りき、然るに豫算案に就て其の威力を逞くするに至らず、僅かに阿里山官營を削除し、製材所拂下を否決したりしに過ぎず、此のため桂內閣の威信の減じたりしは論を俟たざるも、然かも甚だしき痛苦を與ふるに至らず、單に淺小なる微傷を負はせしのみ、財政整理の功名は、事業緩延と公債整理との美名は、竟に桂內閣をして十二分に之を占得せしめたりしは何ぞ

殊に阿里山官營の如き、製材所拂下の如き、必らずしも爭ふに足らざるもの也、然るに政友會が單に

之を爭へるは、盲從の誹を免がれんと欲せしのみ、其の敵視する所の農商務大臣（大浦男）と遞信大臣（後藤男）とに部分攻擊を加へしのみ、豫算の眼目として爭ふべき軍事費の繰延に一辭だも言及せず、單に「弱いものいぢめ」を爲すに過ぎざりしは、寧ろ卑怯の措置にして、大政黨の態度にあらず、大政黨としては却つて横暴の一例なりとは、世上の論者の多く主張する所たりき

且つ政友會が商業會議所法に改正を加へて之を打擊したるは、素より公平の見地より出でたるにはあらず、唯だ各商業會議所が聯合して西園寺内閣の財政に反對し、爲めに其の信用を失墜せしめたりしを怨み、之に復讐を圖れるのみ、斯くして商業會議所をして政友會の憚かるべき所以を悟らしめ、併せて多數實業家に示すに、大政黨の威力を以てせんと欲せしのみ、然かも政友會の提出したりし幾多の法律案が政府反對のため、大抵貴族院に於て否決せらるゝを怒り、政府に迫りて本案のみを成立せしむるに非ざれば、大政黨の面目立ち難しと愁訴し、且つ追加豫算を楯に一面政府を脅迫したりしより、政府も忍びて貴族院通過に努力せしのみ、世人は此の點に於ても亦政府の忍耐を諒とすると共に、多く政友會の横暴を鳴らさゞる莫し

同じく苦心といふも、桂侯の苦心は、世の諒とする所なるも、政友會は却つて動ゝすれば横暴と難ぜらる、之が總裁たる西園寺侯の苦心寧ろ憐れむべき也、况んや侯は屢々桂侯の懇請により、電報を以て、若くは松田氏等を招きて、努めて桂侯の希望を容れしめたるをや、西園寺侯の苦心は其の境遇の逆なるに於て、吾人は寧ろ之に同情せんと欲す

（五）

桂侯の苦心は竟に豫算を成立せしめて、其の財政整理の基礎を立つる事を贏ち得たりき、西園寺侯の苦心は、抑も何物を齎らし來るべき乎

西園寺侯若し第廿五議會に於けると同一の態度を持續し、世上の毀譽褒貶を一切心頭に措かず、陰忍に次ぐに陰忍を以てし、自から進んで常に桂内閣を援助せば、次て來るべき内閣組織に便なると論を俟たざるべし、次て來るべき内閣の明年なるか、明後年なるか、抑もまた五年七年の後なるかは、今得て斷言す可らずと雖も、更らに桂侯の内助を以て少からざる便宜を得んと勿論なるべし、然れども政友會を以て桂侯の所有と爲さば知らず、然らずんば桂侯の好意なるものは、到底西園寺内閣當時のもの以上たる可らず、斯の如き好意は政友會に取て餘り珍重すべきものには非ず、且つ夫れ桂内閣を打倒さん乎、之に代るものは必らず政友會ならざる可らず、少くも政友會の援助を求めて、之と聯立的なるものならざる可らず、政友會は衆議院に過半數を有する間、否、衆議院に於ける最大黨たる間、決して政權に遠ざかるを憂へざる也。最も露骨に之をいへば、西園寺侯を失ふて宮中の御信任を繫ぐべき支柱なきに至らば格別、然らざる間は、容易に政權に遠かる虞なき也、但だ西園寺侯萬一の時、之に代るべき人物なきを憂とするのみ、桂侯と戰ひ、戰ふの極自ら惡鬪塵戰するに至らば、貴族院の反抗を招くを憂とするのみ、政友會は兩三年來鋭意して手を貴族院に延ばしつゝあるも、桂系統の勢力依然として强大なると、彼の貴族院令改正案議事に就て徴すべし、此の形勢の大に變ぜざる限り、政友會は未だ容易に桂侯と戰

ふ可らず、戰へば不利なるのみ

玆に於てか政友會の苦心は、第廿六議會以後を以て殊に甚だしとすべし、第廿五議會に於ては、桂内閣に必らず豫算を成立せしめざる可らざる弱點ありき、政友會は能く之を知れるが故に、多くの無理も押通されたりき、然れども第廿六議會は形勢全く反對すべし、即ち桂内閣は豫算不成立を顧慮するの要なきがために、十分强硬の態度を支持するに至るべし、時としては議會を解散すべく、或は政友會の一角をも突き崩すとなきを保せず、是れ政友會に取て不利なるべき挑戰也、政友會が其の戰機を轉變して自黨に有利なるものたらしめ、若くは之を避けて巧みに其の地位を安固ならしめんとは、最も苦心を要する所なるべし、西園寺侯今や花鳥の間に吟咏し、妓と共に山時鳥の啼聲を聞くも、其の心の奥には、必らずや一點苦悶の種子なきを得ざるべし、恬淡人に過ぐるも、豈永く悠々として閑雲野鶴たるを得んや、然かも其の苦心の結果如何と問はゞ、唯だ未知數と答ふるの外なきに似たり

（六）

一陽春四月、花咲ひ鳥謳ふて、滿都の士女唯だ怡然として悠遊する時に當り、突如之を驚かしたるは所謂日糖事件の檢擧是れ也、議會に於ける三ヶ月の掛引、魂膽、調査、討論に疲れて、將さに故山の春を賞して其の勞を慰藉すべく期したりし代議士は、日糖事件のため著るしく其の平和の期待を攪亂せらるゝに至れり

此の事件は素と會社重役の惡德を制裁する目的を以て訐かれたるもの也、勿論之に關連して多少瀆職

の議員あらんとは、世人の多く豫想したりし所なるも、是は寧ろ別問題として司法官の手に掛る可らずと思惟せられたりき

然るに重役を拘引し調査したる結果、代議士の拘引せらるゝもの日夜相次ぎ、今や重役問題より逸して、却つて議員瀆職罪が主たる問題となれる趣なきに非ず、斯の如きは彼の重役の豫期せる所にして、彼等は或は手を額にして之を慶するも知れず、彼等は斯くして世間の耳目を自個の罪狀より遠ざからしめんとに腐心し居たる可ければ也

此の世間を騷がしたる瀆職議員が殊に最も政友會に多くして、現に黨中の財政通として重きを措かれたる二三子、及び名儒の子にして基督教の牧師たる者までも連累者の巨頭たるが如きは、政友會に取て大なる打擊ならざる可らず、若し此の際に處して一歩を誤まるが如きあらば、政友會は或は衆議院に於ける絕對的過半數を失ふなきを保せず、地方に於ける自由派進步派の訌爭激しく、然かも其の形勢が常に醜問題に由て變轉するを思はゞ、今日の事、或は政友會衰運の岐路也とするも過慮ならざらんとす、是れまた政友會の最も苦心する所にして、而して其の總裁たる西園寺侯の殊に心を痛むる所なるべし

政友會は砂糖問題との關係淺からず、現に砂糖官營によつて日糖會社の破綻を隱蔽せんとせしもの、彼の惡德重役等にして、政友會の勢力に信頼して之と通謀し、第廿四議會以來、兩度まで官營案を實行するに努めたりき、去れば、此の問題を爬羅し剔抉せば、政友會中尙ほ多數の瀆職議員を出だすに至るべきか、西園寺侯の淸廉を以てして、假令世事に冷かなるも、豈其の醜に耐ゆ可けんや、侯また情誼に厚

しと雖も、本來執書心薄くして苦鬪を好まず、或は竟に現地位を厭ふの情を萌さゞるや否や、萬一斯の如きとあらば、黨界實に一變を來すも亦測る可らず、吾人は侯の面目を想ふて深く其の苦衷痛心を諒とすると共に、侯の進退には、殊に細かなる注意を拂はんと欲す

水を治むるには山を修めよ

ルウズヴエルト氏は大統領として國會に下せし教書に於て、盛んに山林培養の必要を論じ、其の間に清國黃河の氾濫したる慘狀の寫眞を挿入したりき、寫眞入の教書は蓋し之を嚆矢とすといふ

洪水の最要最大なる原因が山林の濫伐にあるとは、今や何人も否定せざる所たり、夏書禹貢に扱れば、黃河流域及び其の附近には、漆樹桑樹は勿論、梟松、孤桐、枇幹、括柏、橘柚等に富み、厥の木は惟れ條しといひ、草木漸包すといひ、厥の木惟れ喬しといふに視るも、草木の鬱葱たりし狀況は略々想察するに餘りありとす、然かも支那人は植林の法を知らず、人口の漸く滋きに隨つて木を伐れるも、曾て之を植ゆることなきが故に、黃河流域は一面に灰の如く、水流氾濫して、少しく雨れば海洋の如く、其の慘害名狀す可らず、竟に寫眞としてルーズウエルト氏の教書に引用せらるゝに至りしのみ

最も之に同じきを韓國とす、韓人能く木を伐れども之れを植ゆる所以を知らず、茲に於て山丘皆禿して骨を露はし、少しく雨れば濁浪滾々として田を流し圃を沒す、隨て土地あるも耕作すべき處少く、生

民彌よ貧しくして文化益々退歩し、以て今日に至る、支那及び韓國は往時文明の光輝を放ち、我が國の師表とまで仰がれながら、却つて今日の如く國衰へ運窮するに至れるは、畢竟山林濫伐の結果といふも過言に非ず、語を強くしていへば、山林濫伐は亡國の因也

我が國には幸いに山林を重んずる治者乏しからず、徳川時代の藩君は、大抵山林の保護に心を用ゆると深く、林政の進歩また頗ぶる賞すべきものありき、今日木曾の山林に尾張藩以來の林政を行ふは、歐人の驚嘆する所にあらずや、維新の改革に萬事舊物を破壞し、競ふて新法を用ひしより、且つ藩制亡びて山林を保護するものなきに至りしより、一時濫伐の弊到る處に行はれしも、近時官民共に齊しく悟る所あり、鋭意して山林培養に力を用ふるに至れり

山林濫伐の結果は直ちに河川の氾濫と爲る、地方によりては、河川の氾濫を以て天然の施肥と爲し、泥砂によつて作物の豐穰を來すが爲めに、五年に一度、十年に一度の洪水あるを以て却つて天祐の如く解するなきにあらず、然れども概して之をいへば、洪水のために田を沒し畑を流し、甚だしきは家を喪ひ藏を失へるもあつて、父祖傳統の財產、一朝にして空となるもあり、其の慘害の酷なる、殆んど物の以て比すべき莫し、火災の慘は則ち慘なるも、未だ田畑を亡ふに至らざれど、洪水は然らず、啻だに玉石共に亡ふるのみに非ざる也、且つ洪水の後必らず疫癘あり、人民の病に苦み、疫に倒るゝもの少からず、其の損害を加算するに實に貲られずとす、思ふに我が國民が年々河川堤防のために費す所數千萬圓を降らず、然かも尙ほ水の害を免がれずして、之に失ふ所を加ふれば、少くも每歲一億圓を下らざるべ

し

故に治水は治國濟民の大要務にして、而して其の禍源を絶つの主として山林培養にあると多言を要せず、洪水の憂は實に主として山林濫伐にあれば也

我が國屈指の養蠶地たる長野縣は、桑田を拓くがために多く山林を伐れり、而して其の結果洪水の害多く、蠶絲の利と乗除して全縣の眞利害未だ俄かに判じ易からずといふ、假令濫伐といふ可らざるも、山林を失ふの直ちに洪水を招く所以なると斯の如し、治水の要道の主として山林を修むるに在ると智者を俟つて始めて知らざる也

吾人は臺灣總督府が近時心を山林の培養に用ひ、其の阿里山經營の方策に於ても、一方に輪伐すると共に、又植林を怠らざるを見て、其の要を失はざるを稱せざる能はず、日露戰役の紀念として、地方到る處に山林を植養するものあるを視て、人心の趨く所の殊に當を得たるを悅ばざる能はざりき、彼の韓國の土地を耕すを以て最大眼目と爲す東洋拓植會社の如き、また主として山林の養成に力を用ひざる可らず、然らずんば水利の以て田を開くに足らざるのみならず、辛苦して開墾したりし畑と雖も、一年強き霖雨あらば、蕩々として之を流歿し、三年五年の辛苦一朝にして空に歸す可ければ也、吾人は此の一事より推理して、韓國開墾の果して會社事業に適するや否やを疑ふもの也、山林養成の如き百年の事業は、少くも五六十年間は利益を擧げ得ざるが如き事業は、株式會社の堪ゆる所なるや否やは、何人も之を疑問とせざるを得ざるにあらずや

足尾採銅のため、附近の山林を伐り盡し、煙毒また四周の山林を枯らして山骨を露はしたる結果は、年々渡良瀬川を氾濫せしめ、此の川に沈みつゝ漸次に押流さるべき銅毒氾濫して、田畑を害し、人民を損して流離せしめんとする慘狀は、年々愁訴せられて其の聲を議會にも絶てることなし、是れ最も近く最も新らし實物教訓也

治水事業は內務省の大事業にして、此がため政府、府縣郡町村の負擔する所實に少からず、殆んど治國濟民の大要務となれり、乃ち山林を修むるの直ちに治國濟民の大要務たる知るべきのみ、吾人はルウズヴエルト氏が米國人の山林濫伐を慨して、之を戒むるに切偲を致したる眼識に推服すると共に、又我が官民が眞面目に山林培養に力を致さんことを望む、山林を治むるの利は、單に治水の功あるのみならず木材を淸國韓國及び米國に輸出する利も亦無限なる也

移民に關する立法政策

稻田周之助

一、緒言

近年我が國にて移民の事に意を注ぐもの漸く多く頃者學者專門家亦之を攻究するもの寡からず又北米合衆國濠太利加奈陀諸地にて日本出稼人に關する論爭甚だ劇烈なるものあり我が國民の移動が內外の問題となるとは決して好しきとにあらざるや論なしと雖も既に問題となりたる上は其の利害得失の存する所を尋繹せざるべからず

且我國にては國民の海外に出稼するとは全く輓近の事に屬し出國者歸還者の數は極めて少なれども歐羅巴諸國は其の來歷極めて古るく其の利害關係亦極めて重大なるものあり其十九世紀末より近時に涉る統計に依れば歐羅巴諸國民の故國を去りて出稼地に赴くもの年々百五十萬人を降らず他の一方には北米合衆國に入り込むもの年々七八十萬乃至百二十萬人に上るあり出稼人を出す國より之を見れば其壯丁を失ふの損失あり入國者を受け取る國より之を見れば必要なき人口增加の爲めに不利を招くとなき能はず又是等移民の通過する線路に當る地にては傳染病の輸入貧窮者病患者の滯留等の爲めに厄介を荷ふとなき能はずして此人口移動あるが爲めに被ふるところの關係國民の損失不利憂慮一方ならざるものあり於是乎歐羅巴諸國は各々移民制限若くは移民通過取締に忙はしく北米合衆國濠太利加奈陀諸地は入國者制限又は取締に是れ急なり尤も他の方には移民を出すは過剩人口を放出して本國の社會狀態を調和するの利あり其の通過する地は運賃周旋料を得るの益あり出稼人は其の收得金を本國に送りて國家經濟を資け入國者を得たる地にては勞力の供給を得て

農工業鑛業の發達を見るべしとて極端なる樂觀を懷くものなきにあらずと雖も是は事實に遠かる空論にて幾分の道理を含むや論なしと雖も之を以て大局を推すべからざるや言を待たざるなり

是に由て之を觀れば移民問題を攻究するものは獨り我が國より米國其他に赴くところの出稼人に就て之を云はんよりは寧ろ世界の全局に就て之を尋繹するを便れりとす予は移民問題の全部を此に語り悉くす能はざる爲めに暫く其の立法政策に關するもの丶みを取りて其要を擧げんとす是れ亦此問題の攻究方法に對して其の一端を示すもの丶み

二、移民の原因

歐羅巴諸國は何故に彼が如き多數の出稼人を出すか是れ第一に研究すべき要點なり

或は說を爲して曰く歐羅巴諸國は人口稠密增殖急劇なる爲め其の過剩人口を放出するの必要あるに由ると或は又曰く是れ近代歐羅巴諸國植民政策に熱中せる結果なりと然りと雖も此二說共に誤れり歐羅巴諸國は世界中比較的に人口稠密なり併ながら其の多くの移民を出すものは歐羅巴中にて人口稠密なるものにあらずして却て人口比較的に稀薄なるものなるの實あるを如何せん乃ち大不列顛國にて移民の出て行くは英蘭蘇格蘭にあらずして愛爾蘭なり大陸にては墺太利匈牙利、露西亞、南伊太利及び巴爾幹諸國にて以上諸國は啻に人口過剩を憂へざるのみならず寧ろ人口不足を患ふる處たり知るべし移民を以て過剩人口放出の必要に出づるものと爲すの僞なることを又以上諸國の出稼人の出て行く先きは其國の植民地にあらずして主として北米合衆國なり南米諸共和國墨其古其他英領諸植民亦多數の移民を收容す本來植民と移民とは言語に於ても實質に於ても全く相異なれる事柄なるに拘はらず俗間輙もすれば之を混用するものあり時としては學者專門家までが此區別を無視するの過に陷ることあるは歎ずべきなり歐羅巴諸國は植民政策には甚だ熱心にて本國民を植民地に移植する爲めに百方盡力すれども一も其意に添ふものなく壯丁の故國を去るものは外國若くは外國植民地

の極めて發達したる處に赴きて自國の植民地に行くものとては絶無稀有なり是れ移民を制止せざれば植民行はるべからずと云ふものある所以にして植民政策が盛に行はるゝ爲めに多くの移民を出すといふは顚倒の極と謂はざるべからず

然らば愛爾蘭及び大陸諸地人民にして故國を去るものの多きは何の爲めぞ予は氣の毒ながら之を以て以上諸國人民の境遇の不幸に歸せざるを得ず抑も人口の移動は今に始まれるにはあらずして人類の歴史と共に其端を起せり人類は定住を好むか移動を喜ぶかは暫く哲學者の研究に讓るべし古代北方西寒の地に住める民族が温暖の地を求めて進みたる南方酷熱に苦める民族が涼を逐ふて北方に嚮へる皆其の現狀に安ずる能はずして移動せるものならざるはなく中世以來宗教上の軋轢民種間の爭闘劇烈を加ふるや弱者敗者の地に立てるもの皆大移動を企て其の他虐政に苦めるもの貧困に迫れるもの相率ゐて其の故國を去りて棲息の地を求む十九世紀に於ても亦同樣の事情なき能はずして露國の猶太人が大移動を爲したるは千八百八十二年の「五月法」に驅逐せられたる爲めなり千九百五六年歐露人民の多く故國を去りたるは戰役內亂及び饑饉の困難を避くるが爲めなり伊太利人匈牙利人愛蘭士人の他國の流氓となるもの多き亦本國の政治上財政上若くは社會上の不幸に驅らるゝものと謂はざるべからず獨逸は古來出稼人なき地なり二三十年前同國經濟困難にして內外多事なる頃は年々二十萬人以上の移民を出したれども今日にては移民の出て行くものと歸還するものとの差は二萬人を出でざる他の一方には外國人の獨逸に入り込むもの年々萬を以て數ふべし同國は人口稠密なる上に年々增殖七十萬人に達するといふに拘はらず二十年前と今日とは事情全く顚倒し過剩人口を放出せざるのみか却て他國民を吸收するの力あり

乃ち大局に就て之を云はゞ人口移動の原因は國土人民の不幸、其堵を安ずる能はざらしむるにあるや明白なり併ながら其他にも人口移動を促がすべき原因なきにあらず歐羅巴大陸諸國にては海陸運送業者が運賃

利する爲めに移民を勸誘し是れと相附帶して移民取扱業代業辦等ありて誘導周旋を事とするあり則ち前述自然的原因の外に此人工的原因ありて人口の不自然的移動を促がしつゝなり歐羅巴諸國政府の移民禁遏手段北米合衆國政府其他の入國者制止の方策が主として是等移民運送業周旋業に向て施さるゝは職として是れに由る

我國の出稼人の海外に出づるに至れる原因は一層明白なり往年布哇國政府國內勞力缺乏甚だしきを憂ひ我が安藤領事に就て契約勞働者の輸送を求め領事之を我が外務省に具申し當時の政府は之を以て國民の利益と認めて地方官に訓令を下して盛に移民を勸誘せしめたり我が移民が海外に出づると實に此に始まる爾來國中多數の移民會社起りて專ら出稼人の募集輸送に從事するあり在外出稼人亦其の鄉里の故舊親戚を招致する爲めに旅費手當金を供給するもの寡からず其後布哇は北米合衆國に合併せられて米國法に依り契約勞働者は其の國禁となり勞力の需要亦漸く減少したれども我が出稼人の北米墨其古南米諸國に赴かんとするもの斷えざるは之を內にしては移民會社之を誘ふあり之を外にしては在外出稼人之を導くあるが爲めにして此には歐羅巴諸國の如き自然的原因あるにあらず其の初より今日に至るまで總て人工的原因即ち不自然的移動を爲すものたり

三、利害得失

今日世界の一方には多くの移民を出すものあり他の一方には此多くの移民を受け容るゝものありて此に人口の大潮流を形くれり之を出すものは主として歐羅巴諸國にして之を受け容るゝものは北米合衆國其他の諸國なり大凡人世の事利に就き害を避け得るを求めて失ふを恐るゝに出でざるなし知らず此人口の潮流は如何なる利害得失を來すか

世間說を爲すものあり曰く移民は人口過多にして勞力の需要寡き地を去りて人口稀薄勞力缺乏せる地に就くものに外ならずして需給相應じ有餘を以て不足を補ふものなるを以て兩者共に相利益するあり是れ此潮流

が永く動いて含まざる所以なり且出稼人は勞銀の一部を貯蓄して本國の經濟を資け其使用者は勞力の供給に由りて其業を成すを得るを以て國民間の經濟より之を云ふも相互の利益たらざるべからずと此言固より多少の眞理を含まざるべからずして何等かの利得なかりせば斯く多くの人をして故國を棄てゝ出動せしむる能はず

然りと雖も今日の實際は此樂天說と相一致せざるを如何せん

先づ移民を出すものに就て之を云はんか

移民を出すの原因其國土人民の不幸にあると既に述ぶる所の如し其の身を免がるゝものより云はゞ是れ或は其困厄を緩くする所以なるべし併ながら其本國は不幸の爲めに其國民を他國に驅りて更に新たなる不幸を招かざるはなし伊太利南部は最も多くの移民を出す處なるが其の壯丁を失ふの甚だしきや田園森林歲月と共に荒廢に歸し農作牧畜に從事するものは老人幼者婦女子の類のみ其殖產興業の起らざるや論なきなり且シヽリー其他南部伊太利は勞銀極めて低廉にして職工勞働者の境遇の哀れむべきは乞丐と相距る若干もなし其人口稀薄にして勞銀低廉なりと云はゞ或は其の矛盾を怪むものあるべし然りと雖も勞力缺乏の爲めに事業起らず其の勞役に從事するものも老幼婦女衰廢者なりといふに於て其の價を貴くすべき所以のものなきを如何せん啻に之のみならず伊太利刻下の憂惧は「獨逸人の侵入」にありゼノア、フロレンス、ミラン諸市獨逸の資本入り商店開け大小商人塡塞せるは言ふまでもなしシヽリー、ネープル、カプリー、カラブリア諸地、都市より附近田舍に及びて獨逸人獨り富力勢力を專らにせんとするの狀あり是れ皆伊太利人が負載して他國の流氓となれる間の出來事にして彼の政治家及び有力者今更の如くに驚警し國民をして其故土に定着せしむるが爲めに拮据經營至らざるなし南部伊太利に於ける土地購買法敎育法其他の爲めに國帑を費すと尠からざれども其效果未だ見るべからず世間往々伊國出稼人の本國への送金を誇張し其の商工業の復興財政の整理を以て一に海

外移民の力に歸するものあれども是れ實は皮相の見のみ而も伊太利に次で多くの移民を出す墺匈國就中匈牙利が壯丁喪失の損失に堪へずして一方には極めて嚴格なる移民制限法を設け他の一方には國民を土着せしむる爲めに國帑公金を投じ及ばざるを恐れトランシルバニアのみにても土民に職業を與ひ殖產興業を起さしむる爲めに八千萬圓を投ずるの經費を立てたるを見ても其の苦勞する所以を知るを得べく愛蘭が大英國の一部を成しつゝ其の富貧文化の英蘇に相若かざる亦人口流出甚だしきに是れ由る

次に移民を受け容るゝものに就て之を見るべし

北米合衆國は千八百二十年頃までは殆ど多くの入國者を見ず其のこれ有るは五十年代以後にして七十年代より漸く多を加ひ近年は毎歲七八十萬乃至百萬以上に達し二十年代以來の入國者を通算すれば二千五百萬人に達す米國人の云ふところを以てすれば年々入國者多きも望しきものは來らず望ましからざるものゝみ麕集す且其の來るや人口稀薄なる地方には散布せずして悉く紐育其他人口稠密の地に殺開するを以て其の經濟上及び社會上の不利言ふべからざるものあり或は米國は勞力缺乏し勞銀貴き處なる故に外國移民入り込み來りて需給相調和するといふも事實は然らずして失職勞働者の多きと天下米國に若くはなかるべく入國者多きに從て益々失職者增加す乃ち千八百九十二年マサチユセツトのセンサスにて人口の二十九パーセントは其職を有せず千八百九十七年には一年を通じて失職者二百萬人に達す千九百二年紐育州に於ける失職者は全勞働者の十五パーセントにして是等の過半はストライキに由るにあらずして其職を失へるものたり或年には二十二パーセントに上るとあり

且米國ほど勞銀貴き處はなく如何に多くの移民を受け容れても勞銀は低落するとなきを見る時は同國の勞銀の貴きは他に原因ありて存し勞力缺乏に基くにあらず又外國移民は概ね不熟練勞働者にして多く來れば多くの失職者を出すといふに止り毫も經濟的調和の效果を示さず

北米合衆國に於ける移民問題に就ては世間既に之を詳說するもの多きを以て今此上に架說するの必要なし其他加奈陀南米濠太利南阿弗利等の到る處政治上經濟上の理由を以て入國者を排除するを力めざるなきに於て以上諸國皆外國移民の入國を喜ばざる點に於て相一致するといふことは何人も認めざるを得ず從て之を以て一時野心家が爲めにするところありて妄動するものと爲すは殆ど常識を有せざるものゝ言なり

以上述ぶる所に依りて之を綜ふれば移民なるものは之を出すもの之を受け容るゝもの共に其の不利を被むるべき厄介物なり國家若くは國民の上より云はゞこれ有るはこれ無きに若かざること萬々なり但し一個人の私益に就て之を觀察せば固より之を利とするものあるべく就中移民輸送業移民周旋業の如きは之を以て生業と爲すものなれば彼等のみは移民潮流の益々强且大なるを欲すべきや論なきなり

四、歐羅巴諸國の立法例

移民を出すといふことは其國家國民に取りては到底不利益たらざるべからず又之を受け容るゝものも迷惑寡からずとせば親交國民は相互に他の迷惑となることを制止するは國際の通義なり是れ歐羅巴諸國が移民の制限禁遏及び諸般の取締に關する法律命令を設けて其の及ばざるを恐るゝ所以なり

歐羅巴にて初めて移民制限政策を取りたるものは蓋し佛國路易第十四世にて其千六百六十九年の勅令を以て佛國民の國王の許可なくして外國に赴くことを禁じ此禁を犯もすのは財產沒收公權剝奪及び禁錮の刑に處す此制度は革命時代まで存在し千七百九十一年の憲法にて佛國民は移住の自由を有することを明記せり是れ敢て深き理由あるにあらずして路易の舊制を破棄するといふ一片の感情を表はしたるものに外ならず又革命時に移民に對する法律(ロアコントルレエンシグレー)なるものあれども是れ專ら貴族外國移住を抑制する爲たり千八百六十年制定移民法はやはり制限主義を取れり

英國は千八百五十二年及び千八百五十五年の法律を以て移民の保護及び制限に關する規定を設け皆西白

耳義各々移民制限に關する古るき法律あり西班牙は勅令にて移民警察規則を設け置けり

近年に至りては千八百八十八年瑞西の法律にて移民取扱業に對する取締を嚴にするあり千八百九十七年獨逸帝國は法律を以て旅券下渡手續を嚴重にし及び移民輸送業監督方法を定めたり是れ一は以て兵役を免がれんとするものを取締り一は以て國内人口の流出を防止するを旨とす千九百一年伊太利の移民制限法は船會社の移民輸送に就き競爭を爲すを禁じ移民周旋業者の誘導手段を用ゆるを許さず千九百三年匈牙利の移民制限法は則ち以上瑞獨伊三國の要旨を集めて大成せるものにして歐羅巴諸國の現行法中最も嚴格にして且最も精密なるものなり

千九百三年匈牙利法は幼者の横ま丶に外國に移住するを許さゞるのみならず幼者を遺して外國に出でんとするものは家族扶養の爲めに相當の保證を立てしむ政府は移民の出て行くべき方嚮を制限し時としては其の渡航を禁止するの權能を有することを明かにし移民輸送業者周旋業者に對する取締を嚴にし大凡廣告引札演説出版物配布等其の手段の何たるを問はず國民の出稼を誘導することを禁止し之を犯すものは刑罰に處す

尤も他國の移民の通過に依りて利益を得べき地位に當るものは其の通過者の多きを望むは自然の勢にて白耳義和蘭丁抹等の法制には其痕跡歷然たり一ハムブルグブレーメン等にては元老院議員を以て一の委員を組織し移民に關する司法及び行政事務を掌らしめ旅舍を作り鐵道割引を爲す等招徠至らざるなかりしも下等勞働者の通過は案外に利益寡き上に傳染病を輸入し貧民を招致するの虞なき能はず是れ今日各國共に通過移民取締の爲めに劬勞するに至れる所以なり就中英國は歐羅巴移民が一たび立ち寄る處なるを以て病人貧困者の出入頻々なるは云ふまでもなく一旦英國に入り更に他國に赴けるものにして其の出先きにて入國するを得ざるものは英國に還り來りて所在塡咽することを珍らしとせず乃ち英國は自國人民の出稼を制限し外國出稼人の入國を節制し及び通過移民を取締るといふ三様の任務を

執らざるべからざる地位に在り千九百四年の外國移民條令の如きは則ち入國者通過者に對する規程を設くるの必要に出づ

歐羅巴諸國の移民制度と相對して北米合衆國の入國者に關する法令を參照せざるべからず蓋し歐羅巴諸國は國内の壯丁を喪ふの損失移民通過の衛生及び社會上の惡影響を防止するの外、北米合衆國が望ましからざる入國者の多きに苦めるを見て之を相救ふの方法を取らざるべからず北米合衆國が入國者制限政策を取りたるは千八百六十九年七十五年の法律に就て之を見るべく千八百九十一年の法律に至りて稍其體貌を具備し歐羅巴諸國及び他の數國の移民取締規則は主として此法律を參照したりと稱せらる其の千九百三年の法律は則ち同國の現行法にて厖然たる一大法典を成し規律森嚴なり

我が移民保護法は明治二十九年制定せるものにして歐羅巴諸國の移民制限政策に則りたるは言ふまでもなく北米合衆國の入國者に對する規程をも參酌せると疑を容れず且同法第四條には行政廳は移民保護の爲め若くは公安保持の爲又は外交上必要と認むる時は移民の渡航を差止め又は其許可を取消すとを得るの明文あり其制限若は禁遏的政策の基礎は此法に於て既に備はれり我國には未だ外國移民の入國又は通過に對する規程なきが如くなれども入國者は事實上未だこれあるを見ず過般支那勞働者輸入の企をなすものありたれども政府之を許可せざる爲めに沙汰已みとなりたり又移民の通過するものに對する特別の規程なしと雖も傳染病豫防及び一般警察行政を以て之を取締るの道ありて存せり併ながら是れも未だ事實上の必要を見るに至らず

五、結論

我が日本帝國は世間の批評喧しきに拘はらず多くの移民を出すの國にあらず往年布哇政府の要求するとなく又移民會社の出稼を誘導幇助するなかりせば恐くは我が移民を外國の地に見るとなかりしならん且日本民族なるものは全地球上に於て僅かに五千萬人に過ぎず之を支那人の四億印度人の三億に比すべからざるは勿

論アングロサクソン、スラヴ、ラテン諸民族に比して遙かに少數なるを見るときは若し之を放ちて四方に散ずるを縱まゝせば數十年若くは百年數百年の後には零丁依稀其勢力を認る能はざるに至るなきを保せず是れ具眼の士の日本民族の前途の爲めに憂ふる所以なり

又外交及び國際經濟の上より之を見ば我の移民を出すの不可なるは一層明白なり乃ち我出稼人に就て常に政治上及び社會上の紛爭を醸すものは北米合衆國なり

陀濠太利亦同樣の趣あり南阿弗利加は未だ事實問題としては現はれ出でざれども是れとても其の趨勢は加奈陀濠太利と相異なるとなく彼が欲せざる所のものを强て送り遣るといふは甚だ謂れなき所爲なり其れも我が利益の爲めに已むを得ずとならば格別なれども我も損ありて益なき事ありといふに於て我にして移民制限政策を執るは固より當然なり

且日本帝國貧なりと雖も未だ人間を輸出するの窮に陥りたりとは云ふべからず況や今や一等國の伍に列して極東に於ける文明人道の唱首たりといふに於てをや嘗試に外國港の埠頭にて出稼人が如何なる取扱を受け居るかを見よ同胞皆面を掩ふて過ぐるにあらずや北米合衆國濠太利等にては契約勞働者の入國を嚴禁す其理由とするところは其の方法が奴隷制度の遺臭を帶びて今日の人道と相容れざるものあると斯る劣等勞働者を入國せしむるは其の社會を汚瀆するの畏あるとにあり然りと雖もたとひ契約勞働者の名義なきにせよ今日の出稼勞働者にして何等契約的要件なきものありや北米合衆國濠太利等に其國禁を犯して移民を入るゝの不德義なるは云ふまでもなし他の諸國に國禁なきの故を以て此種の勞働者を送るは國民として一大恥辱ならざるべからず彼盛に移民を出すを以て名ある伊太利すら出稼人を伯剌西爾に送るとを禁止したるは畢竟國家の面目を保つが爲め已を得ざるの處置を取れるものに外ならざるなり移民に關する立法政策を談ずるもの此に意を注がざるべからず

青年と政治思想

上田敏

現代の大日本帝國は立憲君主制の國である。憲法の精神或は其發布の動機等についてはいろ〳〵見解を異にする人もある樣であるが、それは然し法學上の六つかしい問題で、私は其方面は研究した事がないから知らぬ。兎に角憲法の出來てからの日本と、出來ない前の日本とは非常に違ふ。今日、內閣の國務大臣が政治を行ふ日本は、昔の外戚や武門が政權を握つた日本とは違ふ。其又前の外戚武門が無かつた古代日本とも大に違ふ。今日に於て苟且にも憲法中止等の議論をする人があるならば、其人は非常な大膽な議論を吐く人といはねばならぬ。私から見れば、差當り、國家の安寧秩序を紊る國賊といつても差支なからうと思ふ。

これは言ふまでも無い昭乎たる事實であるが然し世間には此憲法をさほど尊重しない人も偶にあるやうなのは遺憾である。日露戰爭の數年前に、露國の有名なる保守家故ポビエドノスチエフが書いた立憲政治或は代議政體に反對する書物——立憲政治や代議政體は西歐の間違つた考なりといふ事を書いた本——を、或官省の人が飜譯して、之を地方官などに配つたとかいふ噂があつて、確か議會の問題にもなつたやうに思ふ。箇樣な思想を書いた本を官省から地方官に配るといふ噂が假にも立つたのは一部の人士が今日の立憲政體を呪うて居る樣に思はれても仕樣があるまい。日本人は極く小さな事にも國賊呼ばはりをするが、箇樣な事こそ寧ろ國賊といつてもよいので、實に由々しき一大事と思ふ。其等の人は、日本は立憲政體なるが故に政治が遣りにくい、露國は專制政體なるが故に遣りよい、軍備擴張などもどし〳〵出來ると思ふたのであらう。然し日本が日露戰役で連戰連勝したので、さういふ聲も段々少なくなつた樣だ。加藤弘之先生が戰役當時に日本が勝て露國が負けた理由を書いた小冊子を出された。私の考では戰爭は格鬪であるから、那翁のいふ通

り、神は二つの中、軍隊の多い方に加勢する、日本は兵力の用方も巧く、又準備もよく整うて居たといふのが戰勝の最も大いなる理由と思ふ。加藤先生は日本は立憲政體で露國は專制政體である故に日本が勝つたのだと之を一理由に擧げて、大變立憲政體を褒められた。先にポビエドノスチエフに賛成した人なども、此説に賛成した樣である。過つて改むるに憚らず、とにかく思想の進歩として賀すべき事だが、然し數年の間にさう考が異るといふのは、畢竟日本全體に政治思想が乏しい爲めと思ふ。國家とか社會とかいふものは恰かも全く自分より外にある勢力であつて、自分の力で如何ともし難いものであるやうに思うて居る日本人は今日に於ても未だ封建の思想から全然脱却し得ないで居る。此頃憲法發布廿年の祝賀會を催しても、世間一般の人は、まだ憲政の美が完くないといふのは、詰る處、政體といふ機關丈けが變つたが、精神が變らぬ——精神は封建時代で居るといふ意味であらう。一旦立憲政體にしたからには、それを旨くやつて行かねばならぬ。年老つた人々は子供からの氣風を變へることはなか〳〵困難であるが、先づ新らしき人からやつて行かねばならぬ。

然るに近來、封建の思想が殘つて居る父兄、或は多少封建思想のある官人等の考へ出した家庭及び學校の教育が、青年の心に萌出る新思想の勢力を減殺し、從つて立憲政體についての思想なども捗々しく進まぬ。家庭は暫く措き、學校教育について見るに、生徒に對して、市民の義務、權利、責任などいふ事を充分有效に教へてないと思ふ。法制經濟の課目はあるが、それが只法文の解釋、規則の暗記になつて、根本から、普通の政治思想を教へないやうに思はれる。其爲めに今日の青年が如何なる種類の人にならんとするにも、政治思想には極めて乏しいやうに教へられてゐる。其れが長じて一家を經營するといふ事になるから、選擧權を尊重し、或は公共事業に於ける發言權を尊敬することを忘れる。例へば代議士選擧の時には之を棄權して自ら高しとする人が隨分ある、之れは場合によつては許し

てもよいかも知れぬが、一般にいへば、代議士の選擧權を棄てる人は國家に對して不忠であるといつてよろしいと思ふ。然るに自分は選擧權を棄權しながら、やれ議會が腐敗したの、代議士が墮落したとかいつて之を罵倒して居る向もある。代議士がわるいなら、よい人を選び、議會がつまらぬなら、つまるやうにするの權は自己の手中にある。棄權さへせずに、自己のよしと信ずる人に投票すれば、段々よくなつて行くのである。

然しながら、年齢でいふと、今三十四五乃至四十二三の人は、昔の教育を受けながらも、立憲政體になる變り目の歷史を多少知つて居るので、政治にもいくらかの趣味を持つて居る。政友會は絕對過半數を持て居るとか、新政黨問題は如何になりつゝあるかとか、進步黨の改革派と非改革派との爭はどうだとかいふ事位は多少興味を以て見て居る。然し其れ以下の青年に至ては、さういふ記事は新聞に出てゐても讀まぬ人が多い。何故讀まぬかといつても譯も何にもない。政治などは私等の領分でない、私等は自分の職業の事を考へるに急にして、かけ離れた政治の事などに心を勞する暇がないといつて居る。勿論政治といふものは藝術とか宗教とかに比しては人生に於けるの價値は稍々低いものであつて、大詩人の名は萬古に傳つても、總理大臣の名は次代に忘れられるのが多い。然し左樣な絕對觀をはなれて、普通の眼から見れば政治は社會を變化せしめるものである。直接に、又一般に國民に影響し、直ぐ其效の見えるものである。兵力の强弱も、財力の豐否も又普通の道德――風俗習慣の善惡も政治の如何によつて異る。つまり色々の生活問題は、政治と關係がある。社會の一員としてはどうしても政治と絕つことは出來ぬ。關係を絕て獨立した積でも、其れは積りであつて、實際は、さうでない。自分がだまつて居れば即ち其反對の勢力に支配されるといふ事になる。夫れ故に私の考では、いろ／＼の目的で、いろ／＼の職業に岐れるにしても、今の學生は一通りの政治の如何なるものなるかを知り、善良なる市民となつて、責任と

義務とを盡し、同時に權利をも主張するやうにせねばならぬと思ふ。政談演說に狂奔するとか、實際運動に加入するとかいふて、政治熱に浮かされるといふ事は勿論避けねばならぬが、代議士の選擧とか、市政の刷新とかいふ公人の責任は必らず盡すといふ人にならねばならぬ、中學の上級に於てかゝる思想を注ぎ込み、中學を卒業する頃には善良なる市民となり、大學を出る頃には實際に近くなるから、社會の現狀に對する智識を持ち、自分の職業をやりながら、一般の公人たる義務を盡す、さうなれば日本の憲政も漸次完きに近かんと思ふ。私の考ては日本の憲法政治今段々よくなつて來ては居るが、然し青年が今一層政治思想を養成して、今一層憲政の美を完うせんことを切望する。駝鳥が草叢に頭を突込んで、尻を出して居るのを知らぬといふ話があるが、政治とは絕緣したといつて其勢力に支配され盲從して居るのを知らないのは恰度此駝鳥のやうなものである。議會の廓淸も、代議士の人選も、市政の刷新も、國家財政の整理も、つまり日本の發展は皆今日の青年諸君の政治思想の養成によつて出來るのである。(談話)

土耳其近日の政變

朝比奈知泉

亞細亞に興りて、歐洲を震撼したるもの、アッチラ汗あり、成吉斯汗あり、ソリマン二世あり。アッチラ汗は逝たり。成吉斯汗の後、纔に加森の一王國を留めたるも、其の露國に併せられて、已に二三百年。ソリマン二世の勢威方に張るに當りてや、今の澳都維也那を包圍し、力を一時に逞しくしたるも、物換り星移りて、阿多曼大帝國の彊土は漸く縮小せられ、歐亞に跨るの境域、露國に削弱せられ、近き昨世紀の後半に及びては、希臘、羅馬尼、塞爾維、モンテネグロー相踵て公然獨立の邦國となり、勃牙利は唯々屬邦の名を有するも、內治外交共に自主に歸し、ボスニヤ、ヘルツ

エコヴイナは澳の永久占領地となり、其の他サモス、クレテの諸島亦屬領ハ名を存するのみ。土耳其の歐洲に於ける、纔に半壁の江山を保つに過ぎざるも、其の住民の多數は、基督教を奉ずる歐人にして、而もマセドニヤ及びアルバニヤの如き、或は附近小王國の垂涎する所たり、或は伊國の野心を以て臨める所たり。禍亂の起る、旦夕を待たず。列國の大使を遣受せるは、歐の強大國の一たる地位を保持せるが如きも、其の實は歐陸禍亂の源として、列國注視を怠るを得ざるため、大員を派して之に駐留せしめ、土國隨て大使を列國に出したるのみ。

土國は歐の列強に交るや彼れが如く其れ久しく法制の類亦頻年改革せられたるも、大使を遣受する已に永きに拘らず、税權は無論、治外法權なるもの依然外人の掌握に存し、一種奇異の顯象を列強間に呈せり。現皇帝アブヂル、ハミッドは在位已に久しく、列強使臣の間に揉みつ押へつされて、政治の呼吸を解する頗る深く、列國君主中正しく聰明にして智慮あるものゝ一人たり。而して今回の政變、事實皇帝之が張本たるを思ふ時は、頗る興味を感せざるを得ず。

土國曾て憲法を制し議會を開きたるも、人民徒に政權に狂して、實力未だ備はらざるに、強て之を求めんとしたりしかば、皇帝一命令の下に中廢せられたる、事は前々帝アブヅル、アヂス在世の時に在り。帝弑に遭ふて、ムーラット帝代り立ち、銳意新政を行はんとして乍ち廢せられ、其の後を受けたる即ち今帝なり。在位已に三十年、內外の形勢に顧、靑年土耳其黨の實力漸く熟したるを見て、始めて憲政を復したるも、靑年黨は其の領袖久しく跡を英佛諸國に寄せ、志急迫に銳なりしかば、素より皇帝の喜ぶ所たらず。內政の革變に暇なきに於て、列國亦多く外顧に遑あらざるの機に乘じ、澳匈國は突如としてボスニヤ、ヘルツエゴヴイナの占領を變じて、確定領有となし、勃牙利亦屬邦たるを止め、東羅馬利亞と合して獨立の一國たらんとし、茲に伯林條約以來の第三次東方問題を生じ來りたるが、列國は漸く協商を重ねて、問題を澳勃兩國に限局

し、其の解結粗々成らんとするに至れり。土帝が猛然起ちて舊閣臣を罷め、以て今回の改革を斷行したるは、方に此の機會を捕捉したるを疑はず。

事は四月十三日の拂曉に發し、陸軍歩兵一箇大隊は俄に議院を包圍し、內閣の總辭職を求め、內閣は止むなく之に應ぜしかば、英京駐紮大使たりしテフイック、パシヤ首相に命ぜられ、最近希土戰爭の凱旋者として、其の聲譽中外に高きエデイム、パシヤ陸相に任ぜられ、ナジム、パシヤ第一軍團長に、前に內相たりしメンダフパシヤ第二軍團長に補せられ、新內閣は前內閣の政策を踏襲し、立憲政治を維持し、紛擾を鎮定し、財政を改革し、外國との干繋は、親密の默契を本とし、欣て平和の一要素たらんとする旨を宣明したりといへば、今回の事件、土京に於いては無事の收結を告げたりといふべく、其の基本たりし陸軍の翻然爪牙を斂めたるに徵するも、陸軍は本件の器械たりしに過ぎず其の首腦は皇帝に存するや、明瞭なりと謂ふべし。皇帝既に動亂の中樞たり。皇帝の意の儘に事の定まる上は、土耳其の內事復た大に憂慮すべきものなからん。唯々青年土耳其黨此の一敗に屈せず、再擧三擧を謀るとは固より之あらん。而かも兵力の完く土帝の手に在る間は、復た策の出づる所なきは無論なるも、サロニカに駐屯する第三軍團だけは、形迹の頗る怪むべきものあり。皇帝が威望隆盛のエデイム、パシヤを擧げて、陸相たらしめたるもの、蓋し亦深く玆に慮る所ありしに出づる歟。テフイック、パシヤに至りては、一箇溫厚の君子人、曾て獨逸に大使として、獨人と婚し、二十年外相の職に在り、昨年出てゝ英京駐紮の土大使となりし人なり。其の夫人には依然基督教を守らしめ、土の習俗に從ひ、交際社會には出入せしめざるも、自ら第二妻以下を娶らず。謹厚篤實を以て、久しく土の外政に任じたる介間の士なれば、土廷に首相として議會に對し、又締盟列國に對するも、能く調節を保ち和平を維ぐの器たるを疑はず。

土廷の外事に於ける、澳勃兩國の交渉粗々結局を告げたる今日、稍々小康を得たりと謂ふべし。新內閣

の專ら力を用ゐるべき所は財政の問題なり。幸に澳國よりボスニヤ、ヘルツエコヴイナに對する賠償を得て、勃國の賠償は露國に對する軍費賠償金と相殺するととなりたれば、直接の入を國庫に得ずと雖も、由て露國の催督を免るを得たり。今日以後若し議會の權能を善用して、財政を振作し得ん乎、歐亞兩陸に跨りて十幾所に屯駐する軍團も、相當の給與を得て、大に國土防衞の用を爲すべく、歐陸の好地形を占有して、多く物資に窮せざるの邦、亦殖產興業の隆なるを期すべし。唯々此の點に於て最も要とするは、財政當局者に人物を得るに在り。テフイック首相は以て土帝に仕ふるの好首相たるべきを得し、土民に臨むの好藏相たり、好農相たるを得ざるべし、況やエテイム、バシヤに賴りて陸軍を鎭制す、其の節度號令は固より間然なかるべし、其の土國財政の歲出根源として之を調整するに於ては、更に別種の伎倆を要すべきをや。土帝固より二人を制馭して、相扞格するならからしむべし、亦財政に通ずるの人たるを聞かさるを奈何せん

要するに東歐の諸國は、西歐と大に國情を　にし、議會ありと雖も、內閣ありと雖も其の名多くは實と相副はず。選擧は每に干涉に出て行はれ、政府必ず多數の黨援を得るを常とす。現に君主若くは爲政家に大有力者あるに非ざれば其の國常に振ふ能はず。其の人存すれば其の政擧り、其の人亡すれば則ち止むといふもの免れざるの數なり。希臘トリコピー氏を喪ひ勃牙利スタムブーロツフ氏を失ふて兩國の進運頓に挫けたるが如き、羅馬尼今皇カールの明后を得て國勢隆々現に東歐唯一の邦たるが如き正しく其の例證なり。土國議會を開くも、亦多きを其の議員に求むべからず。幸に土帝の在位年久しく、歐大國の間に揉まれて、半生の經驗を得たり。絕代の明臣輩出を期すべからずとするも、帝豈爲すとある能はざるの凡器ならんや。而して今次の改革全く其の宸衷に發したゝとせば、土帝や實に見上げたりと謂ふべし。

然れども土廷の改革を遂げたりといふは、全く中央首都に於てのみ。是より先き常に紛擾を免れざるマセ

ドニヤの如き、將た西偏アルバニヤの如き、事態は依として、今猶昨の如し。其の變亂朝夕を測らざる、岌々乎として其れ危し。此の如き形勢の下に居て、列國と大使更換の一列に班す、列國が大使を萃遣し、而も常に第二流に落ちざる人物を選任して之に當つるもの豈故なしとせんや。我邦の如き歐の列强と此の如き競爭に入るの謂れなきも、米國と同じく一の公使を置きて、列國の形勢虛實を視察せしむるもの、豈其の要なしとせんや。區々治外法權の撤廢式は列强に影響をすべきを憂慮して、友交を求むるの殷なる土國の至情を斥くるが如き曖夢の談のみ。

文藝と實人生

(自然主義と思想界の新調)

金子筑水

近頃の評壇には、大分文藝の本質に關する根本疑問が提出されてゐる。例へば文藝批評の本質とか、文藝と實人生との關係とか、乃至自然主義運動に先だつて起こつた思想界の新運動と自然主義との關係とか、孰れも文藝の本質に關する興味深い問題である。此等の興味深い問題が、例の有耶無耶の裏に葬むり去られるは殘念である。あらゆる方面から、其の行ける所まで充分に論評して貰ひたい。自分も多少諸子と違つた意見を持つてゐるから、簡單に其れを玆に述べて見たい。

其一

一口に文藝批評といへど、其の中には色々な意味が含まれてゐる。たゞし其の中の眼目となるものは、言ふまでもなく、第一作の內容又は精神、第二作の形式即ち內容の寫しかた書きかた、第三作者の用意又は態度等に歸着する。若し第三を第二の中に組みこんで考へれば、文藝批評の眼目は、要するに作品の內容と形式とに歸する。煩雜を避けるため、玆には單に作の內容又は精神の批評のみに就いて考へて見やう。

作品の內容とは、必しも描寫された事件や材料のみを指してはゐない。事件や材料は如何にもあれ、作品

が全體として賞翫者に與へる特殊の感銘、即ち作者が傳へんとした眼目の精神、それが所謂作品の重な內容である。作品に尊ぶ所は、主として此の感銘である印象である。此の感銘此の印象に失敗すれば、其の作品は、殆ど大部分の失敗たるを免れない。そこて疑問が起つてくる。如何なる感銘如何なる印象を與へるものが優等の作て、如何なる感銘如何なる印象を與へる作が劣等と批判さるべきてあらうか。感銘とか印象とかにはおのづから價値の優劣高低が有る。斯くの如き優劣高低を計る尺度といふものが果たして存するてあらうかと。これが文藝批評の難問題てある。近頃唱へられる印象批評にも一應道理は有る。作品の眼目の印象を忠實に會得する事は批評の大事てある。取わけ今の文壇には、却つて此の種類の批評が必要てあらう。されど或特殊な作品の或特殊な印象を解釋するばかりが文藝批評家の能事てあつたならば、文藝批評家は要するに作家の奴隷たるに過ぎない。如何なる感銘如何なる印象を與へる作が優等てあり將た劣等てあるかを明示しないかぎり、文藝批評はまだ充分其の爲すべき事を爲したとは言はれない。文藝批評の大事はむしろ此の點に存する。先頃の「早稻田文學」に出た片上天絃君の「文藝批評と人生批評」と題した論文には、よく此の意味が表はれてゐる。トルストイのモーパッサン論を引用して、文藝批評はどうしても人生批評をくゞつたものでなければならないといふ結論てあつた。正當な結論だと思ふ。慾にはもう少しつっこんて論じて貰ひたかつた。

作品の內容（其の印象又は精神）の優劣高低を批判する一定の標準ありやといふやうな事は、昔から屢々繰返へされた疑問てあるが、夫れは見やうによつて、斯かる標準が有りとも答へられ、又は無いとも答へられる。つまり此の疑問は、美の內容はそも／＼何ぞやと問ふと同じてある。トルストイは其の藝術論の中に、在來の美學者の美の內容論をすべて罵倒して、窮極眞美とは人生の精髓（感銘）を書いたものだと論じてゐる。人生の精髓を餘分に現はしたものほど優等な作品

て、之れを標象する事が少ないものほど劣等な作品と批判される。文藝の内容は、おほまかに言へば、人生其のもので、人生の精髓に觸れると然らざるとが、作品の優劣の決せられる第一義であるとは、最早動かすべからざる眞理である。作家が先づ人生に就いてどんな感じを持つてるか、人生をどんな風に見てゐるか、自家の感じを正しく誠實に傳へてゐるか、其等が作品に優劣の品位が定まつてくる第一義である。人生を離れて文藝なく、人生の批判を離れて、文藝の批判は成立たない。

人生の精髓をいよ／＼深くいよ／＼餘分に書き出したものほど上乘の作品で、之れを離れる事がいよ／＼遠いものほど低級の作品であると見て、さて此れだけの意味に於ては、文藝の内容の批評に一定した標準が有るとも言はれやう。併しながら此れだけの意味に於ける一定の標準は、極めて抽象的な漠然たるもので、實際には殆ど何の役にも立たない。蓋し眞の文藝の内容は人生の精髓たるべき事が明白な事實であるにしても、さて其の人生の精髓が何であるかは至難な問題である。人によつて人生の精髓と見る所が違ふ。トルストイは無抵抗の愛と觀じ、ニイチエは不敵の力と觀じてゐる。一方に生活の疲勞、荒寥、悲慘が近代生活の精髓であると觀ぜられるに對して、他の一方に於ては、此の無趣味な荒れ果てた平原に一帶のオアシスを發見し、新しい生活の興味を開拓する所に人生の精髓が存するとも觀ぜられてゐる。普通に謂ふ趣味の相違は、最高義に解釋すれば、人生觀の相違其のものである。人生觀の相違は、やがて人格の相違である。人生の精髓が千古不變とこしえに同一であるかの如く思ふは間違つてゐる。古代人が人生の精髓と觀じた所と、近代人が其れと觀じた所とは甚しく違つてゐる。人生は所謂エルデンでザインではない。時代と共に變化するが、むしろ其の實相ではないか。既に斯くの如く、人によりて、又時代によつて、人生の精髓と觀ずる所が夫れ／＼に違ふとすれば、文藝の内容の最高標準も亦夫れ／＼時代と人とによつて違ふことになる。此の方面か

ら言へば、文藝批評には、一定の標準が無いといふが正當である。

文藝の創作、賞翫並びに批判に、上に述べた人生の精髓といふやうなものが、或は意識的に或は無意識的に、其の根底と成つてゐる事は、到底拒むべからざる事實である。作家は必しも此れが人生の精髓だと思つて書いてはゐまい。賞翫家も亦必しも此れが人生だと意識して、詩や小說を讀まないかも知れない。いや多數の作家讀者の中には、此れは明らかに人生の眞相に緣遠いと知つてゐる底のものを書いたり讀んだりする事も澤山であらう。されど全體を概括して言へば、作者が面白いと感じ、讀者が佳作だと感ずる場合は、必ず意識的にか又は無意識的にか、其の文藝の內容が平生自分に取つて實人生の精髓と觀ぜられたものに觸れたからである。人生の精髓などいふ言葉が耳ざわりならば、少なくとも此れは人生の一面だ、人生の實相に觸れてゐる、ア丶そこが人生だといふ感じが、所謂美感の成立する根底である。故に如何に隱さうとしても、作家の感じの中に、おのづから其の人生觀は現はれてくる。又讀者の批評の態度で、其の人の人生觀もおのづから推察される。面白いといふ感じの大小優劣其のものは、畢竟實人生の精髓だと觀ずる所に觸れるの大小優劣に外ならないからである。興味の對象は人生である、否興味とは人生其のものである。人生觀とは感興其のものにして理屈ではない。感じの塊り又は感興の總合が人生觀其のものである。

斯く考へ來たれば、文藝批評の本質はおのづから推察される。人生のエッセンスに觸れるの大小が、作品に優劣の等差の生ずる標準ではあれど、人により時代によつて人生觀が異なるゆゑ、批評の標準は必しも一定不變とは言はれない。無數の異なつた標準が互に相爭ひ、其の間に優勝劣敗の法則が行はれて、批評の標準其のものも、次第に時代と共に變化して行くのである。批評の標準の爭鬪は、やがて人生觀と人生觀との爭鬪其のものである。人生批評を離れて眞の文藝批評は成立たない。眞の文藝批評家は、どうしても人生の

批評家でなければならない。文藝の內容が人生其のものではないか。

第　二

文藝の內容は人生其のもので、其の精髓に觸れゝば觸れるほど高い文藝であるとすれば、吾人はこゝに文藝と實人生との極めて密接な關係に想及ばざるを得ない。文藝が何等かの意味に於て實人生に關係があり、全く實人生を離れて成立ち得べきものでない位は、何人にも明白な事實である。されど兩者の關係の程度（親密さの度合）に就いては、今の作家や批評家の間に、種々異つた意見が行はれてゐるらしい。文藝と人生との間に何等かの關係は有るべきが、其れにしても、文藝は文藝で、人生は人生である、必しも兩者が離れて獨立し得られない筈はないと。斯ういふ風な考がまだ盛に今の文壇に行はれてゐる。此れが果たして正當な考であらうか。どうも自分には疑はれる。勿論議論はどちらでもよい、實際の事實が孰れかを證明してゐれば、强ひて論說する要はないが、それにしても、問題が問題であるだけ、此の點は、出來るだけ明瞭にしておく必要がある。

文藝の內容又は精神が人生其のものであることは、前に既に述べたとほりである。二者不離の關係は、此の根本的事實から明白である。吾人が或作品の內容を面白い興味深いと感ずるは、それが少なくとも實人生の一面であつたり、人生の精髓に觸れてゐると觀られたり、乃至それが實人生の縮圖と考へられるからである。作品全體の印象が、吾人をして多少人生に想及ぼさせるからである。若し作品が斯ふいふ種類の印象を缺いたならば、吾人は其れによつて何程の興味も感ぜないであらう。世人就中在來の美學者評論家の中には、藝術品が與へる特殊な感興は、全く實人生の關係を離れて、藝術品みづから特別に造出す底の感興であるかの如く考へてゐる者が多い。即ち吾人が或作品の內容を興味深いと感ずるは、其れが人生の關係、眞相、精髓を示してゐるためではなく、單に作品がさういふ特殊の感興を起こさせる力を備へてるからだと信じてゐ

る者が多い。此の種類の考が世人をして文藝を實人生に縁遠いもの、むしろ沒關係なものと誤解させた本てはないか。されど顧つて思ふに、多少にても人生に想及ぼさせる事なくして、單に作品が作品として與へる感興とは、そも〳〵如何なるものてあらうか。藝術品は内容を缺いた不可思議な感興を與へ得るものてあらうか。斯くの如きは、餘りに不可思議な考方てはないか。

故に作品が與へる感興は、要するに其れが多少實人生を思ひしのばせるからてある。實人生を思ひしのぶ事それが吾人の興味又は感興と名けるものに外ならない。前に興味とは人生の事てあると言つたも、此の意に外ならない。故に實人生の關係、實相、精髓といふやうなものが興味の中心て、文藝が與へる特殊の興味は、此等人生の關係、實相、精髓等の上に成立つもの、ひとへに實人生の上にのみ成立つものと言はれやう。此の事は次のやうな事實によつて證明されてゐる。或特殊な時代に於て深い感興を與へた作物も、時代の推移につれて、人生の實相又は精髓と感ずる所が異なつてくれば、最早吾人に深い感興を起こさせない。例へば、圓滿主義、樂天主義、幸福主義の強く現はれてゐる作物は、概して近代の人に何程の感興も與へない。同じモーパッサンの作でも、トルストイに取つては、博愛主義に合したものだけ面白く興味深いものと感ぜられて、其の外の作は一向に拙劣なものとしか感ぜられない。即ち興味は實人生と共に動くてはないか。實人生其のもの丶上に興味が成立つと言はるべきてはないか。

斯く考へ來たれば、文藝と實人生とは、極めて親密なものと考へられる。蓋し文藝は實人生を地盤として、殆ど必然的に其の上に結果した産物て、實人生を除き去つては、因つて以て文藝の發生すべき地盤が無いのてある。文藝は文藝として、實人生を離れて單獨に發生すべきものてはない。文藝を然るごとく考へるは、餘りにロマンチックな見方てあるか、然らずんば、餘りに散漫な考方てはないか。藝術と實生活とは違つて

ゐるにしても、兩者を恰も無關係な縁遠いものゝやうに思ふは、藝術を餘りに神聖視して、人間生活より之れを遠ざけるか、然らずんば、全然之を無視する結果ではないか。藝術が人間の生活であるかぎり、人間の實生活が其の土臺となり、此の土臺の上にのみ發生し、之れと共に動き、之れと共に推移すべくして、決して實生活を離れて、空に成立つべきものとは思はれない。兩者の關係は、普通に考へられるより、一層親密である事が明白であらう。

斯く文藝と實人生との密接な關係を考へ來たれば、更に文藝が實生活に及ぼす影響に論及するが至當な順序であらう。文藝は實人生に對して、本來何等かの役目を持つてゐるか。實人生の上から見て、文藝は本來之れに何等かの職分が有るであらうか。言ふまでもなく、之は文藝の本質に關する重要な問題である。されど此の問題は、多少本論の主意とは違つてゐるから、わざと此の問題に就いては茲に論じない。たゞ下の數語を附記しておくに留めやう。文藝の實人生に對する關係に就いては、二の互に異なつた意見が世間に現はれてゐる。一方の論者は、文藝と實人生とを密接に關係させて見やうとはしない、文藝は文藝で、人生は人生である、強ひて其の間にあやふやな目的論的（テレオロジカル）觀察を試みる必要はないと主張する。然るに他の一方の論者は、文藝が實人生から必然的に胚胎したものであるかぎり、其の實人生に對する關係が如何に不明であらうとも、文藝が廣い意義の人生の一部として存立するだけの根據が無ければならない、文藝が文藝として、人生の一分たるだけの理由が無ければならないと主張する。此等の爭論も、要するに、趣味、人生觀、人格の相違から起こる必然の爭ひで、簡單な議論だけで、容易に決せらるべき問題ではない。

第三

以上の批評論並びに文藝對人生論で、文藝と實人生との關係は如何に親密であるかゞ略々察知される。文藝は時代と共に變化し、各時代はそれ〲特殊な文藝を產出する。特殊の時代精神を切離しては、其の時代

の文藝は考へられない。少なくとも、文藝の內容は時代と共に變化し、時代精神を異にするにつれて、文藝の內容は變化するものと見るが至當であらう。此に於てか吾人は、一時代の文藝は、必ず其の時代精神に立脚して起こり、(因つてまた倒に時代精神を造り、又は之れに影響し)決して時代精神を離れて、單獨に成立するものでないと主張することが出來やう。玆に今の文壇の實際問題が有る。

　先月の『早稻田文學』に島村君の「二潮の交錯」といふ漫筆が載つてゐる。自然派文藝と之れに先だつて又は之れと並んで現はれた思想界の新傾向とは別々て、決して兩者を混同視すべきではないといふ主意らしい。此れだけの意味に於ては、自分は島村君の意見に異存はない。文藝と實人生とは、どうあつても同一ではない、文藝は文藝として、實人生とは違つた特質を備へてゐる。故に文藝上の運動は、飽まで文藝上の運動で、それがやがて實生活上の運動ではない。隨つて自然派文藝は、一種の文藝上の傾向で、それが直に數年來の思想界の新傾向其のものと混同せらるべきではない。これだけの意味あひは明白である。然るに世間往々此の正當な理義以外に脫して、故に文藝上の自然主義は、數年來の思想界の新傾向とは、何等の關係もないもの、全然沒交涉なもの丶如く誤解する者が多い。彼等は文藝上の自然主義と、思想界の新傾向とは、全く偶然握手したもの丶如く誤解して、兩者の間に存する親密不離な關係を見落す傾がある。斯くの如きは、文藝上並びに思想上、ゆ丶しい誤解ではないか。

　此の事を明確にするには、先づ數年來の思想界の新傾向とは何ぞ、又其れと文藝上の自然主義とは、如何なる點に於て、親密不離な關係が有るか、其等を精に檢べなければならない。數年來の思想界の新傾向を概論することは、無論難事であるが、簡單に言へば、在來一切の舊思想、舊道德、舊習慣に不滿を感じて、いづこにか他の方面に人生の眞義を求めんとした煩悶苦悶の精神に外ならない。尙一層簡單に言へば、疑惑又は懷疑又は未解決などいふ精神が、最近の思想界の

傾向であつた。此等の傾向が、大體に於て、動もすれば在來の價値等級を轉倒し、又强く在來の圓滿主義、幸福主義樂天主義等の思潮に反抗して、むしろ實人生の寂寞、苦痛、暗黑面等に著しく鋭敏となり、更に絕望又はデカダンの傾向まで進んだ事は拒むべからざる事實である。舊思想の束縛を脫し、實人生の活劇に目醒めて、著しく懷疑的となり、眞面目となり、やゝ絕望的に成り來たつたが最近の傾向である。實人生の眞相如何、人生の眞義如何。これ思想界の新傾向の裡面に橫はる根本の意識的又は無意識的疑惑である。此の根本義を逸する者は、到底今の思想界を理解することが出來ない。

斯くの如き思想界の新傾向と、文藝上の自然主義、少なくとも高義の自然主義文藝との間には、極めて密接な關係が有る。高義に謂ふ自然主義文藝も、おのづから其の內容と形式との兩面から觀察されやう。今の評壇には、孰れかと言へば、多く形式論が持囃されて自然主義文藝と言へば、單に客觀描寫の文藝といふ風に理解される傾きがある。無論其れが文藝である以上描寫法は重大な問題であり、殊に自然派文藝に取つては、及ぶべきかぎり客觀的描寫に努めるが本來の性質であらう。されど之れがために內容は何でもよい、たゞ描寫法さへ客觀的であればよいとは言へまい。客觀的態度さへ取れば、必ず人生の眞實が描寫されると思ふは間違つてゐる。作家の感受性や眼識や人格の相違につれて、其のレンズに寫る人生には、おのづから廣狹、深淺皮相眞實等の相違が有る。其の形式だけは如何に客觀的であつても、其の內容即ち作品全體の印象が、僅に人生の皮相に觸れたつまらないものであるかぎり、斯かる文藝は、決して强く吾人の感興を引くものではない。極端に言へば、先づ作家の感じた感興其のものが、旣に特殊の感受性眼識人格の發現にして、如何に主觀の姿を隱さうとしても、其れは到底行はるべき事ではない。故に自然派文藝に相當な價値が有るとすれば、形式上客觀的描寫が如何に大切であつても之れと並んで、又は遙に之れにまさつて、描寫される

内容其のもの（作品全體の印象）に特質が無ければならない。斯く言はゞ、いや自然派文藝には一定の内容は無いと答へる人も有らう。無論さう答へても差支はない。具體的な内容が、初から自然主義文藝に備はつてゐるわけではない。されど暫く具體的内容を離れて、大體の事實を概括すれば、人生の眞相、精髓、又は少なくとも之れに近きものが、此の派の文藝の主張ではないか。舊思想や舊理想の束縛を離れて、直に活きた人生の眞相に面接せんとするが、其の本來の主張ではないか。今日まで現はれた所謂自然派の文藝が、どれほどまで此の主張を實現したかは別として、此の派の文藝の内容は、概言すれば、此の一點に存すべく、此の特殊の内容を看却して、單に客觀描寫といふ形式にのみ拘泥した作品は、初から其の價値のほども明白である。

事實吾人が今日の作を讀んで多少の興味を感ずるは、其れが客觀的描寫であるといふよりは、むしろ其の全體の印象が、或は多く或は少なく、人生の眞とか精髓とか感ぜられる所に觸れるからである。今の批評家の所謂「觸れる」とか、「何となく人生を考へさせる」とかゞ事實の證明ではないか。此の内容此の印象を除き去つて、果たして今の文藝にどれほどの價値が有らうか。自分は茲に繰返へして述べたい。文藝上の作品が吾人に興味を與へる所以は、其の内容又は印象が、吾人をして多少人生の眞相又は精髓を想浮べさせるからであると。

さて今の文藝の書かんとする内容は、之れを最高義に解釋すれば、恰も最近の思想界に流布しつゝある精神其のものではないか。今の作品に齎ぶ印象は、恰も思想界に傳播しつゝある感じ、考方、見方其のものではないか。否、文藝界と思想界とを全く別種の無關係のものゝやうに考へるが初から間違つてゐる。作家の感じや見方や、讀者の感じや考方や、一面からは、其れが直に思想界の實際の傾向である。思想上又は實生活上特殊の傾向あればこそ、其れがやがて文藝上の特殊な傾向として現はれるので、實生活上又は思想上何

等の根據もなくして、文藝が空に地盤なしに發生し得べき理由がない。故に概括して言へば、今の文藝の內容は、最高義に解釋すれば、思想界の新傾向其のものである。例へば、今日の文藝に現はれてゐる懷疑的精神なり、破壞的精神なり、在來の價値等級轉倒の傾向なり、乃至一班の社會觀なり人生觀なり、すべてこれ思想界の新傾向其のものではないか。文藝が思想界の新傾向を、思想界の傾向としてよりは、一層深く又一層强く之れを表現したといふ事はあらう。されど思想界又は實生活上の地盤を離れて、今の文藝が空に成立したとは考へられない。吾人が今の文藝の與へる印象(內容)に興味を感ずるは、其れが多少吾人の人生と感ずる所に想ひ及ぼさせるからである。實生活上又は思想上感ずる所觀る所が、恰も文藝によつて一層明らかに示されるからである。隨つて實生活上又は思想上吾人に何等特殊の傾向なければ、吾人は或特殊の文藝に何等の興味をも感ずる理由がない。此の事實は作家の方面から言つても同じてある。作家の興味の感じ方は、やがて作家の人格の表現である。

斯くの如く考へ來たれば、文藝上の自然主義と思想界の新傾向との間には、到底絕つに絕たれない深い因緣ある事が明白である。吾人は文藝を文藝として、恰も實人生には無關係のもの丶如く考へる事が出來ない。實人生に緣遠い文藝は、所詮遊戲的文藝である、輕薄な文藝である。吾人よもつと眞地目な文藝を望むのである。

(完)



現在に於ける海外一切の状勢殊に我國と緊密の關係ある清米獨等の消息をば最近の新聞雑誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

海外消息

三月二十九日巴里より

無念庵

●謹啓　當月中の最も大なる事件は英國の海軍擴張騷ぎと中米の叛亂に有之候、米國新大統領の就任演説もなかく〵に注目を引きたるも、稍々抽象的なるの感ありしためか、別に之と云ふ反響も無之かりし樣に候。

●中米に於ける戰亂　中央亞米利加に於ける强國の一たるニカラグハ共和國は去る十日サルバルドル國の砲艦とコト、トンの冲にて開戰し、遂に大敗せりとの報あり、續いてホンヂユラス、グアテマラ等も之に參加すべく、如何なる干渉が、何處より來るとも戰爭は中止せられまじき樣子なる由に候が、彼等が如何にして開戰するに至りしかは電文簡にして知る事を得ざるも、一昨年來の行懸りより之を見ればニカラグハ共國の專横なる所置が、他の小共和國の反感を買ひたる結果と見られ候。

▲ニカラグハ共和國は南コスタリカと境し、北はホンヂユラス及びサルバドルと接する中米中の一等國にして、面積四萬九千方哩、人口五十萬、黑人及び亞米利加印度人最も多く、白人は僅々十萬に過ぎず、氣候炎熱なれども、貿易風に調和せらるゝ爲め不健康にはあらず、カリビアン海に面する地方は降雨多く、野菜に適す、產業の主たるものは農業にして加琲も名高し、商業も甚だ盛にして、一千九百〇五年には輸出七十三萬四百五十八弗輸入四十九萬二千百八十四弗あり、曩にニカラグハ湖を利用して大西洋より大平洋に出づべき運河を開鑿せん計劃を立て、之に着手したりしが半途にして中止せられ候

▲同共和國は一千五百〇二年コロンバス第四回の發見に係はるものにして、長く西班牙の配下にありしが一千八百二十一年に至りて獨立を宣し、一千八百二十三年中米聯合共和國に加はり一千八百三十三年まで之を繼續し居たり。其後コスタリカとレチン市及びガナカスト州の奪合を始め爭闘絶え間なく、其他ホンヂユラス、グアテマラ等と常に爭端を開いて中米を擾亂して今日に至れり。

▲サルバドル共和國はホンヂユラス領土內の一地點に獨立し、其面積僅

にニカラグヮの六分ノ一に過ぎず、爲にニカラグヮの侵略を恐れて常にホンヂユラス、に依りて其獨立を保主せんとしつゝあり

▲ホンヂユラス共和國も又一千八百三十三年の分裂以來盛に武備を修め國力を充實して、ニカラグヮの向ふを張り居れるを以て、ニクラグヮの現大統領セラヤ氏が中米統一の野心あるを見ては衷心穩かならず、兩國は機會ある毎に衝突し居たりしが、一千九百〇六年には、兩國の境界問題に於て戰端を開き、ホンヂユラス、サルバドルの聯合軍は連戰ニカラグヮの兵を破碎して、遂にニカラグヮより和を講ずるに至りし事あり、爾來ニカラグヮは常に之を遺恨に思ひ益々武備を修めて、ホンヂユラスを屈服せしめんとしつゝありしかば、今回の戰爭は畢竟ホンヂユラス對ニクラグヮの戰爭と見て可なるべしとの事に候

▲而して之に對する米國の態度は如何といふに、米國政府は逸早く、墨其哥に向へ中米共和國々際會議開催を提議し、墨其哥又之に同意し彼等に干渉せん模樣なる由、

▲是等諸共和國は常に紛議を事とし、其都度米國の厄介となるを常とせしが、今回も又戰爭長引くに於ては、米國は軍艦を派遣して彼等に一大痛棒を喰はすべしと云ふ。米國は中米紛爭の種に絶えず、先年中米共和國國際事務局なるものを設置し、一切の紛議を之に依りて解決せしめんとしたりしが、其效果擧からざるを以て、ホンヂユラス若しくはニカラグヮの何れかを保護國とし、以て全中米の平和を維持せん意向ありとも噂せられ候

▲果して然りとせば由々しき大事なり、我日本國には甚しき影響を及ぼさざるも、米國には然からず「中米の紛亂は直接にパナマ運河に大影響を被らすべく、米國の通商上看過すべからざるものなれば、此際米國政府は思切つて、確固なる平和維持策を講ぜざれば後悔臍を噛むとも及ばざるべき時機來らん」と紐育の一新聞は申し居られ候、之れ固より當然の事なるも、倚て米國が愈々中米中の一强國を其保護國とせん曉には、墨其哥が之に對し能く默々たるを得べきや疑問なり、要するに中米は早晩一と騷動起すべき地として我日本の如きも今より注意を拂ひ置く必要あるべくと存じ候。

●英獨海軍擴張競爭騷ぎ　之れ固より珍らしき事にはあらざるも、如何に競爭擴張熱の著しきかを示すべき實例現はれ候。英國海軍卿マクケンナ氏が去る三月十六日の議會に於て獨逸の海軍計畫を説き、獨逸は一九一二年に於てドレッドノート型十四隻を有するに加へて、又新に三隻を準備中なりと説明し、英國海軍は如何との質問に對し海軍卿の答辯稍々悲觀的なりしかば、さらでだに海軍熱の盛なる英國下院は玆に騷然として、自國海軍計畫の薄弱迂遠なるを責め、遂に政府の不信任を提議する者あるに至りたり。殊に保守黨側の首領バルフォア氏は之を以て政府攻擊の好材料となし、ドレッドノート型八隻を本年内に起工に着手するにあらざれば國民を滿足せしめ能はざるべしと論じ、大に與論を

喚起して政府を乘取らん準備中なりとの事に候。

▲常に軍備擴張に反對せる新聞紙も又之に應じて遂に英政府の海軍策の不安心なるを說くに至り、「タイムス」の如きも、政府が更に附加せられたる戰艦（ドレッドノート型）四隻を明年より起工せば、非常の利益ありと說きたるは、必竟本年より着手せんとする意志なきを明言したるものに外ならずと論じたり

▲之れ獨り院內にあけるのみならず、院外の國民は勿論遠く殖民地に於ても物議を起し候、即ち濠洲の人民は眞先きに騷ぎ立ち、諸新聞紙は盛に海軍熱を煽り立てたる結果遂に濠洲よりドレッドノート型軍艦一隻を母國に贈與すべく提議せる由、「マタン」紙特電に相見え候、

▲其他ニユージーランド殖民地及び加奈陀も又母國の海軍に不安を抱きそれぞれ戰艦建造に應援せん決意あるを政府に表明せりとの事に候。今や英獨海軍競爭熱は其極點に達し容易に鎭まるべき樣子も相見えず。

▲英國政府は去月エドワード陛下が伯林へ御出の時、隨行の外務次官及び海軍部內の有力者をして獨の外相と會見せしめ、今後の海軍擴張計畫に關し、双方妥協せん內意あるを洩らさしめたりとの事に候が、それかあらぬか、獨逸外相シエン氏は、ビユロー宰相に代りて、帝國議會の豫算委員會に臨み、英國は英獨兩國の海軍擴張計畫及費用に關し、獨逸と內約を結ばん意あるを暗示せられしも、未だ公式の提議を受けたる事なし、故に我政府は之に關する態度を定むる事を得ずされど我海軍計畫は何れの國民に向つても危害を與ふるが如きものにあらずと演說せられ候。

▲英國政府が費用の都合上製艦工事の一部を來年度に延期せんとせるは、即ち獨逸の如上の態度につき、何等かの返答を俟ち居りたるが爲めなるが如く見受けられ候。アスキス氏は議院に於て、「獨逸が若し、製艦率を增加し、工事を急ぐに於ては我政府も之に對して急速に計畫通りを遂行すべし、我政府は國民よりも海軍擴張の急務なるを認む云々」と明言せられたるより見るも其眞意を推知する事を得べく候。

●墺塞の關係

墺國はヘルツ.エゴヴエナ及びボスニヤの二州を合併し、土耳古をして之を承認せしめたる事は、前便に申上げたるが、該問題は、未だそれだけにては納まらず、二州合併はセルビヤの最も好まざる處にして、土耳古が墺土協約に依りて、愈々之を承認するを見るや、塞爾比も又二州に自治を許さゞるに於ては、墺國は宜しく塞爾比にも土地（償を爲さゞるべからずと宣言するに至れり。塞爾比は露國の平和的[]に對し「若し二州合併が墺土二國にのみ關係せる問題ならずして、廣く歐州列强に影響する者なりとせば、塞爾比も又之に容喙すべき權利あり」と答へたり。

▲されど英國を始め列國は、塞爾比が飽迄も其主張を固守するは、偶々以て塞爾比を孤立せしむるに過ぎず、須らく二州の合併を承認し其賠償

としては何等の要求をなさず、靜に經濟上の何等かの利權を墺國に請ふに若かずとの意見に一致し、それ〲塞爾比に壓迫を加へたるため、塞爾比も遂に其初一念を放棄し墺國と友誼を回復する事に決したり。列國は塞爾比に干渉の上墺國に提出すべき調停案を作成し、之を墺國に送らしめたるが、其内容は未だ知る事を得ざるも、一昨二十八日巴里の某處に達したる電報に依れば、墺國は列國の調停案に頗る滿足なる意を表し、塞國も又喜んで之に一致する事となりたりとの事に候。

▲常に戰雲暗澹として漲り居たりしバルカン半島も、之に依りてひと先づ一段落を告げたる譯にて候

●波斯問題と英露　最近テイラン通信に依れば波斯の國民黨は今や愈々其勢力を失墜し、其根據地たるタブリッツをすら守る事を得ず、官兵は亂暴を極め、國民黨員を迫害し、其妻女を姦する者あり、或は其家に火を放つ者ある等の悲慘なる有樣となり、諸方の志士涙を呑みつゝ再擧の時機を俟ちつゝありとの事なるが皇帝は依然として其の頑強なる態度を改めず、飽までも非立憲的政策を執らんとしつゝあり、露國の半官報ノヴオオエ、ヴレミヤは過日の紙上に於て、露國の護衛兵増加を主張し、英露の干渉は免かるべからずと論じたり、されど英露の干渉は容易ならず、波斯の動亂が更に甚しきを加ふるとも、英露の出兵は容易に見るを得べからず、英露兩國は先年締結せる英露協約に依りて、全く相互地等の地位と利害とを確認し居るが故に、波斯の現狀維持は必竟波斯の不幸にして、英露兩國に國際的私害を及ぼさず、英露兩國は波斯が如何に亂るゝとも、相互均等の利害をさい享有し居れば、安心し居るべしと論ずる者も有之候が、そは餘りに皮肉なる觀察と申すべく候。

●カストロ氏歸國　前ベネズイラ共和國大統領カストロ氏は、久しく獨逸にありて欝勃たる不平の氣を遣り居たりしが、本月下旬再び歸國せんとの報を得たり、本國に於ては氏の到着を待ち、之を捕縛せんとしつゝある由、可惜有爲の士を、徒爲にして終らしむるは惜なからずや

●英領濠洲政廳の海軍特設計畫　英領濠洲政廳が其母國政府に戰艦一隻寄附せんと申出てたる事は別項記載の如くなるが、同政廳にては母國政府の英國濠洲艦隊以外又別に英領濠洲政府專用の一艦隊を特設せん計畫を立てたり。之れ敢て英王陛下の艦隊の地位を奪はんとてにはあらず、

▲該計畫に依れば、該艦隊は六隻の水雷驅逐艇と九隻の潜航艇及び練習船二隻とより成る、驅逐艦は費用辨ぜざるを以て、之を廢止する由、又水兵の教練に就ては、未だ何等定まる處なし、當局者の一人は母國政府に之を依賴せん意向なる由なるが、母國政府は、濠洲政府の此擧を悦ばざるものゝ如く、或は不裁可に終るならんと云ふ

▲されど濠洲政府にては該計畫は餘程進行したるものの如く、久しき前、以上の軍艦築造をシドニーに於てすべきか、或は英本國に於てすべきかを討議しつゝありしが、防備大臣ピアース氏は例を日本艦隊に取り、始めは英本國に於て之を築造せしめ後ろに自國にて之を築造する運びに

許可次第に築造計畫に着手すべしとの事に候、由、

▲水兵及び士官の練習方法に就ても随分議論沸騰したらしく、先づ第一に有爲の青年數名を本國に留學せしめ、是等の青年をして濠洲海軍の教官たらしむべしとの説に一致したりといふ。

▲濠洲政府が、何故に自國專用の軍艦を特設せんとするか、まさかに、米國獨立戰爭の當時を聯想する神經家もなかるべけれど近來一寸耳新しき事なるより之を玆に記載致し候

●米國新大統領と輿論　全然ロ氏の政策を踏襲すべく期待せらるゝタフト新大統領は先づ新任式演説に於て、内外の喝采を博したり。されどハースト氏主宰の一新聞は、之を以て最も愚かなる演説なりとし、其主義政綱に關して縷々數萬言を費せるも、要するに何事も云ひ居らず、吾人は斯かる茫漠たる就任演説に喝采する能はず、と冷笑し、然しタフト氏は賢明なる政治家なり、徒に前大統領の手先きとなり、其主義精神を奉體して、諸般の政務に向はんとするが如き土偶にもあらざるべしと散々に惡罵を加へたり。

▲以上は黄色新聞の論評にて、固より取るに足るべきものならずと雖も、之れタフト氏側の不平連の意見を代表するものに候。

▲タフト氏がロ氏と全然其政策を踏襲すべく默約あるものは　日本人問題及び排トラスト問題なりと傳へられ候、就任早々其眼前に横はれる關税改正及び幣政改革等に就き氏が如何なる態度に出づべきかは、吾人の最も興味を持つべきものに候

▲タフト氏は三月の就任式に於てせる演説中、亞細亞問題に關し其最も熱誠なる意見を披瀝して曰く、「吾人は亞細亞移民より起るべき弊害は、成るべく最小にせん希望を有するも、之れと同時に、米國領土内に來りて國法の許す範圍内に適當の業務に從事する外國人に對し人種的反感を起すものあるを好まず、吾人は斯の如き場合には、あらゆる手段を以て之を防止し若しくは處罰せざるべからず、又吾人は合衆國裁判所に於て合衆國政府が外人の條約權を主張するを得べき權利を政府に與ふべき法律の制定を希望する者なり」と。之れ實にタフト氏が日本人問題に對する意見を暗示したるものにして昨年末オイスターベーに於けるロ氏との會見の際に成りたる默約の結果なりとの事に候。

▲タフト氏は關税改正問題に關しては、三月十三日を以て特別議會を召集し、現行ヂングリー關税法修正を討議すべしと云へ、其方法としては、内外生産費の差額に等しき關税を課して内地の産業を保護し、現今の如く或者は輕減を要とし、或者は増加の餘地ある等の不平等なからん事を期すべしとて、多年の宿約を果さん事を暗示したり

▲ヂングリー關税法とは一八九六年クレブランド氏の緩和關税法を改正したるものにして、マッキンレー氏の關税法と同じく保護貿易を標榜せる者なるも、其税率に至りては更に著しき高度を示せるものなり。然るに近年高度の保護關税の爲に物價騰貴し、中流以下の人士が日常の生活に苦しむ事甚しく、然かも一方に於ては「トラスト」の如き保護關税の爲

に外國品と競争する憂なく、益々獨占的利益を壟斷するが如き有樣となり一般米國人は之を以て保護國税の改正を必要とするに至れり。然のみならず保護關税は外國に於て米國品に重税を課せらるゝ事となり、反て輸出を妨げ一般實業家に不利益なりとの批難もあり、遂に共和黨及び民主黨共に關税の緩和を必要とするに至り、タフト氏は飽までも內國產業の保護を旨とする範圍に於て關税を出來得る限り緩和せんと主張して、大統領に當選せられたるものなるが故に、今回は是非共其約を履行せざるべからず。然るに共和黨の領袖多數者の意見は常に極端なる保護に傾き居るが故に、トラスト側の激烈なる反抗運動に出遭はゞ、タフト氏も思ひ切つたる緩和政策を取る事難かるべしと巴里在留の某老政治家は申し居り候。

▲何れにせよ近き將來に於て改正の內容も公表せらるべければ、詳細の事は其時に讓るべく候早々。



天の羽衣論

青柳有美

風早の三保の松原の或る松に懸けられありしを、伯龍と申す漁夫が取り納めて、家の寶となさばやと存じ候ひつる天人の羽衣なるものは、今も尙ほ遺りて、靜岡縣阿倍郡三保の松原所在の御穗神社寶物として、其の社殿に納めらる。

予、或る年の夏、たま〳〵東海道の勝區を遍歷し、三保の松原に至りて御穗神社に參拜し、特に社司に請ふて今に同社に傳へ遺る天人の羽衣の斷片なるものを親しく視るの機會を得し事あり。

世の多くの人、未だ御穗神社に納めらるゝ此の天人の羽衣の斷片を親く視ざる前に當りては、必ずや、その或は鳥の羽毛の如く、或は翼の如きものなるを想ふべしと雖ども、實際は必らず。一ト摘みの刻煙草に類似せるものにして、而も純黑色なり。世人が想像によりて畫く天人の羽衣に關する觀念は、白色にして且つ鳥の羽翼に似たるものたるを條件とするが、故に、若し、御穗神社の所傳にかゝる天人の羽衣の斷片なるものが、果して、後世、僞にするところある香具師の僞作なりとせば、之を白色として鳥の羽翼に似たる製作とし、世人の想像を滿足せしめんとするや論無し。然るに、その全く世人の想像するところに反し、純黑色の刻煙草一ト摘みに彷彿たるものあるより推論すれば、その昔より天人の羽衣として傳へられたる實物に相違なく、確に天人の羽衣にして、後世香具師の僞作に非るは、自ら明瞭なるべし。然らば、天人とは如何なるものにして、その遺せる羽衣とは抑々何ぞや。既に此くの如く、今日なほ其の天人の羽衣の遺物を存し、又その遺物にして眞に正確なるものなりとせば、天人が駿河國三保ノ松原に遊べりとの口碑を目して、唯徒に一條の神話なりとし、之を詩歌の材料たらしむるに止めて一笑に附し去るべきに非ず。

　貝原益軒その他の諸家のうち、天人が三保ノ松原に來りて天の羽衣を遺せしとの故事は、大巳貴命が天の羽車に乘りて其の妻をもとめさせ給ひしを、後世に至り天人の事に附會し、羽車を羽衣に誤まり傳へし也と做すものあれども、此くの如きは、三保ノ松原にある御穗神社が、大巳貴命及び其の妃を祠れるものにして、昔時朝廷の崇尊篤かりしより、牽强附會せるに過ぎざるべく、毫も信ずるに足らざるなり。然れども、社司の言に據るも、天人の羽衣に關する記錄は、最近六十年前を初めとし、御穗神社が過去三回以上の火災によりて悉く亡ぼされ、今に遺れるもの全くある無く、その果して神代に起りしや將た人皇に入りての出來事なるやをだも明にする能はざる程なり。况んや、その正確なる年代をや。然りと雖ども、謠曲『羽衣』は、

結崎左衛門太夫秦元清の作るところにして、元清の死歿せるは、康正元年即ち西暦千四百五十五年なるを以て、其の事の東山時代以前にありしや明かなり。

御穂神社々司が、先代よりの傳説なりとして語るところによれば、今の松原にある天人羽衣懸けの松は、昔よりのものに非ずして、その昔に天人が來りて羽衣を懸けたりといふは、今の三保ヶ岬の鼻にありし一小島のうちに存せる大樹なるも、その島は何れの時にか陥落して今や跡無きに至れるもの也。而して、漁夫伯龍は松樹の枝に懸けられある羽衣を觀るや、之を奪ひ去らんとせしも、天人は力爭して容易に之を與へず、そのまゝ身に着けて天上に飛行せんとせるより、羽衣の片袖は斷られて漁夫の手に抑留せられ、遂に傳へられて今日に至り、その初めに當りては約方一尺に餘れる布地なりしも、悪事災難除けの護符になるべしとの迷信より、神社は古來之を裂ひて希望者に分與せる爲め、今は僅に一ト摘みの刻煙草の如きものを殘すのみに至れるなりと。

予、具に其の純黒色にして一ト摘みの刻煙草に彷彿たる天の羽衣の遺片なるものを觀るに、是れ全く毛織物の製織に用ひられし黒く染めたる獣毛なるが如し。予は唯自ら其の天の羽衣の遺片に手を觸るゝを禁ぜられ、況んや其の一小部分を取りて之に火を點じ、依りて以て之より發する臭を嗅ぐこと能はざりしを遺憾とするものなれども、その一見黒き刻煙草の如きものあるは、明に黒く染められたる獣毛に相違なきを示すものにして、若し之を火中に投ぜば、必ずや獣毛に特有なる異臭を放つものあるべし。天人が東海駿河國三保の松原に天降りて、松の梢に懸けたりといふ天の羽衣なるもの、毛織物たりしは、此くして必ずしも推斷するに難からず。

西暦四五百年頃より千四五百年頃までに至る十世紀間に於ける歐洲人の服裝を案ずるに、今日行はるゝ洋服の如きツッポ及び股引様の衣服にて身を固めたるが上に、成年期に達せる男子は、必ず緩濶にして裾長く外套に彷彿たるものあるマントルを羽織りて、肩よ

り長く懸くるを常とせるものなるのみならず、殊に十一世紀より十五世紀に至る五世紀間は、このマントルの上に、更に金色燦爛たる黄金の他の粧飾を加へて、綺羅を飾ること專ら流行し、頭髮の如きも之を短かくせず長く首の邊まで垂るゝを以て誇となせり。されば、五世紀より十五世紀に至る歐洲人のその廣濶綏悠なる長きマントルを風に翩々として翻すを觀ば、此る慣習を目にしたること無き異邦人は、之を目して以て天人が天の羽衣を風に翻して地に降れるものに非ずやと做すも、あながち笑ふべきに非る也。殊に況んや、マントルには金色の燦然として人目を眩するが如きものあり、其の顏色白皙にして鵠の如く、金髮豐にして長く頸に垂るゝものあるを仰ひては、日常天日に曝されて其の皮膚の色銅の如くなれる日本の黄色海人のみを目にせる無智の漁夫伯龍たるもの、之を天人なりと思はざらんとするも、豈に得べけんや。日本に於て、その己れより皮膚の色白き人種を目するに天より降れるものなりとなせる事例は、既に神武天皇の昔にあり。天皇の東征するや、當時本土に穴居せる土蜘蛛の如き蠻族は、天皇を目するに天孫たるを以てせしが、これ全く其の皮膚の色、本土の穴居人種よりも白きものありし爲めなり。然らば、三保の松原の漁夫伯龍なるものが、その白皙人種たる歐洲人を見て直に之を天人なりと做し、その纏へるところの外套に似たるマントルを以て、かね〴〵傳へ聞く天の羽衣なりと信ずるに至れるは、敢て怪むに足らざるなり。而も、廣濶なるマントルの、悠やかに風に飜るは、天の羽衣に關する想像に符合するものありて、一層此の信念を確實ならしむるに於てをや。然り而して、十一世紀頃より十五世紀頃までに至る歐洲人常用のマントル外套は、言ふまでも無く毛織羅紗なり。是に於てか予は以爲らく、三保の松原の鼻にありし一小島中の松の梢に懸けられありて、漁夫伯龍の掌中に其の斷片を遺せりといふ天人の羽衣なるものは、十一世紀より十五世紀に至る間に於ける一歐人のマントル外套にして、天人とは、是れ白膚金髮の歐洲人を指すものなるべしと。

葡萄牙人バスコダガマが亞弗利加南端の希望峰を迂回して印度に達せしは、西曆千四百九十八年にして、謠曲『羽衣』の作者結崎左衞門太夫秦元淸の病歿せるは、西曆千四百五十五年なるが故に、元淸の病歿以前たる十五世紀の初期若くは更に逆りて十一二三四世紀の頃に於て、歐洲人が、舟路、早く日本東海の駿河沿岸に來れりといふは、稍〻信を措き難きものあるに似たりと雖ども、之を歐洲史に徴するも、バスダガマ以前に海路歐洲より亞細亞に來りしもの必ずしも絕無なるに非るのみならず、マルコポロが元の世祖忽必烈の朝廷より以太利の故國に歸來し、ゼノアの幽囚中にありて有名なる彼の旅行記を著せしは、十三世紀末の事にして、そのうちにヂパングーなる日本に關する記事あるより察すれば、その頃既に漂流或は其の他の事情により、日本に寄航せる歐洲人あながちに無しといふべからざる也。更に又、マルコポロの旅行記を讀める歐洲人の、遙にヂパングーの國土豐富なるを聞き一攫千金を夢みて冒險の雄志禁じ難く、半ばは陸路に依り半ばは海路に依りて日本探檢を思ひ立ちしもの無しと限らざるに於てをや。殊に況んや三保の松原と三保ケ岬とを其のうちに有する駿河灣は、時に一日二十海里の速力を出すことある北赤道海流の餘波たる黑潮の北進するものによりて洗はれ、一たび之に乘ずる時は、勞すること多からずして、遠洋に航せらるゝの便あるに於てをや。されば、バスコダガマの希望峰迂回に先てる十五世紀の中頃なる結崎元淸以前に於て、偶然或は一定の目的を以て、歐洲人の駿河灣に來れること無しといふべからざるなり。既に太古の世に於てさへ、伊弉諾伊弉冉二柱の御神は遠く高天原より降臨し天の浮橋に立ちて大八洲國を生み成し給へる事跡あるに非ずや。

三保の松原附近は東海の勝區なり。たゞに明治の今日に於てのみならず、古るき寧樂朝時代よりの勝區なり。既に萬葉集田口益人太夫の歌に

廬原の淨見の崎の見穗の浦の
ゆたけき見つゝ物念ひも無し

とあるほどにして、その白砂の青松を載せて海に泛べる如き絶好の風色は、何人と雖ども歎賞して飽くを知らざるところ也。加之、その東南より突出せる延長約一里の三保ヶ岬によりて取り圍まるゝ清水港は、東西二十町南北二十三町に渉り、深さ十五尋以上に及び、實に駿河灣中の良港たるに恥ぢず、海波の常に穩かなるものありて、船舶の停泊するに便し、現に特別輸出港として、近年、加奈太太平洋鐵道汽船會社太平洋郵船會社日本郵船會社其他の大船巨舶の、同港に寄港するもの歲々益々多きを加ふるほどなり。數年前、予が三保の松原に御穗神社を參拜せし當日の如きも、帝國軍艦磐手號は、この清水港に停泊して、實彈射擊の演習を行ひつゝありたり。

此くの如き絶好の風色に加ふるに、此くの如き良港を以てす。日本太平洋沿岸に漂流し若くは探檢に來れる船舶の、假令ひ今を去る六七百年以前の歐洲人を載せたるものなるにせよ、一たび駿河灣に入りて、髣髴の間に白砂青松にうづもるゝ三保の松原を望まば、更に清水港に船を進めて茲に繫泊し、更に又其の船員は上陸して三保の絶景を觀賞せんとするの念を起すに至るや必然なり。俳人鬼貫の句に曰く

春風や三保の松原せいけん寺

と。三國一の富士山を其の背後にして三保の白砂翠松を浮かべたる清水港は、實に天下の絶勝にして、又本土中部地方東岸に於ける殆んど唯一の良港なり焉。

依りて思ふに、西暦十五世紀の中頃以前に於て、駿河灣の遠近を彷徨せる一歐洲船あり、偶然か將た有意的にか、兎に角清水港に入りしが、餘りに周圍の風景佳美にして、殊に遙に望める三保の松原の絶景なるに憧憬し、乘組員の一人は自ら其の地點に上陸して親く探勝せんとするの志を起し、端艇に櫂を操りて本船より離れ今は全く陷落して其の跡無きも、當時三保ヶ岬の鼻にありし一小島に漕ぎつけ、茲に其の乘り來れる端艇より出てゝ上陸し、先づ着し來れるマントル外套を脫して松が枝に懸け、軟風を五體に入れて休息し、徐ろに四圍の光景を觀賞し、田口益人太夫の所謂「一見

穂の浦のゆたけさを見つゝ』恍惚として『物思ひも無』く、歸ることを忘れつゝあるところに、忽然一漁夫の現れ來りて、その松が枝に懸けあるマントル外套を奪ひ去らんとせるより、茲に力爭となり、その一歐洲船員は、之を渡さず漁夫は之を取らんとし、爲にマントル外套は裂けて一部を漁夫の手中に遺留せしも、その歐洲船員は、急ぎて斷れたる外套を身に纒へるまゝ、遂に再び繋ぎおける端艇に乘じ、涙の露の玉蔓かざしの花のしほ／＼とにはあらざるも、蒼然として虚空あなたの本船に立ち歸りたりといふが、是れ即ち三保の松原に於ける天人と其の羽衣とに關する口碑の由來なるべし。但し、その時案より音樂きこえ靈香の四方に薰ぜる害なく、聞こえたるは櫓のギシ／＼せる音にして、薰ぜるは洋人のバタ臭き惡臭のみなりしならんか。然り而して三保ヶ岬の鼻にありしといふ天人が天の羽衣を懸けたる松樹の存在せる一小島は、下りて西暦十八世紀初期に於ける寶永年間の富士噴火に際し、富士帯火山脈の地層に生ぜる地殻の變動により、陷落して全く其の影を今人の目に止めざるに至れるものなるべし。

予が天の羽衣論は、これにて終局に近づけり。即ち、天人とは是れ西暦十一世紀より十五世紀の間に於ける白膚金髮の歐洲人にして、その來りて東海駿河灣の三保の松原の松が枝に懸けし天の羽衣とは、その當時の歐洲人が緊着せる洋服の上に羽織り流すの慣習なりし廣濶にして裾長く、翩々として風に飜へる趣ありし燦爛たる金色の飾粧を施せる黒色羅紗のマントル外套なり、而も、この事の起れるは、謠曲『羽衣』の作者結崎左衞門太夫秦元淸の時代を去る餘り遠からざる西暦十五世紀初期の前後にありしもの丶如く、元淸は其の當時世間の口に喧しく膾炙せる風聞を捕へて以て之を詩材とし、巧妙纎緻にして莊嵩なる潤飾を加へたるものならんか。

當時若し種ヶ島歐人漂着以後に於ける如く、一般に歐洲人種に關する智識普及し、その消息を知るもの多かりしならば、如何に無智なる駿州鮮村の一漁夫と雖

ども、忽ち其の歐人たるに心付きしなるべきも、その未だバスコダガマ希望峯迂回以前の時代なるに於ては、日本人に取りては歐人は實に視るも聞くも初めてのこと故、直に之を目して以て天人なりとし、その纏へる羅紗のマントル外套を以て天の羽衣なりと想ひ誤まりしも、決して責むべきに非る也。古代にありては、天に疑ひ無き如く、又人にも疑ひ無かりしなり。

フローベルの文と想

文學士　川島金五郎

佛蘭西近代の文豪であるギユスターフ、フローベルが、其の文章の爲めに苦心慘憺たりしとは、世人の熟知する所である。評論家テエヌの談る所に據ると、彼れはDecouer(搖る)と云ふ一語を獲んが爲めに、三週日を費したと謂はれ、復た其の作『エロディヤ』を結ぶに當つて、Alternativement（更代に）と云ふ副詞を以てしたのを、非常に矜つて居つたと謂はれて居る。蓋は、此語に存ずる二ヶ所のアクセントが、如何にも能く首級を更代に運ぶ二人の奴隷の有様を、さながらに表出することが出來ると思つたからである。フローベルには、作家の文語に於けるは、恰も畫家の色彩に於けるが如く思はれたのである。而かも、一語の調は、次に來る他語の調に依りて自から變ぜざるを得ざる故に、彼れは其の選擇したる文語を更らに配列して文章を成さしめんが爲めには、徹宵其の文を誦じて飽く所を知らなかつたと謂はれて居る。彼れ以爲らく、完全に構成せられたる字句は、吾人の呼吸のリズムに順應すべき者であるとさへ謂ふて居る。彼れの文章に腐心せし片影は、之れに依りても想見するに足るべきである。

併しながら、一代の文豪として世人から敬仰せらるゝ所以の者は、單り文章にのみ因りて得らるゝ者でない。作家でも作品でも、一時的の聲譽でなく、歲時の

經ると共に、次第に其の價値の認識せらるゝに到るのは、文章もさることながら、更らに數層重要なる者が存して居らなければならない。乃ち、作家と作品とが著るしく人生觀の一致を示すと云ふとが重要で、斯かる者でなければ、決して世人の記憶に止まる事は出來ない。フローベルの死後の名聲と威勢とは、文學史上這般の定理を確める鐵案である。フローベルの作品程、終始を一貫して其の人生觀の一致を示す者は、多く他に類例を見ざる所である。處女作『ノッフエムブル』の初行から、臨終の作『ボヷール、エ、ペクシエ』の終行に到る迄、終始異なる所なく、其の懷抱する人生觀を示して居る。同一の哲學的感想が、靑年期の作と晩年の作とを一貫して居ることは、恰も同一の太陽が一日の朝夕を遍照するが如くである。

然らば、彼れの懷きし哲學的感想とは如何なる者であるか。之は、彼れの一生を通じて變はる所なかりし厭世的觀念である。彼れの懷きし厭世的觀念は、深く考究せられた者で、決して彼の一派の文士者流に觀るが如き伊達の者ではない。獨逸に於けるショーペンハウエルの如く、希臘に於けるヘラクリタスの如き者で、人生の惡業は人生に伴隨する事情より來る者ではなく、人間本然の性より來る者であると云ふて居る。野蠻人でも文明人でも、古人でも今人でも、懷疑の人でも信仰の人でも、皆な其の慾望の遂に空なるを見んが爲めに生活して居ると云ふのである。命運の神は、人一代の云爲の前に否定的符號を置いて居るから、總體は所詮敗亡たるを免かれないで、其の一生の努力の大なれば大なる程、豫定せられたる敗亡の大なるを致さゞるを得ないと云ふのである。斯の如き感想が此の敬仰すべき技巧家の著作全體に到徹し、此題目を解說せんが爲めに彼れは勗めたのである。迂遠でなく、抽象でなく、具體的例證に據りて、此れを現はさんとしたので、彼れの著作六卷は異常なる情熱を湛えて、此感想を攄べし遺物である。

彼れは已に斯かる厭世的觀念を以て事物を律する故其の作中に現はるゝ人物は、其の行爲の非すべき者な

きに拘はらず、自から敗亡破滅に了はらざるを得ない。彼れの感想は、單純なる個人主義と異なるが故に、作中の人物の悲慘は、其の過失より來るに非ずして、本然の性質より來る。彼れは、此の感想を遣るに、特殊の人物と異常なる事態とを用ゐず、人物も尋常の者を採り、其の外圍の事情も亦た普通の者を以てして居る。されば、其の人物は個人的の者に非ずして代表的の者となり、其の敗亡も象徵的となつて、自から其れ等の屬する全階級の敗亡となる。『マダム、ボヷリ』に於けるボヷリの如き、『レデュカーシオン、センティメンタール』に於けるフレデリック、モルーの如き、皆な下級の人民を文雅に導かんが爲めに、高貴なる努力を爲すに拘はらず、終に悲慘なる末路を遂ぐるに到つて居る。『クール、サンプル』の老婦人然り、『ル、タンタシオン、ド、サンアントアンヌ』の隱者然り、『サラムボー』のマトー然りと謂はざるを得ない。之れ皆な愍むべき吾人々類の至高の向上心を體現する者にして、同時に悲慘なる滑稽劇を演ずる者と謂はざるを得ない。

フローベルが、斯かる厭世的觀念の由來と其の主張とを究めんが爲めには、近時刊行せられたる四卷の『書簡集』に據るべきである。此れを讀めば、彼れが人生を斯かる者と斷ずるに到つたのは、世に往々ある詩學的な慰みてはなく、根底ある人生觀たることが容易に分る。由來、藝術的作品の人を動かす力は、其の誠實なる邊に存ずるのである。彼れの作中の人物が、人を動かす力あるは、彼れ自身の生命から鑄出せられて居るからである。之等の手紙に依りて案ずると、フローベルは、生れながらにして『傷つけられた心』を有するので、今日より見れば、彼れは怖るべき癇疾の爲めに幼少の時から惱まされて居たのである。癲癇は漸次彼れの强健なる身體を冒しつゝあつたのである。加るに、四圍の境遇は彼れの意に反する者が多かつたから、如何に抱負の大なる者があつたにしろ、其を完ふすることは到底彼れには出來なかつたのである。彼れの文章が、其斷片と雖も抒情的分子に富んで居るのには、何人も驚かざるを得ない。彼れは散文家であるけ

れども、沙翁やバイロンの如き情熱を有つて居つた。

　フローベルはルーアンの一外科醫の息子で、十八歳にして法律研究の爲め巴黎に上りし時迄は、父の病院裡に暮して居つた。彼れの自修室は、患者の運動する內庭と、父の弟子達が解剖の實習室とを瞰下することが出來た。故に彼れの幼年時代並に青年時代には、彼れの夢は往々憐むべき病人の姿や、腐亂した死屍の忌な印象の爲めに擾さるゝことがあつたらう。自修室に、其の愛讀書なるホーマー、エスキラス、ヴージル、ダンテ、ユーゴーに耽けて居る彼れは、父の弟子達が死屍を控えながら喫煙し嬉戲する光景を視て、如何なる感想を懷いたらう。外科醫なる父は、其の子の作家たる使命を解せず、法律修業の爲め、パリーに遊學せしめた。當時の手紙には、斯かる錯誤の處置に對する反抗の意氣が、明かに現はれて居る。彼れの手紙に據ると、彼れは十五歳にしてロマンチイシズムの爲めに魅せられて居つたが、幾許もなくして之れを脫する爲めに痛く惱まされて居る。斯の如く一致せざる感想や、周圍の影響を蒙つて、彼れの一生は永き苦痛の連續となつたのである。而かも、此苦痛は努力に依りて輕減し得べき事情より來る者でなく、自己の存在と云ふ其の事から由來する者であると悟るに到つた。彼れは早熟なりし幼年期より、其の成熟の晩年に到る迄、嘗て此愁訴を口にしないことはなかつた。

　彼れの忌憚なき厭世主義は決してヱルテルのそれの如く、疲憊せる恐嘆ではない。彼れの主張は感情的の者にあらずして、初めより智的の者である。彼れの耽つた、甘くして而かも若き悒鬱は、道德的性質よりも、寧ろ悟性より來る者である。此點に於て、彼れは彼れと同じ色を帶べるバイロン、シャトブリアン、ミュッセー、ボーデレールのそれの如き時代症とも云ふべき者とは、自から異なつて居る。テイヌ、ルナン、バテロー、バスチユール等と時代を共にしたフローベルに科學的傾向あるは、自然の數で決して訝むには足らない。彼れは自己の痛疾より一般の疾病に推及し、彼れ自身の經驗に據りて廣き聽想を檢證し得る生理學者に

も比すべき幸機を有して居つたから、吾人は彼れの作品に於て、人事の眞意義の說明に接觸する感がある。

斯の如き科學的傾向と、熱情に滿てる哀愁とを一身に倶有するフローベルは、實に心理學上の畸形兒と見做さゞるを得ない。十九世記の後半より、科學が人類行爲の有力なる支配者となりし事は、何人も認むる所であるが、科學は單に物質的情態を變化せしめし許でなく、吾人の見解並に心的法則をも變ずるに到つた。此れに據ると、宇宙間の事物は總べて條件附きである。心作用と雖も此法則を脫することは出來ないと云ふ觀念を是認せざるを得ない。此の觀念は一見甚だ單純にして左程の影響を及ばすが如き事はないやうであるけれども、深く察すると此中には思想界の革命をも萠すべき者が含まれて居る。此觀念を是認すれば、吾人はテエヌやセントビユーブと共に、一定の法則が文學上の事象をも支配し、劇詩や小說や詩歌の如き者も、草木の開花に伴ふ條件と同樣なる條件の下に生起する者であると思惟せざるを得ない。此法則は、政治にも宗敎にも伴ひ、人種邦國家族の榮枯盛衰をも律し、復た吾人の智識をも感情をも支配する者である。フローベルが現代に期待せられし所以の者は、人々の心に存する斯の如き思念を明かに論ひしが爲めてある。

併し、如何に嶄新なればとて、如何に切實なればとて、厭世的觀念は今の世に於ては一種の病的觀念として遇せられて居る。フローベルにして、唯だ斯の如き失望の使命をのみ宣する者であるならば、彼れは決して世人の尊敬を多く買ふに足らなかつたらう。彼れには此れ以外の使命がある、敎條がある、見地がある。吾人は此れを假りに名けて宗敎と言はふ。彼れの書簡の中に、アルフレッド、ド、ミユッセーに關して次の如き言がある『彼れは宗敎を缺いて居るが、洵に惜むべき事て、宗敎は吾人に缺くべからざる者である』と。彼れの意を察するに、此の愍むべき人類社會の中にあつても、自己の利益と慾求とを超越せる或者に、吾人の全力を捧ぐる事が出來れば、必ずしも高貴と悅樂とを享受することが出來ると感じたらしい。彼れが如き完

全なる深刻なる厭世觀を懷きながら、奈何にして斯の如き最も勇ましき拒否を敢てし得たのか、一見矛盾の如く思はるゝけれども、決して然うでない。試に思へ、世に最も樂觀的と稱せらるゝ基督敎の信仰心の如きも、世事と命運に對する厭世的觀念に胚胎する者であるのを見れば、思ひ半ばに過ぐるだらう。

假りに數步を讓つて、フローベルの信念に矛盾があるとした所で、吾人は彼れが如き傑作を出さしめた論理の錯誤を嘆美せざるを得ない。彼れの宗敎は文學である。彼れは實に文學に耽溺せし者である。ルーアンの都門に近きクロアセーの矮屋に籠居して、セイヌ河畔を逍遙する外には殆んど外出せず、齡三十にして彼れは、縱令滿足は出來ずとも、能ふ丈け完全なる作をものせんと潛思した。斯くして出來上りし者が『マダム、ボーヴリ』である。此作の中には、文藝家としての彼れの理想は名殘なく示されて居る。所謂當代の成効など〻云ふ事を眼中に措かず、利慾の念などは全くなく、忠實なる作家としての諸態は、自から此作の中に露はれて居る。此作を讀めば、作者としての謹嚴なる良心、困難に堪ゆる忍耐、溢るゝばかりの創作的智力等が明かに窺はれる。彼れは此作をものせんが爲めには、徹宵一睡も爲さず、翌朝に到りて名殘多き筆を擱くを例とした。其の頁毎に讀書子をして落涙を禁ぜざらしむるが如き節多きも怪むに足らない。彼れの作は、パスカルの『パンセ』モリエツルの『ターチユーフ』ヲ、ブリユエツルの『カラクテール』等と供に、佛語の存せん限り世人の玩賞を享くべき者である。文藝に向つて、彼れが如き情熱を有せし者は、未だ嘗て世に莫かりしと言ふべく、洗練又た洗練、遺漏なきに到つて漸く其筆を擱いたのである。之れ彼れが三十年間、斷えず紙筆に親みしに拘はらず。其の作品の少なき所以である。

フローベルの文章のスタイルは如何なる者なりしか。これは容易に證明し得べき者でない。世人は常にスタイルなる語を使用するけれども、未だ之れに定義を下せし者あるを聞かない。或人は對絕的正確を云ふ者

なりと解するけれども、他の人は獨創的の不正確を云ふ者であるとも說いて居る。前者に從へば、フエネロン、ビユツホン、ルツソーの如きは、其の體を得た者であらう。後者に隨へば、サン、シモン、ラブレーの如きが、其の體を得た者であらう。斯の如く列擧せし人々の名を見ても、何れを是とし孰れを非とすべきか、容易に斷ずることは出來ない。一體、書くと云ふことの一義は、觀念を文字に表はす事であるが、觀念はさながらに文字に寫すことが出來る者であらうか。スタンタール、メリメの如きは、眼の感覺を文字に致すは不可能の事であると斷言して居るけれども、フローベルは之れを肯定して居る。フローベルは、字句の間に外形と色彩とを示す能はざる者は、散文家が抽象的觀念や情緒を言ひ現はし得ざると比しく、手腕の未熟なるが爲めであると言ふて居る。彼れはメリメを以て職責を解せざる者となし、自から之れを解決せんと勗めたのである。

然らば、作家としての職責とは何を云ふのであるか。フローベル以爲らく、作家たる者は、先づ第一に智的感識を、特に發達せしめなければならない。一語〱切り離されたる文字が作家に對してトーンの價値を有することは、恰も繪具皿に於ける色が畫家に對してトーンの價値を有するが如くである。故に文字は凡べて、技巧を重ずる作家に依りては、承認せられたる有形無形の價値を有する者である。品位ある文字を使用すれば自から貴く、下品なる文字を使用すれば自から賤からざるを得ない。斯の如き差別は、其の語の有する意義に存する者ではなくして、其の語の有する音色である、アクセントである、其他種々の解說し得べからざる由來があるからである。斯の如き語に就いて、恰當の者を見分くるのが藝術家の職分であるが、斯かる感識は唯だ經驗に依るの外はない。乃ち一つの眞理、一つの形體一つの感情を的確に言ひ表はす唯一の文字を見出すに足るやうな文字生理の感識を發達せしむるのが、作家たる者の職責であると謂つて居る。フローベルと氣の合はざるデユーマの如きは、彼れの文字撰

擇に傾注する努力を、其の結果より見て次の如く謂ふて居る。『フローベルは一小函を造らんが爲めに、森林を探伐する巨人の如し』と。されど、斯の如き評言はたゞ/\デユーマの道德家にして、其の爲す所を結果より打算する作家たるを示すのみて、未だ藝術家たる眞面目を解せざる言である。

『藝術は自己充足たらざるべからざる者て、決して方法として遇せらるべき者てない』と觀念したフローベルは文藝技巧家の優なる者て、其一點一劃をも苟もせざりし作家てある。彼れはアクロポリス壁畵の斷片を見ても、全光景の妙えなる完美を偲ばざるを得ないと謂つて居るが、彼れの文章に對する要意も亦た斯の如き者てある。彼れの使用する精鍊的確なる文字の連續に依りては、讀者は其の描く所の事物を想見せざるを得ない。彼れの散文は、事物の完全なる代用物である、否な事物其者に化せしやの感がある。『作者の作品に於けるは、尚ほ神の宇宙に於けるが如し。神は宇宙の何所にも在まさる所なきも、而かも其の姿は那邊にも見る能はず。藝術は唯だ自然にのみ次位たるべき者なるが故に、其の作家は恰かも神の宇宙に於けるが如き態度を持して、其の斷簡零墨の裡にも、秘れたる觀念を窺はしめざるべからず。』と獨言して居るが、彼れの苦心は實に此邊に存したのである。吾人が前に彼れの宗敎は、文學に對する渴仰であると謂つたのも、必ずしも失當の言てはあるまい。

現代人物評論（十六）

新渡戸稻造論

△新渡戸稻造氏

三宅雪嶺

札幌農學校から色々變つた人物が出た、隨分多能なのがある、人並はづれて多能のもある、中にも最も多能なのは第一期に第一番て卒業した荒川重秀氏てあらう、氏は何ても出來ぬ事は無い、何をやつても或る程度まて進む、樣々の事をして今は俳優となつて居るが、そ

れも相應に遣りこなして居る、素人藝とは思はれぬ程である、が荒川は何であるかと問はれては、人は少しく返答に苦む、餘りに多能で多方面である、新渡戸氏はこれほど廣く無い、これほど多能で無い、それだけ又或る事に於て深い處がある、幾層か進んで居る、が荒川氏と比べてこそ多能では無いが、多能は則ち多能である、俳優になつて舞臺に現れることは出來まいが、殆んど行くとして可ならざる無きの有様である、しかし長所は實に此處に在ると共に短處も亦之に伴はぬとはせぬ、これまで氏に成功といふ事があり、人氣を集めた事があれば幾何か之に依つて居る、が非難があるとすれば同じく之に依つて居る、

多能は生れ付であつて不器用な連中の眞似の出來ぬものである、若し生れ付の多能を引き纒めて自在に活用し運用の妙を得たならば、如何なる邊迄進むか計り知られぬ、が之を引き纒めることは容易でない、甲に臨むも可、相應に之を成し遂げる、乙に臨むも可、相應に亦之を成し遂げる、次いで丙丁に及ぶ、皆それ〳〵相應に成し遂げる、が動もすれば其間統一を失ふの恐が無いでは無い、大なる車を輓かしむるには六馬を驅りて進む、けれども之を御するの宜きを得なければ、六馬却つて面倒である、新渡戸氏は僅に或る邊まで六馬を御するの力がある、併し時としてその一二を逸せしむる事無しとはせぬ、別の諺を引かば、二兎を追ふもの一兎を獲ぬといふ事がある、二兎を追て二兎を獲れば之に越した事はない、世には時として斯かる人がある、三兎を追て三兎を獲るのもある、併し多數は一兎をも獲ざるに終る、新渡戸氏は畢竟何を贏ち得るであらうか、今日までの處未だ判然言ふことが出來ぬ、殖産の業務に當つても宜し、農政學を擔任しても宜し英語も宜し、校長としても宜し、社會教育家としても宜し、他にもまだ宜しい處がある、が凡てを如何に引纒めるか將來如何なる邊に落ち着くべきであるか、人聊か之が判斷に惑ふ、自らは相當の思慮あるに相違ない、或は究極宗教家となるであらうともいふ、それも善さ相である、が我國では未だ氏に適當な事業の存在

せぬのかも知れぬ、これ迄氏の擔任して居る業務は、孰れもそれだけでは力に不足なる如き感じをしたのであらう、全力を注がねばならぬといふ樣な仕事が無かつたとも察せられる、或る人から考へたなら、氏のこれ迄當つた業務の何れもが、各々全力を致すの價値ありとも見えやう、がこれは一能に秀でたもの又は執着力の强いものゝ事で、多能なものゝ能く堪ふる所でない、氏の如く多能に生れたものに、その一にのみ專ならんことを求めるのは酷と謂ふべきで有らう、が氏自身も或は此處に思ひ及ばぬでも無からう、兎に角氏は將來ある身分である或る時期を待つて全力を注がうといふ考であるも知れぬ、今日迄の處は未知數と言はねばならぬ。

今日は判斷を下すにまだ早いが、氏に感心なのは、其の行くとして可ならざるなきの調子であるに拘らず、常に人格の重んずべきを忘れぬ事である、誘惑多き處に居つて、先づ彼の如きを得るは、易きが如くして易くは無い、が稍不足とすべきは、氏の從來の行動に徴するに、權力あるもの財力あるものと事を共にして、弱貧で枉屈するものに手を假すの暇が無かつた樣である、高官にして罪惡の顯著なるものがある、富豪にして罪惡の顯著なるものがある、上の好む所下之より甚しきはなしとせば、その影響する所少しとせぬ、然るに此等の矯正に氏が勉めたことを聞かぬのみか、却つてその徒と與に共にし、偶ま事の非なるものがあれば、己れは欺れたりとして慰まうとする樣である、幾らか長いものに捲かれて諦めて仕舞ふ樣であるが、此先如何がであるか、今日の處では分からぬ、

此頃氏に對して彼是非難の聲あるのは、前に餘り人氣の集つた爲であらう、盛名の下久しく居るべからずといふが、氏は之を憂ふるほど小膽で無からう、德川家康は長湫の戰に勝つて直に退軍した、其一生も此の遣り方である、處世の上に斯かる事をするものも有るが、氏は之を意に介せず、毀譽褒貶何か有るといふかも知れぬ、是も甚だ宜しい、ヒーロは斯くあるべきである、左すれば此先氏が如何なるべきかは愈よ見もので

ある、がそれは兎に角として、凡てを差引して氏は善人の部類に屬するといふ事を斷言して置く。

△一高長としての新渡戸氏

○△生

○日本人の評論界に於ける缺點が一つある。それは何でも人の缺點を探すといふ事である。どんな人からでも何かアラを拾はなければ承知せぬ。之がどうも面白くない事である。其間にあつて新渡戸氏は決して人の缺點を探さない。人の長所丈けを取つて、短所には眼を塞ぐ。自分がさういふ風にするのみならず、人に向ても、他人の長所を見て短所を見るな、長所を見て之を學べと說かれる。之が新渡戸氏の長所てあらうと思ふ。殊に現今の日本に於ては非常なる美點であらうと思ふ。新渡戸氏は、西洋の書物——殊に西洋のいゝ書物を讀んてこう感じられたのてあらう。惡口をいはねば評論でないと思うて居る日本人にとつてよき手本とすべきてある。

○新渡戸氏の言論が動もすれば世の中の誤解を惹起すべき點が四つある。第一には新渡戸氏自身が筆を執らず、談話をして人に書いて貰ふ。雜誌記者などが商略上から人目を聳動するが爲めに、尾鰭を附けて奇拔な——而かも氏の論旨とは同じからざる——議論に往々して了ふ。世の中の論者の感情を害するやうな所說もあるのは全く雜誌記者の筆加減から來る。第二は新渡戸氏自身の饒舌り方が、ブッキラボーて、竹越氏などのやうに綺麗に綾を附けてやる方てない。又漢學の力の餘りある人てないから、時には變な聯想を起させる樣な下手な文句を使ふ事もある。之も彼の言論を誤解させる一原因になる。第三は餘り多辯に過ぎる。外の人なら默つて居るべき時にも、氏は饒舌るから、從て其中から缺點を拾はれるやうな點が出て來る。第四は一體新渡戸氏自身は世の毀譽褒貶を構はぬ人てある。自信のある所なら何でもやる。だから其中から白ら惡口さるゝ種も出て來るのてある。非常にフランクな明けつ放しの人て、思つた事は何でも話す。決して

隱し立てをせぬ。こういふ點は大いに辯護して置きたい。

○高等學校の校長として二十世紀の青年を教育するには、新渡戸氏のあの流儀が大賛成である、つまり人格といふやうな事を提げて、辯論を中心にして、學生を說いて行く。新渡戸氏は確に一高に――少くとも一部にはよい影響を及ぼして居るに相違ないと思ふ。此間の新聞騷ぎなども反對者があると共に非常なる崇拜家のある證據になるだらう。而して新渡戸氏の辯護の側の生徒は大抵よい生徒で、學問も出來、人格もあり、高等學校で一二番で、大學に行ても大いにいゝといふ生徒だといふ噂さじやないか。反對は何時でもある。狩野氏の校長時代にもあつたさうだ。校長を面前に置いての生徒の攻擊演說などは一高では少しも珍らしくない。日本人の短處を極端に暴露する好標本じや。只狩野氏は一言もいはずにニコ〳〵と笑て居り、新渡氏は起て演說をするから、新聞に出る丈けて、新渡戸氏にばかり反對者がある譯てない。遠いものは美しく見え近いものは醜く見える。學校に居る中は誰でもわるくいはれる。殊に日本人の如く個人の人格の如何に尊重すべきかを充分に知らぬ國民――此事を了解するには西洋小說を熟讀するが一番好い――は平氣な顏をして極めて不用意に他人を惡評するのである。不謹愼な話じやないか。高等商業なども今では神の如く崇拜さるゝ矢野二郎が其昔校長をして居た時分にストライキを喰つた筈だ。今若し新渡戸氏が一高長を去つたら誰が適任者として就任するか。其所謂適任者が再たび攻擊せらるゝは火を睹るよりも明白だ。乞ふ先づ自分の面上の蠅を拂へ。と吾れも人も座右の銘としなければならぬ。新渡戸氏などは一高長として適任者であらうと思ふ。

○新渡戸氏は武士道のことを書き、武士道といふ事を鼓吹して居るが、舊き道德を學ぶにあらずして、武士的精神を以て二十世紀の事務を處理せよといふのであらう。而して其趣意を煎じ詰めると、寧ろ西洋風のゼントルマンを作るのが其目的であらうと思ふ。人間

は社交的でなくてはいかぬ、孤立せずに他と交つて行け、といふ事をよくいふて居る。

○此間、一高の友人に遇つたら次のやうな事を言ふて居た。なる程と首肯れた。狩野氏と新渡戸氏は校長ぶりに於てよきコントラストをなして居る。狩野氏は口を一切開かぬ。何をいはれてもニコ／＼笑て居り、よく生徒のいふ事を聞いて、自分は一言か二言いふのみて、あとは其同じ一言二言を何時までも繰り返して居る。夜の一時までも二時迄も、シャンと座つて、何時までも同じ態度である。生徒は到頭根氣負けして了ふ。學校には朝早くから來て、他の職員が皆退いてもまだ學校に居る。會などのある時は生徒が用があるかも知れんというて、會の過ぎた後も暫らく居る。其根氣のよいといつたら誰でも眞似は出來ぬ、克己力に富み、喜怒色にあらはれぬ處はストイック的ともいはれ又儒教的ともいはれる。又事務は實に忠實に執る。小使が居らねば小使の代り、書記が居らねば書記の代りもしかねない。新渡戸氏は細かい事は餘りせぬ、大綱は統べて行くといふやり方である。又感情は餘り隠さず、自然に流露させる。狩野氏は東洋的に傾き、新渡戸氏は西洋流に傾くとてもいはれるかも知れぬ。要するに一の意味に於て狩野氏が一高長としての適任者であると共に他の意味に於いて新渡戸氏が又た一高長としての適任者である。若し世の中に狩野新渡戸氏なる人が居るならば、夫れこそ鬼に金棒で、理想の人で、空前にして恐らくは絶後なる第一高等學校長であらう。

△新渡戸稲造論

星雲子

○新渡戸氏については予多くを知らず。然れども現代の日本に於て、總ての方面を通じても、彼は第一流の人物の一人たるを失はず。特に教育界に於ては最も異采を放てる人物たること又疑ふべからず。

○教育界には偽善家多し、無能者多し。大學の教授連には多少の變り物なきにあらざるも、彼等は教育家としてよりは、寧ろ學者として、専問的智識を授ぐ

るが爲めに、講壇に上るもの丶如く、眞の意味に於ける敎育家たらんと志す者の如きは極めて少きが如し。新渡戸氏は所謂學者としては第一流といひ難かるべし。彼の頭腦は多角形にして、總てのものについては或物を知れども、或物について總てを知ることを求めざるが如くに見ゆ。今の學者の弊は或物については多くを知れども、或物以外には何物をも知らず、甚しきは其或物が果して何物なるかさへ知らざるものも少からざるが如し。新渡戸氏はか丶る學者たることを欲せざるものならん。彼は人間は人間として存在し、人間として生活し、人間として活動せんことを欲し、蠹魚となつて、仙人となつて、干物となつてまでも所謂學者といふ尊稱を受くることを屑しとせざるに似たり。彼は常に人格を說き、武士的精神を論じ、社交的性情を奬め、而して自らは社會の各方面に向て其主張の幾分を實行せんことを勸む。

○敎育家などになればウッカリ口を開かぬといふが日本の風習也。彼は全く之に反す。彼は話を持ち掛けらるれば、或は持掛けられざるも、自己の所信持說を何人の前にも、何處に於ても、何時にても臆面もなくさらけ出す。時には餘りに中身のなき議論もありて、今少し自重せんことを望むの情なきを得ざることあるも、彼は恐らくは十善をなし得ずんば五善をなし、或は一善さへも、半善さへも、なすはなさぬに増さるといふ考より、チョッと考へたことさへも、問に應じて答ふるものなるべし、彼の擧動時に輕快に失し、彼の言說時に膚淺に流る丶ことあり、吾人をして今少しく彼が愛讀したりと稱せらるるカーライルの渦重と幽深とを加味したしと思はしめざるにあらざるも、而かも殆んど總ての敎育家、殊に校長さんなどは「口開けば五臟の見ゆる木通かな」を極め込み、見られては飯の食上げとなるかも知れぬ汚なき五臟を無言の衣にて隱蔽するに急なる秋に當つて、彼は敎育家ならぬ人よりも大膽にいひ、公然に論じ、而して遂に雜誌の顧問に迄なつて、天下の數

譽褒貶に頓着なく、一代の敎育家氣質に反抗したる態度に至ては、幾分か英人を罵て四千萬の愚物といひたるカーライルの一面を修得したりといふべき歟。彼の敎育界にあつて總ての敎育家と反對の徑路を取りつゝあるは、啻に異采たるのみならず、又一代の痛快事たらずんばあらず。

○吾人は彼が父祖の血液より、國家のために何事をか爲さんとするの志を承けたる人たるを疑はず。只此志あり、彼已に現代の滔々たる人物よりも一頭地を抽く。

○學を修めて而して之を實世間に行はんとするものに執ては、彼は殆んど模範的人物たるを失はず。學問に食傷して、實世間と絶縁するか、實世間と結婚して學問と絶交するか、此二種の人間のみ多き世の中に、學んで行ひ、行うて又更らに學ばんとする彼の如き、偉なりといふて可也。彼近來多少評判がわるいやう也。何事にもケチを附けねば承知せぬ小人原の心事亦卑むべき哉　（完）

△新渡戸稲造君

洛南醉

奥州といふ處は一體人間の粗朴なものの出る所だが、その中で南部からは一種の野心家が出る、例へば昨今は大分聲價を墜して居るが、狸の昌藏として知られたる前代議士佐藤昌藏の如き、若くは阿部浩の如き、原敬の如き、將た又本宿宅命の如き、皆一癖ある野心家で無いものはない、新渡戸稲造氏の祖父新渡戸傳氏（祖父となり居れども實は實父）の如きは最も南部氣質を發揮した所の一大野心家である、傳氏は三本木といふ所の荒廢地を開拓して數千町の田畑となし、それを經營して居た人であつて、今も猶ほ三本木の停車場へ行くと、新渡戸傳氏の墓碑此驛を距ること幾丁と記してある程の人物である、南部に斯くも野心家の多いのには抑も所以がある、南部家では仙臺の伊達と國境を交えて居るその南方の花卷といふ所に陣屋を設け其處に野心家冒險家を集めて置いたものである、それは一

朝事ある時に直に仙臺領を衝くといふ計畫からなのである、即ち花巻武士といへば孰れも野心家冒險家なのであるが、前に言つた佐藤昌藏氏而して新渡戸傳氏の如き皆此花巻武士であるのだ、稲造氏も斯かる土地に生れ斯かる人を父として斯かる家庭に人と爲つたのであるから、矢張りその感化を受けて幼少の頃から非常の野心家であつた、氏は明治七八年頃に東京英語學校に入り、明治十年に札幌農學校の生徒募集に應じて行つたのであるが、その東京英語學校時代の氏は、非常の才子であると共に非常の俗人で、寄席入りをして講談を聞いて歸つては、寄宿舍の中で神田伯山や桃川燕林の假聲を遣つて喜んで居たものだ、それが札幌へ行くと俄に性行が一變して見違へる程になつたので、人は之を稱して耶蘇教の感化に因るといふけれども、それは寧ろ氏の野心から出て居る事である、當時の札幌農學校内の空氣を知ればよく分る、耶蘇教を信ぜぬ生徒は教師の米人に嫌はれるといふ有樣であつたのである、即ち米人の御覺え目出度からしめんには勢ひクリスチアンとなるべき必要が有つたのである、稲造氏の如きは即ち學校生活の必要からクリスチアンと爲り、そして元來が學者氣質の人でない人が、學者風の人となり、刻苦精勵して禁酒、禁煙、最も謹直の君子人となつたのである。

兎に角札幌農學校時代は、非常の讀書家で、在學中所謂る萬卷の書を讀破し盡した人である、就中最も好いたのが農學、それに續いては文學であつた、英文も一通りは書けた、が學力の點から言へば中位でしかない、氏は如何しても學問の天才ある人ではない、學者肌の人では無いのだ、同級生には内村鑑三氏や宮部金吾氏等の如き、非常に學問の出來た人が居つたから、氏の如きは學力では此等數氏より遙かに下位に居つたものである、卒業後は札幌縣の小官吏となつて居たが、日本の文章が旨く書けぬといふ事で頗る不評判であつた、それで奮發して再び東京へ來、帝國大學の政治經濟の專科へ入學したが、それを出ると間もなく、渡米してジョンス、ホプキンス、ユニヴァーシテーに入つ

た、その在學中に政府の命により、官費留學生として獨逸のボン大學に入り、農政學經濟學を專攻して歸つて來た、今の夫人の出來たのは氏がジョンスホプキンスに居つた時代の事て、その頃氏は英語で以て東洋の文物に就き演説をやつたが、氏の今の夫人は、氏の東洋人にして斯くまて英語に堪能であり斯かる演説まて出來るといふ點に感服し、父母の不承知をも顧みず、遂に自ら進んて結婚をするに至つたのてある、

歸朝後は札幌農學校に敎鞭を執つて居たが、神經衰弱になつて、再び米國に轉地療養をした、二度目に歸つてからは後藤新平氏の知るところとなつて臺灣府の技師となり、それから一轉して京都大學の敎授となり、更に又今日第一高等學校長となつて居るのてある、前にも言つた通り、氏の天性は才子肌の俗人なので、學者ては無いのてある、而かもそれが今日あるのは全く札幌農學校以來の克己奮勵の結果て、勉强讀書が、學者氣質ならざる人を遂に學者たらしめるに至つたのてある、そして今日に於ては、氏自身にも、學問を以て自己の一生の天職とするともいつて居る樣てある、がその實政治上の野心の澤山ある人だ、敢て自ら野に下りて、野武士と共に政界に馳驅するといふ樣な勇氣はないのだから、官吏になつて機會を覗ひ、鰻上りにあは善くば大臣にでも爲ろうといふ望てあろうと信ずる、最も文部大臣にでも爲つたら、是迄の大臣中唯故の森有禮氏を除くの外は氏ほど適當なものは無いてあらう、元々官界の癖として少しも政界に根據がない乍らも、巧に新聞雜誌等に自己を廣告して毫も危險を犯さず、平穩無事に大臣となろうといふ野心と思ふから、その方て成功するかとも想ふ、虛名を得るといふ事も氏には餘り厭てはないらしい、現に新聞雜誌等に萬遍なく心を用い居る態度が之を證することてないか。

局量偏狹神經過敏てあるから到底長に長たるの勇氣はない、それ故に一度蹉跌すれば再び蹶起する事が出來ぬ、今日高等學校長の位置に居ても、復た昔日の如き光彩は無い樣てあるから、或は兎もすれば官界に於ける氏の進路は之を以て終焉とするも知れぬ。

僞善といつてはちと失敬に爲るが、兎に角僞善と傍から言はるべきことも少くはない、氏にして今少し虚名を博せんと勉むるの跡なく、學者としてドッシリ落ち付いて居るならば、一廉の人物で有らうと思ふ、局量偏狹だとは言つたけれども、それも比較するものその者にも依る事で、由來人物の無き現在の儘の文部省内では、氏のそれも左程に言ふべき事では無からう。兎に角功名心にさへ今少し富まずに居るならば、無事に生涯を終り得べき人であると思ふ。

△新渡戸稻造氏

某 氏

●札幌農校、由來幾多の異才を輩出す。而して、其多くは所謂農學專門家にあらざるは奇とすべし。之れ其校風固と自由を尊べる爲めならんと云ふ。其れ或は然らん。一世の流行兒として、其學識に於て、將た人格に於て、方今社會に嘖々の名聲を擅にする新渡戸稻造氏の如き、蓋し其尤も錚々たるものならん。

●世には智識高邁にして、人格較々低きものあり。品性は至つて高潔なるも、識短なるものあり。前者は往々世の嘆美（アドマイア）する處、後者は人の敬愛を受くる事ありと雖も、未だ以て完全なる人格と云ふべからず。而も、世に名士と呼ばるもの多くは此二者に出づ。德識二つながら兼ね備ふるものに至つては、甚だ稀れに見る處なり。而して、新渡戸稻造氏は、其人格、學問の圓滿なる調和的發達に於て、較々理想に邇き一人なりと云はる。

●氏の博識なるは、其數多の肩書の示す如く、汎ねく世の認識する處、特に其語學に堪能なる、今更吾人の呶々するを須ひず。而も、此博識にして語學に精通せりと云ふ事が、先づ以て氏をして社會に名をなさしめたる一大素因ならん。我輩は新渡戸氏を想ふ毎に、直ちに彼の「武士道」の著者なることを聯想せざるを得ず。蓋し、「武士道」は氏の傑作にして、其博識と、語學の非凡なるを遺憾なく表彰せるものなればなり。既に其博識なるを聞いて、近く氏に接するもの、其人格亦人を

魅するに足るものあるを見て、窃かに敬服と私淑の念を拂ふに至るもの亦尠なからず。

●人も知る氏は有名なる讀書家にして、讀書に尤も多くの趣味を有するの人なり。此の傾向は遠く札幌時代に發揮せる處にして、氏自らも云ふ、余の學生時代は寧ろ亂讀の弊に陷れりと。而して其讀書なる事が今日ある新渡戸氏たらしめたるなり。其識の該博を致せる之れに由るは勿論、其人格の構成にすらも與つて力ありしと云ふも敢て不當にあらず。故に、今日の氏は先天的素質の然らしめたるにあらずして、後天的脩養的の人才なり。一言に氏の人格は確かに其學問の反映なりと云ふを得べし。

●氏の生涯はウヰーランドの其れの如く、フランクリンの其れの如く、幾多の變遷を經たり。其幼時頭腦明晰にして、特に記臆力の非常なるものありしが、腕白にして少し圭角のありし方なりしとの事なり。中葉寧ろ才子にして、其北海道に移るに及んで、將に一轉機を劃して敬虔なる基督教信者と化す。斯くして其讀書的修養の時期に入れり。

●新渡戸の偉なるは、又、其意思の頗る强きにあり。氏は其知る處、必らず之れを實行せんとす。其北海道に於て、禁酒禁煙を斷行したるが如き、其一例にして、其放縱的生涯を脱して、道德的生涯に急轉せしが如きも、亦意思の努力の結果たらずんばあらず。

●氏の學問は決して學究的にあらずして、飽く迄活用的、實際的なり。又其研究的態度も、一事を兀々として研究すると云ふよりも、有謂智識を吸收して、之れに常識的判斷を加ふると云ふ遣り方なり。從つて獨乙式にあらずして、米國式なりと云ふべきか。而も、其博識にして、實際的なるを捉へ來つて、人或は廣くして淺しと云ふ。蓋し博識と深遠と調和し得ざるものとすれば、新渡戸又神にあらざる限り數の免れざる處ならんか。

●氏の人格は島國的偏狹にあらずして、大陸的鷹揚なり。人に接して些の隔意なく、極めて淡白極めて自由、何人に向ても其の門戸を開放す。氏と對話すれば恰も春風駘蕩の氣に包容さるゝが如き心地す。是れ尤もの美なる處ならんか。

●氏は表示主義を採る。何事も表情的にして天心流露を好む。東洋流の所謂沈默的に喜怒色に表はさゞる體の事は即ち氏の採らざる處にして嘗て或人に「心に想ふ事あらば何人に向ても直ちに之れを口外すべし」と云へるが如く氏自ら至つて天眞流露にして無邪氣な

り。其は學校の講堂に於けると家庭に於けると些の表裏なし

●或る者は氏を評して新渡戸は非常に俐巧な交際術に長けたる人なり其磊落の如きも寧ろ裝へるものにして決して本能的に然らしむるにあらず即ち人氣取り政策に過ぎず故に一時人心を收攬する事あらんも永續きせざるべしと或は一見而か見るやも知れずと雖も是れ見るもの丶非なるにて事實は決して然らず餘りに氏の正直にして天心爛熳なる却つて人をして誤解に陷らしむる恐れあるは氏自らも認むる處にして敢て之れを釋かんとはせず少しも顧慮せざる如きは以て偉とするに足る。

●氏は又同情に厚き人也、極めて涙脆き人也、故に有謂事物に同情の目を以て之を美化す。嘗て氏の口より惡口罵詈を聞かず之多く人の信服を得る所以ならんか。

△新渡戸校長

文學博士　建部遯吾

第一高等中學の校長には我輩の直接生徒としてより此方知れる所を以てすれば、先づ木下先生、嘉納治五郎先生、次いては久原躬弦氏、澤柳政太郎氏、狩野亨吉氏及び新渡戸稻造氏が引續き任に當られたと記憶する。是より先き大學豫備門時代から見れば杉浦重剛氏、野村彥四郎氏及び古莊嘉門氏が當られたといふ歷史であるが、顧ふに我第一高等中學の校風は是等三氏の時代を以て神代と爲し、木下先生を以て人皇時代の第一期と爲して、以て發達大成せるものであらう。續いて嘉納、澤柳兩氏は職に當らるゝことが寔に短く、我輩の如き嘉納先生の署名の卒業證書を擔ふたのであるが、我輩に取つては先生は單に卒業式に臨むだけの校長に過ぎなかつたのである、實に我輩は或意味に於て第一高等中學の建國時代の生徒である、而して其時に戴ける所の校長は實に木下先生であつたのである。

然るに爾來斯の如く短き校長の更迭を經て、狩野亨吉氏が第一高等學校長と爲られた時代は、將に之れ守成の時代と謂はなければならぬ、創業よりも守成の難いといふことは歷史上に繰返す所の顯著なる事實であるが、此時に於て餘り多く校風の萎微を來さず、校威の缺損を招かずして、約五六年に亘つて校長の重任に當られたのは我黨高等中學校出身者として狩野氏に多謝せねばならぬ、旣にして狩野氏の任に京都帝國大學に就かるゝや、之に代られたのが即ち新渡戸稻造氏其人

である。我輩は是等の諸氏と極めて深き交際は無いが、又多少の知れる間柄である。併ながら面識ある所の紳士新渡戸稲造氏を觀察するには極めて僅少の材料と智識とを有するに過ぎぬが、第一高等學校は則ち我輩の居つた第一高等中學に外ならぬので、此校と我輩とは切つても切れぬ深き重き關係があることであるから、寧ろ之に向つて多少の觀察と評論とを爲すことが適當であらうと思ふ。

我邦の歴史を以て之を譬ふるならば、狩野氏の晩期より新渡戸氏の時代は恐く平安朝より武門武士の勃興の時代に較ぶべきものではなからうか、今日新渡戸氏時代に於ける第一高等學校を以て木下先生の時代に於ける第一高等中學と較べると、多くの事に於て今昔の感に堪えぬものが多いのである、當時我所謂建國時代に於て校威八紘に耀いた其随一の事項としてのベースーボール試合の如きは近年甚だ振はぬのである、第一高等中學が運動界に於て占めた覇權といふものは殆ど空しく、昨日の夢と化しつゝあるのである、第一高等中學に於て明治二十三年十一月八日校友會音樂部の催にし音樂會の來賓中には華族の夫人を携帶せる者があつたといふので、頻りに遙後ろの席の方、即ち倫理講堂の床の上に於て地段駄を踏んで之を冷笑せる所の、其第一高等中學の寄宿舍の三階から何の故とも知れず身を投げるといふ青年を出すに至つたのである、其又同じ寄宿舍からして譯の分らぬ理由の下に書置をして華嚴の瀑布に飛込んだ青年を産み出したのである、我輩は歴史上各時代は各々それ〲の意味を有することを多少歴史を學んで認めるものであるが故に、三階飛下り事件、華嚴飛込み事件が皆それ〲學校に對し、時代に對して意味を有する所の事件であるといふことを認め得ることに於て、敢て何人の後へにも落ちぬのである、併ながら之を當年第一高等中學建國時代に比して、實に今昔の感に堪へぬといふ點に於ては、世人も亦恐くは我輩の後ろに落ちぬことであらうと信ずる。

此時代に於て校長と爲り、此時勢變遷の時機に對して同じく我日本帝國を經營料理すべき人才の下底を爲すべき重任を擔ふ所の第一高等學校の校長たるは非常なる困難なることと謂はねばならぬ、既に新渡戸稲造氏の位地は之に對し先づ十二分の同情を世人より期待すべき權利がある。

或は第一高等學校の校風は墮落せりと云ひ、或は第一高等學校の校風は變遷せりと云ひ、或は第一高等學

校の校風は進歩せりと云ふ、此三者の果して孰れにあるかは我輩自己の此校に對する關係上敢て判定を試みられぬのである、何となれば我輩の判定は之れ聊か手前味噌の嫌ひあるからである、我輩の判定は之れ論理學に所謂フアーリー、オブ、アンチキチー（尙古の誤謬）に陷るからである、併ながら此頃世の中にポツ〳〵傳へらるゝ所の今年三月一日の寄宿舍大紀念會に於て、新渡戸校長に對する某學生の辭職勸告演說に對し、新渡戸校長が懷ろより手帖を出して、我輩は武士の後である、我輩の父も祖父も共に武士道の爲めに殉死したものであるから、我輩も亦此面目に掛けて常に決心する所ありといふ趣意を述べられたるに對し、滿堂の燃ゆるが如き氣慨を有する所の第一高等學校生徒諸君が肅然として水を打つたる如くなつたるのみならず、中には歔欷嗚咽して淚を拭ひも敢へぬ者もあつたといふことを聞くに及んで、我輩は如何にも我校風は其變遷すべき方面に向つて變遷したといふことを感ぜざるを得ぬのである、諺に三つ子の魂ひ百までとあるが、百の魂と三つ子の魂とはそれ〳〵其形式を異にする、形式を異にする中に何か一貫せる所のものを發見するに難からぬことがあるのである、孔子の言葉に君子は欺くべし陷るべからずとあるが、若し陷れらるゝあらんか之れ旣に君子たる所以ではないのである、併ながら君子を欺くことは容易である、曾て木下先生が明治二十六年の六月廿三日を以て全校生徒を倫理講堂及び第一教場に集めて告別演說をせられた時分に、別離の悲愁遣る方なかりしものと見え、遂に演說の間に於て感極つて泣かれたのである、其時に先生が言はるゝには、「どうぞ不覺の淚は御許し下さい」と言はれた、我輩は當時實に一個の近日を以て卒業すべき靑年として親しく其風丰を仰いだことであつたが、如何にも嚴肅眞摯なる感じに打たれた次第であつた、然るに我輩の同窓の一人が其演說の終るや否や左右の學友を顧みて「今日の木下先生の不覺の淚を見たか」と言ふたのである、凡そ如何なる時代に於ても冷笑者流の迹を絕つことはないのである、況や明治の時代は冷笑時代なりとは德富猪一郎君が其昔「新日本の靑年」の劈頭に於て喝破せる言葉ではないか、我輩は當時靑年時代は勿論、今年に於ても仍ほ斯かる冷笑者流に與せざるものである、新渡戸校長の三月一日に於ける嚴肅眞摯なる演說告白も亦恐くは千有餘の靑年者中一人の冷笑者流を招ぎ出さずとも限らぬことであるが、併ながら第一高等

中學は從來此の如きことに依つて感激する所の校風特色を有つて居つたものである、我輩は此の如き事件を聞いて第一高等學校近代の歴史に於ける空谷跫音の感に堪えない次第である、我輩が新渡戸校長を以て第一高等中學の鎌倉時代に入るべき重要人物に擬したのは、強ち新渡戸氏が武士の孫たり子たりと告白せるが爲めのみてはないのてある。

第一高等中學の建國時代に於ける最も重要なる事件は彼の有名なる不敬事件てあつたのてある、我輩は只今本誌記者より與へられたる題目に付て一場の茶話を試むる際に、第一高等中學の爲めに、又不肖ながら當時の學生の一人たる我輩の一生の爲めに頗る重大なる事件とも云ふべかりし所の彼の不敬事件に對して縷說するの遑を有せぬ、又之を爲すことの本誌記者に對して聊か穩當を缺くことを感ずるのてある、併ながら彼の不敬事件は要するに外櫂内侵の事實が歴々として當時我々日本青年の耳目に映じ來りつゝありしに際して、對外公憤を基礎とし、偶々一二の教師が亦此點に於て頗る心得違ひあるが如き形跡を示せるに際して、道同じからざれば相倶に謀らざるの義を全うせんとせる第一高等中學校生徒の公的運動に外ならなかつたのてある、當時世の中には近く如何なる事件があつたかといふと、築地の宣教師サンマルスが恐多くも皇太后陛下行啓の鹵簿を橫切つたといふ事件に對して、我官憲は之にアッポジャイズしにこちらから出掛けたといふ事件もあつたのてある、同じく築地あたりの宣教師が何かのインブリーといふ人が第一高等中學と他の某校とのベースボールの試合を見んが爲めに、第一高等中學の垣を乘越へて來たのに對して、高等中學の生徒は之に穩に立去を命じた所、彼是不條理なる抗辯をしたので遂に其面部に瓦礫を投ずる者を出し、之に對して容易ならぬ國際問題ならむことを憂慮して、我官憲は第一高等中學生を處分せんことを求めた事件もあつたのてある、幸に之に對して大義名分に明なる我木下先生の在るありて、斷然此の如き軟弱不當なる要求を排斥せることてあつて、我校は此の如き事に對して我官憲に唯アポジャイズすることをしなかつたことは我々が我校の爲めに木下先生に對して大なる感謝を捧ふことてあつたのてある、凡そ時勢の反映此の如くなりし時に際して、熱烈燃ゆるが如き熱誠愛國心に滿されたる我校の生徒の行動が、往々此同一方面に向つて少しく常度を過ぎて居るとがあつても、是は自然の勢と

して强ち咎むべきことではないのである、我第一高等中學校生徒は、明治二十五年に於て始めて對外硬の旗幟の下に民間政黨六派が聯合して進歩黨を作るに至つた之に先つこと二年に於て、早く既に對外硬の主義を向ヶ岡の一角に於て實行したのである、若し對外硬といふことが大和魂の明治時代に於ける著しき發揮の一つてあるならば、對外的思想活動の方面に於ける大和魂は恰も南朝の系統が楠氏の一族に依つて吉野山の奥深き彈丸黒子の地に其命脈を維持せるが如く、井上條約改正案よりして日清戰役の決行に至るまでの間、我帝國の對外的精神が萎微不振、殆ど其有無存在を疑ふべかりし時代に於て、僅に向ヶ岡の一隅に於て此大和魂の一部が維持せられ發揮せられた者と謂はねばならぬ、實に第一高等中學は多少雲蒸龍變、風雲を叱咤し、世波を淘湧せしむる所の社會的活動の素地を養成する普通の學校的任務を遂ぐる以上に於て、實に大和魂の吉野山てあつたといふことを我輩敢て之を天下後世に揭げやうと思ふのてある。

而して我新渡戸校長の夫人は實に米國の閨秀であるのてある、今日堂々たる人物にして外國婦人を妻とせる者は固より其數乏しからぬことてあるのみならず、是に因つて大に內助若くは外助の效を得て、益々其祖國に貢献する所以の功績を大にしつゝあるの例は舉げて數ふるに遑ないのである、我第一高等中學の大和魂が朝日に匂ふ山櫻の夫れにして、決して偏狹なる排外思想より出づるものに非ざることは、今日第一高等中學の後身たる第一高等學校長に米國婦人を妻とせる新渡戸稻造君を戴くに於ても見らるべく、又出入常に最愛の白皙夫人と手を携へて、而して胸中一片耿々の武士道的熱烈なる思想を有する所の新渡戸稻造君其人の人格に於て縮寫せられつゝあることゝ認めらるゝのである、世人は往々武士道と云へば排外思想を意味するが如くに感じ、第二十世紀の日進科學的知識と云へば動もすれば武士道と矛盾するが如く感ずるが、此の如き陋見は我輩新渡戸稻造君の一身を以て具體的に破壞されたるものと看做すべきものと思ふ。而して更に之を大にして我第一高等中學の學風に見れば殊に之を了解するに難からぬのである、何となれば我第一高等中學の生徒諸君は此の如き陋見が豫想するに反して、敢て外人を妻とせる所の新渡戸校長を排斥せんと試みざればなりてある。

新渡戸法學博士兼農學博士が非常な博識て居らるゝ

ことは或方面に於て大變調法がらるゝことであるであらう、現に「開國五十年史」に於ける同博士の筆に成れる一篇を見ても、ギッヂングス曰く、カーラノール曰く、ミルトン曰くが口を突いて續出して、人をして殆ど應接に遑あらざらしめ、是は開國五十年史には非ずして開口五十人史の一節ではないかと思はしむる點があるのである、實に同氏の頭腦の極めて博大なることは何人と雖も驚嘆せざるはないのである、併ながら我輩は此の如き博大なる知識を以て博士が第一高等中學の校長として其重要なる轉回時代の重任を全うらせるゝ所以とは考へぬ、第一高第學校の生徒諸君も亦恐くは此の如き點に於て新渡戸校長に私淑して居ることでなからうと信ずるのである、一言にして之を言へば、新渡戸校長は能く第一高等中學校風變遷の活機を理解せる人と見受ける、識らず我同胞學生諸君、第一高等學校千有餘の青年諸君子は同じく此校風變遷の活機を理解し居らるゝや否や、兎も角も第一高等學校の學風は變遷した、此變遷せる學風に對して其變遷の中、自ら不磨の精神あることを天下後世をして認めしむると否とは一に繫つて諸君子の此活機を眞摯に理解すると否とに在ると考へる。

天下の事爲すべきこと多し、併ながら昔陳平曾て祭の肉を分つた時に、我をして天下を料理せしめば亦此肉の如くならんと言ふた、孔子曾て委吏となれば料量平なり、乘田となれば畜繁殖すと曰はれた、新渡戸氏が第一高等學校に校長と爲らるゝことが氏に取つて孔子の委吏たり、乘田たり、陳平の細肉を分つことたりや否やは我輩必ずしも論評しやうとは試みぬ、併ながら第一高等學校の生徒諸君が第一高等學校の生徒として此校を經營し、少くとも此校風を醞釀し、宣揚せしむることは、將に是れ孔子の委吏たり、乘田たるに比すべきことである、是に於て諸君子が成功すると否とは諸君子が他日我日本帝國を經營し、更に我日本帝國を提げて世界を經營する上に於ける成功の検温器、晴雨計と見るべきものである、我輩は此意味に於て第一高等學校の消息を熱心に注視することが、啻に此校出身者としての我輩に限らず、苟も天下の盛衰興敗に注目する者の一日も忽せにすべからざる事件と考へるのである。

新渡戸稻造氏の人物評は姑く雜誌の題目とせずして可なり、第一高等學校の校風論が最も先づ評論の題目たるべし、記者足下以て奈何と爲す。

帝都の新聞經營者（五）

黑頭巾

其一

●『海道一の大井川』凄き風雨の遣臺よりも恐ろしきは、六郷川の鐵橋にあらずや。

●曩日、鐵道の悲劇、吾輩之を言ふに忍びざる也。若しそれ、機關車と客車とを連結する鐵鎖、切斷するにあらざりせば、幾多の客車は、玉川の沙中に陷沒して、稀有の大慘事を演出せしや必せり。

●蓋し戰爭は慘酷也といふと雖も、此の如き、痛ましき修羅場を現出せざる也。

●此の聞くだにも戰慄する運命を將來せる鐵道は鬼乎、魔乎。

●「千年萬年待ッたとて」一たび逝ける魂魄は、招けども歸り來らず。

●人命の貴重なるは、何んぞ吾輩の多言を要せん。敢て、多忙を以て遁辭を爲すこと勿れ。鐵道當事者は、須らく、畏れて而して愼まざる可らず。

●彼の夕、五十三驛の長途に、規定におくれたる時間を取返さんとてや、東上の急行車は、平沼を發してより、揉みに揉んで、驚く可き急速力を以て闇を衝けり。

●衝突の殆る可らざりしは、假りに恕すべきことありとするも、衝突後の應急處分の緩慢なるは、斷じて責めざる可らず。

●幾多の人命は、鐵橋上、闇夜に放棄されて、待つこと二時間なれども、鐵道院の救援は來らず。

●昔しの最速の公用飛脚は、京、江戸の間を三十六時間、而して江戸と神奈川との間には、二時間を要せず。

●紳士淑女は、巳む無く、螢の如き二丁の提灯に照らされて、一尺許りの橋板を渡りて立退きたり。

●吾輩は言を好むにあらず、人權と人命とを尊重せざるが如き、當局者の態度に對しては、禿筆を呵して之を鞭たずんばあらざる也。

●聞說、此夜、乘客に子秋元興朝あり。人も知る、子爵談話會の棟梁也。

●帝都幾多の新聞記者は、堀田事件に關して、子の意見を聞かんが爲に、之を平沼に迎へて、子爵を汽車中に包圍せり。

●六郷橋上の遭難に、敏活なる行動を敢てして、以て子の家族及び同乘を安んじたるは、是等の記者也。

●吾輩は、是等の記者を譏らずと雖も、亦た是等の諸

君に感謝せんずばあらず。

●彼等は、筆能く人權を擁護するのみならず、又能く、其手を以て人命を擁護したる也。

●吾輩は、新聞記者が、社會民衆より感謝さるべき、此種の善行の、續々出るあらんことを期待す。

其　二

●新たなる「二六」社の建築成りて、舊るきものゝ取毀たるゝを見れば、其の建築は木骨にして石皮也。

●吾輩は、之に對して秋山定輔を聯想す。而して吾輩は、未だ彼を見ざる也。

●露探問題の起りしとき、吾輩は彼の態度に徴して、存外に彼のズウ／＼しき人物ならざることを識れり。

●彼の舊友は皆曰ふ、彼は到底、露探の器にあらずと。

●彼を議會に彈劾する者は、政友會に屬する一田舍議員也。

●聞說、公伊藤、彼議員を稠人廣坐の中に罵倒して痛快を極むと。

●公伊藤は曰く、子、彼を彈劾して以て己が名を爲す。露探と言はるゝは、何人にしても弱身なり。其の弱身に附込みて他を壓迫す。何等卑怯、卑劣漢ぞ。

●公伊藤は必ずしも秋山の知己にあらず。然れども能く其の寃罪を辨識して、彈劾の心事を惡む。遂に秋山の知己たらずんばあらず。

●彼、秋山近ごろ肺を病みて頗る衰ふといふ。然れども彼、當年、一種の好角狂を以て名あり。

●彼、其の邸に土俵を築き、自ら其技を鬪はす。綠島を賞揚して大力士の器となすも、颯爽たる其の意氣に合ふところあるに由らずんばあらざるべし。

●「二六」の盛時は、十月時節、朔風の地を捲き來るの觀を有す。

●其の勞働者大會を開催するや、當日の「二六」に對する廣告の申込、一行一圓を以てするも尙得る能はず。

●此の如き高價の廣告料を得たるは實に、「二六」に始まる。當時、帝都の新聞、「二六」を見ること、出林の虎の威無くんばあらざりき。

●其の氣焰沈めるの後と雖も、田中宮相問題の如き、猶ほ當年の意氣を帶ぶ。

●吾輩は思ふに、秋山は意氣を以て立つもの也。其の辛辣、激切の調、屢、世人を驚かすもの、往々、一時の意氣に出づ、而して彼、何等の求むる所あるに非る也。

●然れども、彼は確かに、『損な男』也。恐らくは、彼は頗る世人に誤解されたる也、

●「二六」は俠憤の意氣、江戸兒に投じて、其の全盛を極めたる也。而して近時、未だ平民の義憤を代表して萬丈の光燄を吐くの好問題を捉へ得ず。

●或は曰ふ、秋山の父は、大阪の一劇場の持主、純然たる贅六也。

●人或は、彼に其の兒の事業に出資せざるやを問ふ者あれば、彼は曰ふ、「定輔は吾兒、金錢は則ち他人也」、

●此一語、贅六を代表して遺憾無し。此の如くにして、彼は其兒の事業に、多少の同情を有せず。

●斯父にして「江戸兒」に持てたる斯兒あること亦た一不可思議にあらずとせんや。西鶴の所謂「鳶、孔雀を生む」もの乎。

●聞く、秋山年二十六、福田も亦二十六、二人者心を戮せて創刊するもの故に、「二六」と名づく。輓近、帝都新聞の經營者、かく年少なるものあらず。

●剩さへ、彼等を助くるに、同氣の壯年者を以てす。「二六」が鋒鋩の鋭利なる亦、一に之に由らずんばあらず。

●吾輩は、秋山の病且衰を聞きて、併せて「二六」の今昔を懐憶するの情に堪えざる也。

其　三

●東京にては、日本橋(ニホンバシ)といひ、大阪にては日本橋(ニッポンバシ)といふ。ともに、此の二大都會の中心也。

●東京は政治の中心にして、大阪は商業の中心也。「ニホン」と「ニッポン」との相違は、此處に存す。

●新聞界に於ても亦た、日本橋(ニホンバシ)と日本橋(ニッポンバシ)との相違無くんばあらず。

●東京の新聞は、政治に支配され、大阪のは金力に支配せらる。東京は、「ニホン」的にして、大阪は則ち「ニッポン」的也。

●大阪の新聞に政黨無し。東京の新聞の政治の爲に貧なるが如くならず。

●大阪の新聞を動かす者は政事家にあらずして、財家にあり。

●大阪朝日を動かし得る者は、侯松方にあらずんば、商船會社なり。而して、大阪毎日の後ろには、藤田傳三郎あり。

●朝日は、村山龍平の專制に屬し、松方、中橋は村山を通じて、朝日に現はるゝことあり。

●毎日は株式會社なり。其最大なる株主は藤田にして社長本山は藤田の佳婿なり。毎日は、畢竟、藤田の機關紙也。

●原敬は嘗て毎日の社長たり。其後任者は、小松原也。此二人者は、政治上に於ては雪と墨と也。

●而して毎日は此二人者に依て、新聞としての發展を敢てするも、何等政治的臭味を薫染せず。

●彼、藤田は漸次、此の廣大なる新聞を占領して、敢て政事家の蹂躙を許さゞる也。

●帝都の實業家、未だ此の如く大なる機關紙を有する者あらず。

●帝都の豪富は、廣告機關として、新聞を利用することを知るのみ。未だ十分に、之を商略上、利用する者あらざる也。

●帝都の富豪にして、『新聞王』たり得べき者は、今の處、「三菱」に若く者無し。是れ、帝都の新聞界に於て、將來に、注目すべき現象たらずんばあらざる也。

●「報知」「東京毎日」は大隈伯を通じて、而して「東京日々は」加藤を通じて、之を「三菱」の藥籠中に收むるを得可し。

●之に加ふるに、他に、活氣ある一大新聞を購ひ得て十分之を利用せば、「三菱」は、帝都の「新聞王」たるを得べし。

●「三菱」の豐川良平は策士にして、頗る新聞眼に富む者、彼、豈、是程の機略無からんや。

●唯だ之を全然自家の經營に移すに於ては、適當の經營者を得んこと極めて難し。

●且それ、帝都には新聞多し。少數の新聞を以て、顯然、「三菱」と銘打つ時は、或はまた不便尠からざる事もあらん。

●豐川の慮るところ、或は此處に存するか。彼は是を以て。一視同仁の政綱を提げて、新聞に對する乎。

●彼は、張良、陳平を節取して自ら良平と稱する者。世人、往々、彼が華やかなる對新聞策を傳ふる者無きにあらず。

●若し、彼の日記を取つて、之を披歴するを得ば、幾多の興味ある新事實、世人の前に躍如たるものあらん。

其四

●「大阪毎日」の本山彥一、口を開けば必らず利を言ふ。社中、彼を呼んで『梁惠王』といふ。

●新聞は、利無くんば立たず。然れども、餘り多く利を思へば、新聞の品位下る。

●新聞の品位下るときは、讀者漸く倦む。

●新聞の品位を下して、而して「吾能く之を通俗化せり」と思はゞ、經營者の誤也。

●「新聞の下品」と俗趣味とは、必ずしも一致するものにあらず。

●金を惜む者は、惜まざる處無かる可らず、つねに、利、利と思ふ者は、大慾に似て、實は無慾也。

●吾輩の少時には、醫師は、患者の前に處方書を認めつゝ、高らかに、「ワッセル」何程と言ひたるもの也。今は、こういふ譯にゆかず。

●「算盤附きの」記事は、讀者の引受け好からず。多く資本を投ぜざる新聞は、讀者に、高く買はれず。

●新聞は必要品なれども、紙面は美術的ならざる可らず。美術品は、製作の勘定、餘りに、人目に露骨ならざるを要す。

●鰌は必ずしも柳の下に居らず、鯛は必ずしも餌にて釣れず。先づ好餌を散ぜずして佳鳥を獲んとするは、過慾也。

●岩谷松平は天狗を以て賣出したる者也、然れども彼は「暴利」を鼻端にブラさげる故に成功したり。

●「儲けたい」顔は、顧客をして反撥せしむ。新聞經營者は、須らく「儲けたい」の字を、筐底に秘すべき也。「和國の商ひ口とて、利徳をとらぬと、空誓文をたつれば是に氣をゆるし、何によらず買求むる世のならはし也。」

其五

●「夢てふ里に住みながら」忘れられぬは、浮世の事なるぞかし。

●されば、富貴を敝履と視たる人も、山に棲みて新聞を讀むなりけり。

●新聞は、王法に隨つて、普天の下、率土の濱、到らぬ限も無し。

●新聞は、事實を報道するのみならず、併せて「思想」を傳播す。

●昔人は、「事實」も「思想」も、ともに書束に依て傳達せり。書束は、心靈の交通機關也。

●過去の文明は、『手紙』の文明にして、將來の文明は『新聞の文明』也。

●最新の「事實」も「思想」も、すべて公開狀の形式に於て、最も速かに社會に傳達するものは「新聞の使命」ならずんばあらず。

●此の日に新たらしき公開狀は、併せて民衆を將來の文明に導く『案內者』也

●『手紙』に代ふるに、新聞を以てせるは、世紀の靈也。

●新聞が手紙に代はれるは、人生の趣味を減殺せるものなることを慷慨するの思想家無きにあらず。

◉能く、「新聞の使命」を解し、新聞の前途の爲めに、大なる抱負を以て、努力するあらんことは、則ち識見ある經營者の態度ならずんばあらざる也。

其六

●地方は原料の供給地にして、帝都は加工處也とのみ思ふ可らず。札幌藝妓の逆輸入は、まさに適例ならずんばあらず。

●帝都の賣れざる美人之を北海に貶謫して、アッシを著せしめ、以て札幌藝妓の銘を打つときは、帝都に逆輸入するに足る。

●田舍物は田舍に賣れずして、都會に賣れるべし。都會に於て、尤も貴きは、田舍の天產物也。

●新聞經營者は、啻に通信員に依つて、田舍種を輸入せしむるに留まらず、又た、東京種を田舍に送りて、之を加工して以て田舍種と爲して帝都に逆輸入せしむるの手段あるを要す。

●田舍種には風味あり。恰も、帝都の菓物と、田舍の菓物の相違あるが如き乎。

●東京の八百屋の菓物は、風塵に曝らされて、初生氣を失せり。

●百金の盆栽は往々にして、野山の若木の姿致横生するには若かず。

●田舍種を經營するの妙は、大阪の大新聞に在り。帝都の經營者皆及ばず。

●都會と地方との聯絡は、大阪人の長處也。是れ一朝にして然るを致すにあらず。其由來する處頗る遠し。

◉大阪の商舖は、支店を多く作る。東都の商舖は、支店少し。是れ東西、古來の相違なり。

●支店制度の精神は、大阪の大新聞に一貫せり。彼等が、多く田舍種を扱ひ、田舍に勢力を有するの呼吸は此邊に存す。

●朝日、毎日、京都、神戶、滋賀に支局を有するは、偶々、這般の精神の流露するものたるに過ぎず。

●而して彼等は、琵琶湖畔より神戶に至るの間、所謂上方一帶を以て、其の根據地として、之を地方取扱せず。

●帝都の經營者、亦た須らく西は國府津より、東は宇都宮、前橋に至るの間に一大圏を畫して以て、之を根據地とするの態度を執ることを要す。

●而して地方通信の機關に、幾多有力なる改善を加へ得て、以て清新にして風味ある田舍種を紙上に供給する者あるに至らば、帝都の新聞中に、一機軸たるを失はざるべし。

其七

●「人參、熊の膽、つねの藥の犀角」新聞經營者は、つねに其紙面を培養することを忘る可らず。

●吾輩は、帝都の新聞社に、圖書館の設備の缺如せるを以て、經營上の一遺憾事と爲さゞる能はず。

●櫻の樹を伐りて、肥料の行衛を識らんとするも難し。培養の行先は梢の花を見よ。

●圖書館は培養也。藥餌也。恰も鐵劑を飲ましむると一般の覺悟を以て、社主は文庫を經營すべし。効果は、一日々々に現はれずとも、落膽す可らず。

●吾輩嘗て、大阪朝日の圖書室を觀る。東洋研究に關する新古材料の豐富なる、感嘆に値す。聞說、內藤湖南の嘗て經營する處也。

●是等の材料の中には、帝國大學の圖書館にも、之を見るを得ざるほどの珍品を藏す。故那珂博士の元史譯文證補の原本、及び元朝法令全書の寫本の如き、殊に觀るべし。

●大阪朝日の幹部には多くの藏書家を有す。社主村山龍平を始め、上野、西村天囚、渡邊霞亭、磯野秋渚、及び嘗て朝日に籍を寄せたる內藤湖南、關新吾の如き、共に藏書癖を鼓吹せる者。

●何事も朝日に對壘するは、毎日の國是なれば、毎日社の三層樓上にも、亦た圖書室を設けて新古書籍を貯ふと雖も、此一事は到底、朝日に及ばず。

●毎日の本山彥一も亦た藏書癖ある者。朝日の同人と力を戮せ京阪の珍書癖を煽りつゝあり。

●由來、大阪の學者は、一種の上方趣味あり、讀書家小くして藏書家多し。出版者は少くして古本屋は多し。

●市隱は大阪の名物也。雜學、漫筆の讀書家、煙突の林底に潛みて、市隱と稱す。此の市隱なる者こそ、大阪讀書界の性命ともいふべきものなれ。

●是等の市隱は、朝日、毎日を中心として、一の讀書圈を形成す。此種の意味に於て、「朝日」「毎日」は大阪文明の指導者たるを失はず。

●這般の努力に於ては、東京の經營者は大阪に及ばず、勿論、東京には高等敎育の機關具備するありと雖も、社會敎育に對しては、新聞は一層の努力あるを要す。

●「朝日」の巡回講演、「讀賣」の大學講演の如き、まさに這般の意味に基くものたるべし。吾輩は、此種の努力が更に繼續さるゝあらんことを祈る。

●閑話休題、新聞の圖書室に至つては、記者の修養に値すべきほどのものは、未だ東京には之を見ざる也。

●聞說、德富蘇峯は、つねに記者を集めて茶話會を催ふし、以て記者の發達を圖りつゝありと。

●此の如きは、記者の才幹を啓發するの一法たるを失はずと雖も、彼の感化は限あり。寧ろ一の機軸ある圖書室を經營するに若かんや。

其八

●大阪の富豪は、新聞社の盡力する社會教育事業に參加するもの少からず。此點に於ては、東京は大阪に及ばず。

●畢竟、大阪商人は新聞を利用するの多きと同時に、また新聞社の事業をも協贊する也。

◉大阪の經濟記者の非常の多額の收入を有するは、則ち這般の理由に本づく。

◉新聞經營者と、富豪との接近は、大阪に於て密に、東京に於て疎也。東西風氣の相違に依ると雖も、亦た經營者の手加減に依るもの無くんばあらず。

●若しそれ、大學講演を爲し、或は巡回講演を爲すの際、富豪の參加を求め、或は、社內に學藝的小會を催ふして、內外の紳士學者を接近せしめ、以て新聞と有力者との聯絡を圖る如きは、有益の事たるを失はざるべし。

●其の此に到るには、新聞も富豪も、共に態度を一新するの必要あらん。經營者は富豪に聯絡すべく、富豪も亦た、進んで自ら積極的に、新聞を利用するの覺悟あるを要す。

●新聞も富豪も、いづれも互に隔離するを得ざるは、將來に於ける社會的要件也。

●東京に於ける此兩者の接近の未だ十分ならざるは、吾輩は、其の原因の那邊にあるを問はず、その一時的現象たるに留まらんことを期待するもの也。

●『義理もヘチマも一本立』といふ譯に、ゆかざることを、此兩者は共に銘記せよ。

其九

●吾輩が「萬朝」の二面を面白しといふは、「暗流」を記せば也。

●其の記事必ずしも正鵠を得るといふにあらず。然れども、暗中を模索して、未然に暗潮を標識せんと力むるは、紙面の經營を見るに足れり。

◉若しそれ既發の斷々たる事實のみを、通信種に因て料理する如きは、到底、人後に立つを免れざるもの也。

●二面を經營するといふは、かね〴〵事實の背景を研究し置かざる可からず。這般の準備無くしては、事實の報告は爲すを得べし。說明を與ふる能はざる也。

◉況して、『暗流』を描き出して、將に來らんとするの風雨を讀者に豫報し、以て讀者をして趣味と注意とを喚起せしむるを得可んや。

◉古めかしけれども、書割りは殘月に、穗に出て招く篠薄、濱風に戰ぎて、ゴンと遠寺の鐘響けば、觀衆は、或ものを豫想す。

◉吾輩は記憶す。伊十郎が大薩摩に、ソーレの聲も尙ほ耳に殘りて、舞臺靜かに、黑幕を切て落せば、團十郎は花道に出現す。大向の成田屋の呼聲、威勢よく聞ゆ。

◉吾輩は此時、團十郎に「萬古の團十郎」の意氣あるを認む。彼をして精采あらしむるものは背景也。

◉大立物や、大事件の出現には、先づ背景を整頓するを要す。新聞は、つねに此覺悟を以て、紙面を經營せざる可らず。

●此の如くするときは、出現する大立物、大事件をして光采あらしむべく、其紙面は、檜舞臺の觀を具すべき也

◉晩近、二の除名事件あり、而して犬養をして特地に光燄あらしめたるは、新聞の力たるを疑はず。

◉といふは、事、議會時節に起りて、紙面の背景は彼を引立てたるに依らずんばあらず。

◉子堀田が除名を免れざるは、政界通の夙に豫期する處也。彼の爲に計るに、議會時節に、好箇の問題を捉らへ來りて、氣燄を吐きて以て自ら處決せば、則ち犬養と相對して、男振を揚げたるや必せり。

◉此の如くして、彼は、新聞の寵兒となるを得可かりし也。彼の優柔不斷なる、則ち此好機を逸す。

◉吾輩の識る處を以てすれば、彼は子秋元と欵を通じたるにはあらず。彼堀田は、議會時節、前內閣大臣と一夕穩密の小會を催ふし、以て舊情を溫む。

◉此の意味ありげなる會合は、世間には漏れざりしと雖も、逸早く研究會の知る處となり、彼の運命は定まれる也。

●されば、子堀田は、除名書を却送して、犬養の毅然たるに倣ふと雖も、恐らくは彼の心中、竊かに忸怩たるもの無んばあらざるべし。

其十

●新聞は、知るべきだけは知らざる可らず。書く可らざることは斷じて書く可らず。『武士の義理ほど、つらきものは無』き也。

●此の條理を確守せざるに於ては、秘密の新聞種は得られず。書くを得ざる種を、多く知れる者ほど、其の記事に生命あり、精采あり。

●「素破拔」きは、必ずしも最善の方策にあらず。素破拔かざる處にも味あり。

●集會は、事實を示せども、説明を與へず。雜話は聞かるべし。

●説明は、對話に依てのみ得らるべし。而して、他人の對話は窺ひ知る可らず。此處こそ、經營者の苦心すべき處ならずんばあらず。

●此任務に堪ふるの記者は、才幹ある紳士ならざる可らず。經營者より、假りに之を目して高等探偵といふ

●或意味に於ては、活動しつゝある政事家は、皆、高等探偵の素質を有す。探偵眼を光らす者は、決して高等探偵たるを得ず。

●經營者にして、若し、社會各方面に向つて、探偵眼を放つて材料を獲ることあらば、恐らくは、其の得る處は「警察種」ならん。

●民衆をして、新聞は「人の惡」を暴露するものゝ如き感を抱かしめ、引いて、新聞を恐れしむるの情狀あるを免かれざるは。恐らくは「警察種」の餘弊ならずんばあらざるべし。

●此の如きは、吾輩、經營者の注意を望むや切なり。「人の美」を濟すは、則ち新聞の能事ならずんばあらず。

●然れども新聞記者の在る處には、竊かに警戒を加へつゝ語る如きは、世人の僻み也。

●或貴族の如きは、應接室に、二種の「接待煙草」を備ふ。其一は、箱は美なれども、內容は甚だ「お粗末」也。曰く、是れ則ち新聞記者の爲也。

●其の因由を聞けば、則ち曰く、「彼等は無遠慮に取て喫するが故也」と。其の實は、新聞記者の訪問を厄介視するに外ならず。

●吾輩も亦一場の懺悔を爲すべし。曾て東北實業大會の仙臺市に開催さるゝや、吾輩偶々、一友と東北遊を試み、序を以て大會に臨む。

●其日は、大會の最終日にして、松島に園遊會の催あり。鹽釜より船を艤するに、舳艫相啣み、未曾有の盛觀と稱す。而して、「新聞記者」の一船を特定し、以て全隊より隔離す。

●吾輩も亦た一友と共に、其船に乘る。一友は、東京某新聞の主筆也。

●歸途、列車中、市の公吏らしきが、縣の屬吏らしきと、吾輩の面前に在て相語る。

●「市」は曰く、此度こそは新聞記者も、定めて滿足したるべし。アレほど待遇をしたれば。「縣」は曰く、然り〳〵、特に記者掛を設けて、充分御馳走したるものを。『御馳走しないと、新聞記者といふ者は惡口を書く

からナアー」兩者破顏して、髯動く。

●一人ット曰く、『今朝になつて、來會した東京の新聞社があるといふじや無い乎。』他は相槌を打つて曰く、然りく、實業大會はドーデモ可し。松島に往けば善いといふのだろー。

●吾友は眞面目になつて、口を切りそうな顏を爲す。而して吾輩は獨り耐へず、腹を抱へて大に笑ふ。「市」と「縣」と何にも知らず。

●吾友は朴直の士也、憤つて曰く、彼等の人格態度、新聞記者に若かざること萬々也。何等の厚顏か、敢て新聞記者を笑ふものぞ。

●吾友は、危ふく「市」と「縣」とを責問す可かりし也。西歸車中、吾輩は、共に此事を語り出して、「埋もれ木」も「サンザ時雨」も、遙かに此の絕好の「土產話」に若かずと爲して、快笑せり。

●此事、茫として舊夢となる。借問す、彼の「市」と「縣」と健在なりや。

●世人が新聞記者の觀念より、『恐わ持テ』の一事を掃ひ去らしむるを待ば、經營者の大成功也。新聞の新世紀也。而して吾輩、切に之を新待す。

其十一

●新聞は、萬龍を絕世の美人たらしめ、太刀山をして一代の大力士たらしむ。新聞の勢力、今更ら驚くべし。

●天賞堂が新聞廣告に依て、成功せるも、亦た、世人の知る處なるべし。

●銀座に、靴屋あり。鞄、靴等、皮革を商ふ。聞說。先年、家業盛なりしとき、女あり美也。而して彼の家新平民との噂あるが爲に嫁期を失す。

●吾輩之を廣告の通人に聞く。靴屋は新平民の疑を得たるは、亡主人、好奇者にして、其の女の爲に、求婚廣告を出したるによれり。

●帝都の新聞に求婚廣告を出す者は、彼を以て先鞭と爲す。當時、世人、求婚廣告を知らず。驚きて以て、新平民にして佳婿無きに因るものと爲す。

●求婚廣告の嚆矢と爲すべきは、神風の伊勢の國に在りて、津の新聞に出たるもの也。當時、事、芽出度しくに畢りて、帝都好事者の目を惹くに至らず。

●王昭君は、醜婦に畫き成されたるを以て、異域の行あり。今の新聞は、啻に人を美醜にするのみならず、實に之を活殺するの力あるもの也。

●陛下の外、何人と雖も、新聞に投書せずといふ事を以て、其の尊嚴を誇るに足る者あらざるは、今後の實勢也。(次號完結)

四月二十五日、晩春の好天氣、繁華の帝都を眺めつゝ筆を執る。盆栽の梅、時に落花の響して、吾が萬年筆の忙はしく走る音を停むることあり。黒頭巾記す

●●禪は宇宙の原理●禪は諸學の秘奥●●

●孝明天皇御宸翰●今上天皇陛下御宣旨及御宸翰（コロタイプ版）挿入
●承陽大師自書自贊肖像●承陽大師眞筆正法眼藏稿本（コロタイプ版）挿入

永平寺監院 弘津說三師 編輯（四月二十五日發賣）

承陽大師聖教全集

禪は宇宙の原理也禪は諸學の秘奥也禪は佛教の總府也本書は日本佛教界の聖者曹洞宗開祖永平寺道元禪師一代の教典を編輯せし禪學の一大聖典也政治家軍人教育家實業家其他經國經世の志士一び之を閲讀せば霧海に南針を得て自然に安心立命を得るのみならず社會及國家を裨補すると洪大ならむ●本書內容▲解題▲大師の小傳▲（漢文）普勸坐禪儀一卷▲（和文）正法眼藏九十五卷▲（漢文）學道用心集一卷▲（漢文）永平淸規二卷▲（漢文）永平廣錄十卷◎附錄▲（漢文）寶慶記一卷▲（和歌）傘松道詠一卷▲（和文）正法眼藏隨聞記六卷▲（和文）光明藏三昧一卷▲（和文）曹洞教會修證義一卷●合計十種一百十八卷

卷數參冊菊判四號字千七百八十頁クロース特製用紙精良

正價金參圓送料廿四錢淸韓臺灣五十錢

新撰

承陽大師御傳記

永平寺監院 弘津說三師著

日本佛教各宗派の祖師四十餘人ありと雖も其學殖の深邃其見地の高明其道業の卓絶其胎範の洪大なる蓋し曹洞宗の開祖承陽大師を巨擘となすこと世間既に定論たり然るに各宗派の祖師には從來既に完全なる傳記ありて而して獨り承陽大師には之なし弘津說三師壯時より之を慨嘆し多年の間刻苦勵精して千百の材料を蒐集し從前坊間に流布する建撕記紀年錄行狀記等の記錄の外に更に一頭地を拔きて第一に大師出世當時の國家の狀況及び宗教界の形勢を寫し第二に大師弘法傳通の本願を發揮し第三に大師の宗體宗風を顯彰し第四に大師一生行狀の全班を詳述し細大一の洩す所なく敍事審精議論公明文章平易加ふるに振假名を附せり苟くも大師の流を汲むものは其緇流なると將た在家たるとに論なく此の御傳記に依り始めて大師海岳の法恩を知ることを得ん請ふ必ず一本を購ひ朝夕披閲して大師に親炙するの榮を得られよ

承陽大師自書自贊肖像及大師眞蹟並永平寺諸堂寫眞版入
大和綴正價金六拾錢送料金八錢
クロース製正價金七拾五錢送料金拾錢

發賣元 東京芝露月町 振替二九七九 鴻盟社

賣捌 麻布飯倉森江。本郷春木町森江。神田駿河臺光融館。日本橋前川。神田東京堂。京都三條出雲寺。大阪東區積文社。

此廣告によりて御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

哲學及宗教書類

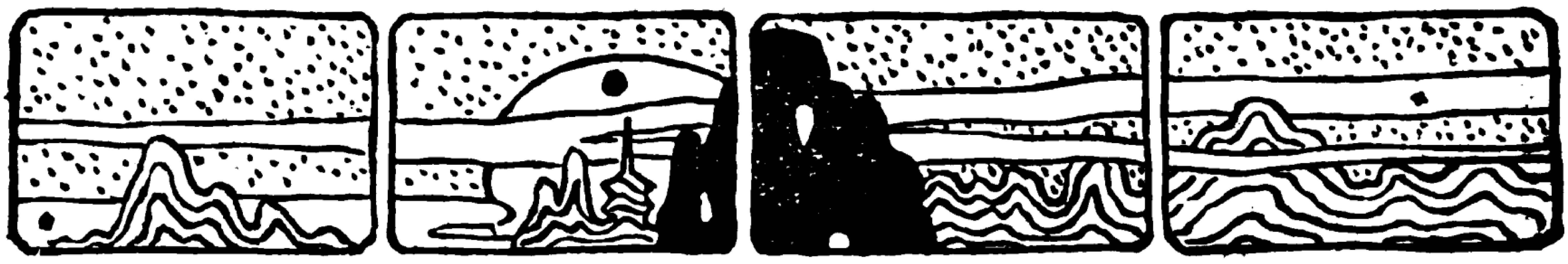
	Price	Postage
Adamson, R.—The Development of Greek Philosophy...	5.75	.18
Allen, A. V. G.—Freedom in the Church.	3.25	.12
Lévy-Bruhl, L.—Ethics and Moral-Science.	3.25	.12
Budge, E. A.—Book of the Dead. 3 Vols.	5.75	.18
Benson, M. & J. Gourlay,—The Temple of Mut in Asher.	10.50	.18
Calkins, M. W.—The Presistent Problems of Philosophy.	5.50	.18
Dastoor, R. E.—Zarathushtra and Zarathushtrianism in the Avesta.	4.50	.12
Day, B. L.—Our Heritage of Thought.	3.50	.18
Deusson, P.—The Philosophy of the Upanishads, ...	5.25	.18
Farrar, F. W.—Seekers After God..............................	1.75	.12
Griesinger, Th.—The Jesuits.	7.50	.18
Hall, H. F.—One Immortality......................................	3.00	.12
Hardy, T. J.—The Gospel of Pain.	2.00	.12
Hasting, J.—Encyclopaedia of Religion and Ethic. Vol I.	14.00	.30
Higgins, H.—Humaniculture.	3.00	.12
Hobhouse, L. T.—The Theory of Knowledge..............	10.50	.18
Johnson, E.—The Rise of English Culture.	9.50	.18
Kautsy, K.—Ethics and the Materialist Conception of History..	1.00	.12
Maccunn, J.—Six Radical Thinkers.	3.25	.12
Mencken, H. L.—The Philosopy of Fr. Nietzsche.........	4.15	.18
Newcomb, C. B.—Principles of Psychic Philosophy. ...	3.00	.12
Noyes, R. K.—Views of Religion..................................	10.00	.24
Pearson, K.—The Ethic of Freethought.......................	4.15	.18
Reich, E.—Plato. As an Introduction to Modern Criticism of Life..	5.75	.18
Royce, J.—The Philosophy of Loyality.	3.25	.12
Sidgwick, Henry.—A Memoir.	6.85	.18
Simpson, Wm.—The Buddhist Praying-Wheel.	5.50	.18
Watson, J.—The Philosophical Basis of Religion.	4.65	.18
Weinel, H.—St. Paul. The Man and his Work.	5.25	.18
Wells, H. G.—First and Last Things.	2.50	.12

東京市日本橋區通り三丁目 **丸善株式會社** 振替貯金口座(東京第五番)

大阪心齋橋筋博勞町四丁目 **丸善大阪支店** 振替貯金口座(大阪七四番)

京都市三條通り麩屋町西入 **丸善京都支店** 振替貯金口座(大阪一七三番)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



祝盃

永井荷風

一

祝盃をあげたい事があるから、是非來てくれといふ意外な電話に促されて、自分は或日の夕方、久しく訪ねなかつた舊學友の一人と新橋の料理屋で會合した。今日では互に一家の主人となり、いくらか社會上の地位も出來て、至極眞面目な顏をしてゐるが、わづかに十年の昔、まだ二十歳の若い血の狂つてゐる頃には、自分達二人の交情は同じやうなその境遇から、兄弟よりも親密であつたので、今になつて當時の彼を語る事は、直ちに自分身の幸福な昔を語る事になる。それ故自分は今、彼れが差出す祝盃の來歷をば、無理に彼に代つて話して見たいのである。

* * * * * * * * * * * *

私は〇〇組と云つて世間でも人の知つてゐる御用商人の家庭に生れたお坊ちやんであつた。團子坂の菊人形だの、奥山の見世物なぞは家へ出入りの若い者や抱え車夫なぞにつれられて、文字を知る前から已によく知つてゐた。兩親が遊山の伴をして、柳島だの向島の風流な料理屋に上つた時には、役者の手拭を涎かけにして、意氣な島田に結つた茶屋や船宿の姐さんに御飯を食べさせて貰つた事もあるし、芝居見物の折々には、靜かにしてゐない子供の事とて、棧敷の母親から體よく遠けられて、花簪が見事に並んでゐる運動場の廊下や、暖簾と提灯のさがつた茶屋の二階で、腕白ざかりの半日一日を遊び暮したそれのみならず、自宅に宴會のある時は、大勢お酌に來る藝者から、坊ちやまといはれて膝の上に抱かれた事もあり、お客樣のまだ來ぬひまを雛妓と遊んだ上句、桃割の髷をこはして母親から叱られた事さへあつた。

さう云ふ幼い時分の境遇から、私は尋常中學の學生になつても、芝居だの三味線だの草双紙や小説なぞが、好きといふよりは寧ろ人間生活の日常品であるやうに思はれて居て、其等の話しをするのが、當時の教育を受けた他の一般の學生の恐れ憚る罪惡とも汚辱とも思ふ事が出來なかつた。出來ないばかりでなく、いつか知ら一般の校風に對して輕い反抗心をも抱かせるやうになつて、第一に尋常中學校の教師の地方訛りや、容貌風采の土臭くて、洒々としてゐない事が、私には一種の輕侮を感ぜしめ、あんな土百性に叱られたり物を教つたりするのは馬鹿々々しい、氣がきかないと云ふ欝憤を絶えず起させた。同時に、當時の學生の風習として寒中にも足袋をはかず、脛までの短い着物をきて、劍舞をやつたり詩吟

琵琶歌をどなる蠻勇は、柔弱に育てられた自分の堪え得るところでないので、表面は反抗するが内心は恐れ引込んで、運動會だの遠足會などには決して顔を出さなかつた。で、私は全級の友達からは自然と遠けられ、身體つきの柔弱な事や、顔色の生白い事から、ミツスとかレデーとか綽名をつけられて、遂には私と口をきくのは學生として厭はしいもの丶やうにさへ思はれてしまつた。する中、毎年四月、各級に新しい入學生の顔が見える學年の變更期に、私の級へ有名な辯護士の息子で岩佐と云ふ少年がはいつて來たが、丁度私と同じやうな弱々しい様子から、私の爲めに先入の判斷に捉はれてゐる全級の生徒は深く交際もせぬ先から、彼をば激しく排斥したので、その結果は一も二もなく私と新入生岩佐との間を、此の上なく親密にしてしまつたのであつた。

吾々は已に十六歳であつた。級の中には廿歳に近いもの、又最上級の生徒には二十歳を越えてゐるものも少くなかつた。乃ち各敎場で敎科書の朗讀をする生徒の聲が、毎日一人二人と盛に聲がはりして行く時分である。已に聲がはりしてしまつた年長の生徒は、新しい聲がはりの者を捕へて運動場で胴上げをして囃すが例である。何故かといふと、聲がはりして大人になつたものは、年下の生徒に對して、新に男色の權利を得る譯からであつた。

男色は其の當時、薩摩琵琶歌「賤の小田卷」にある平田三五郎の傳記にも歌はれたやう、海國男子が慷慨悲憤の意氣を養ふには是非必要であるとの主意から、盛に學生間に行はれた惡風であつて、こゝに、全級のものは排斥された私と岩佐二人の友情をも、直ちに男色の原因であるやうに解釋して、誰れが云

出すともなく、「イーチアザー」だと囃し初めた。イーチアザーとは、二人の中の何れが年長者、乃ち男色社會で云ふ「義兄」の權利を有するのでもなく、二人同等の權利を以て〇〇〇〇〇〇〇との意味である。私も岩佐も、この汚名に對して一方ならず憤慨したが、然し辯解すればする程猶ほ囃し立てられるので、全くどうする事も出來ない。二人はます／＼孤立して内心男色黨に對して、非常な反抗の念を强めるやうになつた。その結果、唯一の復讐として同じ色情の汚名を蒙らせられるなら、いつそ大膽不敵に女色を敢へてしやう。學生が道德上蛇のやうに恐れ戰ぐ禁制を犯して見るのが、一番痛快であると思つた。

吾々は實際其の頃から、嘗て經驗した事のないさま／＼な慾情の發動を感じ始めたのだ。昨年から今年へかけて、身の丈けが一度に二三寸も伸びてしまつた。顏面の皮膚に面皰が出來はじめた。たつた五分間でも身體を靜止させてゐると、坐つてゐても立つて居ても、筋肉中に一種の苦惱を覺えて、無暗に蹶起して、腕の力一ぱいに美少年でも、犬でも猫でも木の幹でも何でもよい、自分以外の何物かを抱きかゝえて見たくて堪えられない。〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。凡て角度を有する直線よりも、圓味をもつた曲線的の物體が驚くほど眼につき出した。今までは無頓着であつたが、自分の身體から出る汗や唾液などにも一種の匂ひのある事を感じ得るやうになつた。家に召使はれてゐる下女が、自分と同じ屋根の下に襖幾重を隔てゝ生息してゐる事實が、切ないほど明瞭に意識されて來た。然し私は下女の容貌、年齡、風姿などには却て無頓着で、

いや事ろ其等を觀る暇がなかつたと云ふ方が適當であらう。〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。

とは云ふもの丶私とて全く自由な野生の動物ではない。それ故、人間傳來の習慣や教育の感化に妨げられて、容易に肉情の奴隷にはなり得なかつた。私には一體、男がどう云ふ順序方法で女に云寄るべきものか、實地に差當つて見ると、どうしても解釋が出來なかつた。私は絕えず下女に接近して機會を覘つてゐたけれども、つまり何とも手の出しやうが分らなかつたのである。其の頃から夜と燈火とが、私の心に無邪氣な小供の時とは全く別様の力を及ぼすやうになつて、私は日が沈んで晩飯の後、机の上にランプの光の美しく輝くのを見ると、どんな事をしてもぢつとして家の中に坐つてゐる事が出來ず、或時は風が吹いても雨が降つても、雨など降れば猶更に、何處へ行くといふあてもなく家を出て、ぶら〲人通りの多い往來を歩いて、直ちに寄席通ひを覺えてしまつた。夜店の人込みに交つて古本屋の前に佇んだ結果は、幾度となく躊躇逡巡した後、次第に大膽破廉恥になつて、〇〇〇〇〇〇小說繪畫、又は〇〇〇〇〇〇〇〇〇醫學類似の書籍を手に入れ、苦惱の一時的慰籍にしたばかりでなく、又冷靜に他日實驗の參考に供しやうと熱心に熟讀した。

これとは別の話であるが、父母教師にかくれて、私が喫烟をしはじめたのも、矢張この頃のことである。私は生れて始めて、巻煙草の一本を喫し終つた時には、急激な眩暈を感じて倒れかゝつたけれど、剛ければよいのだと云ふ强大の希望にすがつて、決して勇氣を沮喪させなかつた。親友の岩佐は、密か

に父が晩酌の德利を盜んで、始めて酒を味つて見たが、唯だにがいばかりで一向世間の云ふ如く賞美する程のものではないと云つたのも、同じく此の時分の事で、吾々はつまり、どうしたなら、一日も早く惡德に染り得るかと急り立つてゐたのだ。

かう云ふ煩悶と準備の時間は隨分長く、一年餘も續いたが、最後の決心斷行の機會は、尋常中學を卒業する曉を待つて、漸く吾々の身の上に廻つて來たのである。吾々の卒業した尋常中學は、〇〇〇〇學校の附屬で、乃ち〇〇〇〇の中學校と云ふ處から、高等學校始め凡ての專門學校には、他の私立の中學と異り、入學の競爭試驗を要せず、其の儘入校し得る特權をもつてゐたので、私も岩佐も四月に中學を出てから、其の年の九月、志願した高等商業學校の學年開始の時までは、これと云ふ束縛なく自由に遊べる幸福な學生となつた。

二

櫻の花が散り盡して、庭中は繁茂する若葉で、一日增しに小暗くなつて行く。恐しい毛蟲が枝々に湧出して這ひまはる。雜草が盛に生長する。竹の子や茸が雨の降る度び、じく／＼濕つた地面を劃つて頭を出す。ペストや疱瘡が流行する。生濕い風が吹いて頭が痛む。重苦しい綿入れから袷に着換へると、身中が輕くなつて、自分の手ながらも、自分の肌をば磨擦して見たく覺える。私は書物を讀む事も、考へる事も出來ない。どうかすると原因なしに無暗と心臟の皷動が烈しくなつて、何か知れない一大事件が自分の身に切迫してゐるやうな氣がする。そして其の大事件を濟ましてしまはない中は、私はいかに

勉強したくも、する事は出來ないと云ふ事が、別に事實として證明されたわけでもないのに、證明されたよりも却て動しがたく意識されて來た。

私は心だけでは、早やすつかり覺悟をきめてしまつたのだが、然し前にも云つたやう、私の身近かに寢起きしてゐる召使ひの女には、どうしても私の意中を打明ける手段や機會が今もつて見出されない。私は子供の時分に能く見知つてゐた藝者や茶屋女の事を思返した。男を恐れずに、却て先から吾々を誘つてくれる花柳界の女によらなければ、私はとても自身から進み出る勇氣がない事をば、次第に了解しはじめた。今は唯だ自ら起つて、自ら進み出て、其等の女に接近しさへすればよいのである。

遂に最後の機會が到來した。其れは學校の同級會から、一同尋常中學を卒業した祝賀會をかねて、鎌倉へ一泊の徒歩旅行を催す廻狀の葉書の來た時で。然し私は以前から反目してゐた關係もあるし、先方でも無論私の參會を豫期してはゐまい。此方も行つたところで面白くないと思つて、往復葉書の片ひらに直樣斷りの文言を書送つたが、父母に對しては、問はれもせぬのに朋友の義理を說き、過分な旅費を請求して、公然外泊の許可を得ることゝなつた。

其の日の夕刻、前以て打ち合せて置いた通り、親友の岩佐が自分を誘ひにきた。岩佐も今度の好機を逸しては、他に外泊の口實を見出す事が出來まいと思つてゐたので。二人は早や夏らしい夕風の吹きそめる往來へと、親の家をば逃るやうに飛出し、四五町がほどは何にも云はずに、互の顔さへ見ず、非常に急いて、そして世間を憚るやうに町の溝緣を歩いて行つた。その時分私の家は市ヶ谷の濠外であつた

のて、足にまかせて來かゝつた處は九段の公園てあつた。往來はまだ明く、公園の葉櫻の陰ばかりが、已に夜らしく暗くなつて居るのを見て、私と岩佐は同じ秘密を包む身の、いづれが云出すともなく、殊更に暗い木立の奥の腰掛に疲れた足を休めた。

「君はいくら貰つた？」

「拾圓。」

「さうか。僕の處に十五圓ある。」

「十圓に十五圓、プラス二十五圓だね。大丈夫だらうな。それだけあれば。」

私は不安らしい調子を漏すと、岩佐も同じく。

「大丈夫だらう。僕もたしかに大丈夫だと思ふがね。君は讀まなかつたかい。一昨日の都新聞に又出て居たぜ。今度は賓來樓ぢやなくッて、安尾張ッて云ふ樓だ。三圓の勘定が拂へなくッて馬を曳いた奴があるッて。」

「うむ。三圓か。そんなら、どんな馬鹿な目に會つたつて二十五圓ありや大丈夫だ。」

二人はこの半年ほども、互に都新聞の花柳通信を研究してゐたので、それから得た特別智識を此處に再び繰返していろ／＼と語り合つた。する中、あたりは夜になる。葉櫻の間から町の灯が見える。二人は腰掛から立上つた。

全體、私達二人は互にかうと覺悟をきめた後、さらば待合に行かうか、遊廓に赴かうかと、大に迷惑

したのであるが、唯一の案内記なる都新聞其の他の研究から、藝者は高價でもあるやうだし、又直ちに吾々の意に從ふものか否かの要點が、無經驗のものには恐しく不分明である。それに引換へて吉原の遊廓は、丁度私の祖母の墓が千住の法華寺にある處から、度々の墓參りに吉原土手を通つて其の位置も充分呑込んで居るので、かくは冒險の第一歩が自然と此の方面に向けられた次第であつたのだ。

私達二人は公園の木下闇を去るに臨んで、家の手前止むを得ず穿いて出た小倉の袴をぬぎすてゝ、風呂敷に包んで片手に抱えた。そして三番町通りを眞直に、九段の坂上まで來ると、丁度暮れそめた市中の燈火が一面に見渡すかぎり、眼の下に輝いてゐる。突然私は此の急な長い坂一ッ降りさへすれば、あの美しい燈火の海のはづれに、白粉をぬり、赤い襦袢を着て、〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇のかと思ふと、一種名狀すべからざる感慨に打れて、覺えず立止つて遠くを眺めた。

坂を下りて神保町通りの牛肉屋で晩飯をすまし、再び往來へ出ると四ッ角のたまりに客待をしてゐる向鉢卷の車夫ともが、「旦那。口あけてす。仲までお安く參りませう。」と云つた。私等二人は人の秘密を見拔く車夫の炯眼に殆ど顫へるほど驚き恐れて、物をも云はず三四町ばかりは再び馳けるやうに歩いた。然し、小川町通りへ出ると、賑かな晩春の夜の人通りの中をば、目まぐるしく空車を曳廻してゐる車夫どもが、散歩の書生さへ見れば其後についてきて、何れも「旦那、仲まで。」と勸めてるのに氣がつき、私達は漸く安堵したばかりか、勸誘に應じて、先づ、これも都新聞の研究で知つた朦朧組の悪車夫なる

や否やを幼稚な質問て確めた後、賃錢をきめて二人乘りの合箱に乘つた。車夫が黄い掛聲て往來の人を叱咤しながら、淡路町から眼鏡橋、お成道から廣小路へと、一散に馳過る繁華な町々の變轉をば、私達二人はどれ程不可思議に眺めたてあらう。突然上野の森下へ出ると、あたりの暗さに、何ともつかぬ恐怖を覺える。其時車夫は走つてゐる歩みを不意と止めて、「旦那、つけませう。お馴染はどちらてす。」と云つた。私等には最初どうしても其の意味が分らなかつたが、やがて分ると共に、私等は更に又當惑してしまつた。車は軒の低い人家つゞき、水蒸氣の多い濕つた場末の町を過ぎ、間もなく衣紋坂から仲の町へと馳け下りたので、私等は賃錢の外に過分な酒手を渡して車を下りたが、さて何處へ行つて、どうして登樓してよいのやら、全く途方に暮れてしまつたのてある。

引手茶屋の並んだ仲の町通りは薄暗くて、吾々の最初の遊蕩者には、却て氣味惡いやうにも思はれたが、娼樓軒を連ねた左右の大通りは、吃驚するほどに明く、其の明い灯の中から、女の衣服が眩しいほどに眼を射る。通行の人々を呼び込む黄い女の聲が耳を劈く。私達は已に細見記と稱する小冊子て、廓内の地理はすつかり研究して置いたのてあるが、今は早や方角も分らず、胸の動悸が無暗に高まり、顏が火のやうにのぼせるばかりて、折々息をつく爲めに仰向くと、兩側の高い屋根の間から、大空の星が下界とは如何にも關係のないやうに遠く小さく輝いてゐる。私達は無意識に遊廓の外へ逃れ出たいと云ふ急激な感情に追はれて、其の出口を見付けやうとて夢中になつて早足に歩いたが、道の行くがまゝに忽ち、後日に知つた「河岸通り」の狹い横町へ行當つた。

立並ぶ樓娼が左右から隧道のやうに蔽冠さつてゐて、近く兩側の格子內から叫ぶ女の聲と、ぞろぞろ歩いてゐる遊客の雜沓とて、狹い橫町は先が見えないやうに思はれる。私達は廓外へ逃れ出るには元の廣い通りへ戻つた方がよいと思ひながら、後から押して來る人込みの爲めに、知らずぞろぞろ先へ進み出ると、もう前後いづれへ行つても、橫町の盡る處には容易に出られないやうな氣がして、自然とうろうろ後方を見返りながら立止つたが、すると忽ち、格子から長煙管を突出した一人の女が、巧みに岩佐の袖を引捕へた。

「おい、君、おい、君。」と叫聲を發して岩佐は私を呼んだが、然し私も驚愕するばかりて、實際どうする事も出來ない。

「ちよいと、お上んなさいよ。お坐敷があいて居るんですから。」

他の女が岩佐を捕へた女と一所になつて煙草を吸付けて出す。入口の臺の上に坐つてゐる男が、「へ旦那、決して御散財は掛けません。お約定でお二人さん、一圓五十錢、へえ、決して御散財はかけん。」と云つてゐるのが僅に私の耳へはいつた。

三

私達はどう決心して此の樓へ上つたものか、今になつては殆ど說明する事が出來ない。何でも格子先へ捕へられて、女から登樓をすゝめられてゐる處を、ぞろぞろ歩いてゐる人達に顏を見られるのが非常に氣恥かしくて、其れから身をかくすには、否應なしに登樓せねばならぬはめになつたからであるらし

い。私は足が顫へて廣い入口の上草履をはかうとしても、はけなかつた事を覺えてゐる。そんな間にも然し又、東京育ちの私には妙な虚榮心があつて、初めて遊びに來たと思はれるのが何よりもいまいましく、其れのみならず初心と見られては無法な暴利を貪られる恐れがあると知つて居たので、私は一生懸命に氣を落ちつかせ、折もあらば何とか此の社會の通語をも振りまいてやらうとさへ心に思つた。

そのせいか、私は表梯子を上つて、お客樣ア、と凄じく叫ぶ聲の中に、いざや引付部屋の坐蒲團に坐るとなると、案外にも虚心平氣になる事が出來た。それにつけても此の場合、私が心底から感謝せねばならぬのは、新聞の三面記事、寄席の落語は無論の事、春水が「梅暦、」紅葉が「伽羅枕、」柳浪が「今戸心中」等の著作と共に、私が日頃行馴れた理髪店の若い者の實驗談であつて、其れ等から得た智識によつて、私は番頭や遣手に對する應答も皆一々に思當る事ばかり、代り臺の請求をも成功はしなかつたが、一通りは手嚴しく拒絶する勇氣さへあつた。けれども書物は要するに書物に外ならず、公式は到底公式に過ぎないものである。其れ故私は隨分と意想外な事件に驚かされる事も澤山あつた中に、其の尤も甚しかつた一例は、格子先で岩佐の袖を捕へた女が坐敷へ來ると、いきなり私の顏を見て、濟生學舍の齋藤さんに能く似てゐるから賴もしいと云つて笑ひ出す、つゞいて白足袋をはいた禿頭の番頭が、いやに腰を低くしながら坐敷の片隅にちよこんと坐つて、

「御遊興中甚だ恐入りますが一寸御宿所と御姓名を。」と膝の上に帳面をひろげ出した事である。

私も岩佐も共に覺えず顏を見合はして途方に暮れてしまつた。すると幸ひにも女の一人が、

「きつと本郷だよ、この人は。ねえ、齋藤さん。お前さん東陽館ぢやないの？」と冗談を云つてくれたので、私は漸く出鱈目をいふだけの血路を見出し得たのである。

……………………………………………………………………

兎に角に、其夜はあけた。私達は一晩中わかれ〴〵になつて、互にどうして仕舞つたらうと心配してゐたので、朝早く一所に揃つて遊廓を出た時には、言葉に云へない嬉しさ懐しさを覺えたが、然し又、互の身を省みては何とも云へず氣恥しい處があるので、口もきかず顔さへも正面には見ぬやうにして、足の行くまゝ淺草の公園まで歩いた。二人とも早く家へ歸つて疲れを休めたいと思ふのであつたが、鎌倉へ一泊旅行といふ口實に對して、さう早く歸宅するわけには行かない、止むを得ず疲れた足で、午前は向島を歩き暮し、午後は公園の見世物を見廻つて漸くの事、灯のつく頃に別れて家へ歸つた。

私は兩親に顔を見られる事を憚つて、部屋へはいると、晩飯も食はず、遠足のつかれを云譯に、すぐさま寢床をとつて横になり、人の居ない處で、一人つぶさに昨夜の事を回想した。第一に私はよくも不知案内の、あんな處へ出掛けられたものだと驚く。驚くだけ、呆れるだけ、私はかゝる無類の冒險を敢てせしめた其の原動力について、更に烈しい驚きと不思議を感じたが、それに反して私は生れて、初めて〇〇〇〇〇〇〇した印象其のものが、今になつては寧ろ甚だ薄弱不分明である事を怪んだ。從つて私はあんな事があれ程までに、私の精神肉體兩方を苦惱せしめたのかと思ふと、いつも現實が豫想に伴はなかつた時經驗する落膽氣拔けを覺えた。

何しろ一日を歩き暮らした疲勞で、私はその夜はそれなり眠つてしまつたが、翌朝はどうしたものか、企てずして非常に早く眼がさめた。すると、寢床の中から第一に私の眼に映じた室内の樣子が、昨日の朝目が覺めて見た貸座敷の部屋とは全く違つて居る――女着の引掛つた小屛風も長火鉢もない相違の點から、私は其の瞬間始めて、私の身體は家庭を離れてあんな遠い處まで出掛けたのだと云ふ冒險を、動し難い事實として明瞭に意識した。すると同時に、冒險後の私は最早や其以前の私ではない。其の間に進歩とか階段とか、何か知ら區別のついたやうな心持がして、私はやがて寢床から起き出ると、昨日まではあれ程に私を苦惱させ小間使の姿をも、今では大分落ちついて見遣る事が出來る。私は凡て實歷が與へる得意を感じないわけには行かなかつた。すると今度は次第々々に、かゝる經驗を與へて與れた相手に對して感謝と云ふやうな一種の柔い感情を覺え、もう一度折を得て、其の人に近いて見たく思ふのであつた。

そこで私は、自然とかの醜業婦の容貌態度の凡てを回想したが、どうしても自分の望むやうに、はつきり描きだす事が出來ない。白粉を眞白に塗つて、おそろしく大きな髷に結ひ、赤いびか〳〵した着物をずる〳〵引摺つてゐた……と云ふだけで、つまり一昨日自分が始めて見て驚いた格子の中、明い燈火の光の中に動いてゐた幾多の女の其の一人であると云ふに過ぎない。凡て特別の個性的印象が極めて薄いのであつたが、その癖、かの女の一擧一動些細な言語までが、丁度霞を透したものゝやうに不分明であるだけ、妙に私の心を焦立せる。そして翌日又其の翌日と日數のたつに從つて、ます〳〵激しくなつて行

つた。

私は案外にも私の懐中に、幾圓かの剩錢が殘つてゐた事を思返すと、もう矢も楯もたまらぬやうな氣がした。けれども私は同じ經驗をした岩佐が何とも云出さないのに、自分から切り出すのが一種の屈辱であるやうな衒氣に妨げられる。と云つて、其のまゝ中止してしまふには忍びない。そこでとう／＼私は大膽にも單獨で出掛ける事とした。ところが可笑しいのは私等二人が期せずして、いつも同じやうな事ばかり演ずる事で、後になつて聞けば岩佐も矢張り私の手前を憚つて單獨で出掛けたさうである。

私等はかく前後二回の放蕩で、再び舊の無一文の親がゝりの學生になつた。私達は毎月の始めに親の手から五圓程、書籍筆墨料其の他の小使錢としては過分な金額を貰ふのであつたが、其れだけでは僅か一回の遊興費にしかならない。私達はどんなに煩悶しても其れより以上には、女性に接近する事の出來ない學生の身分をつく／＼情なく思ふにつけ、其の年の夏、商業學校に入學するや否や、一日も早く卒して月給取りになりたい、金錢の自由を得る身になりたいと願つた。其の頃私達二人が人生の目的はの凡ては、全く「女」と云ふ一語の外にはなかつたので、萬が一落第などして卒業の期日が後れゝば後れるだけ、不如意な書生で居なければならないと思ひ、隨分よく勉强した。けれども卒業するまで四ヶ年と云ふ年月、其れをば此儘靜肅に送ると云ふ事は到底出來得べきものでない。過度の制慾は勉學を妨げ、健康を害するものと確かに信じて疑はなかつた。「浩然の氣を養ふ」と云ふ言葉が今日の「自然主義實行」なぞの代りに、其の頃よく吾々の間に使用されたものである。

私は岩佐と二人で學校の午飯後、休息の時間にも校門を出て、一橋通りから錦町、神保町通りを散歩して、煙草屋ビーヤホールの娘、勸工場の賣娘などに目をつけ、入用でないものまで買つて見て、手段のさまぐ\を盡し、どうかして金のかゝらぬ相手に有りつきたいと苦心したが、其の結果は私よりも先きに岩佐が占め得る事になつた。岩佐は裏神保町の西洋料理屋の娘お富といふのに成功したのである。私は實に羨しく思つた。戀愛其のものを羨んだよりは、戀愛が與ふる特權を羨望したので。「うれしいわ。」とか「いゝ事よ。」とか、「あんまりだわ」「明日まつてゝよ。」などの言語が若い娘の口から發音されるのが、私の耳にも美しく優しく聞えない事は無論ない。けれども私には、さう云ふ優しい言語よりも其れを満す〇〇〇〇〇〇〇が岩佐の所有物であると云ふ事實の方が、どれ程強い感動の原因になつたか知れない。戀愛と云ふものは金錢其他の煩ひなくして、こんな美しい物の占有者たらしめるのかと思ふと、始めて私は戀愛と云ふものゝ眞價値を知つたやうな氣がした。私も是非何かを所有せねばならぬ、せずには居られないと昨日にも増して急り立つた。

私はいつも岩佐と一所に連立つて西洋料理屋に行つたのであるから、岩佐がどうして最初娘お富の心を捕へたか、其の樣子はよく目撃して知つてゐる。岩佐それ自身にも全く不意の賜物であつたので、私も其の通り、不意の機會を待つより仕方のない事は、實演者の岩佐に質問するまでもなく了解されて居る。あゝ機會を待つ。此れほど頼みのない不確實な事はない、氣を焦立たせるものはない。私は遂に無法な所業を敢てするに至つた。私は或日の夕方、私の書齋にランプを持つて來る召使〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇。僅か三四回遊廓に出入した其れだけの經歷で、私は其の以前どうしても敢てし得なかつた事を無造作に爲しとげる事が出來たのである。進歩と云はねばならぬ。經驗の尊ぶべきは、實に近世の科學を產んだばかりではない。

四

私は恰も冒されてゐた惡熱から全癒したやう、頭がすつきり輕くなつて、其の後は夜も寄席などへは行かず、出來るかぎり身を入れて勉强したが、然し其の間に絕えず私の心を苦しめる一ツの事があつた。其れは小間使と私の關係が人に知れはしまいか、と云ふ事で、此の儘事なくすんで吳れゝばよい、若しや姙娠でもされた時にはと思ふと、私は覺えず戰慄するのであつた。世の辛酸を知らない其の頃の私には、まだ深く人の眞情を了解する能力がなかつたので、私に身をまかした處女が、どれほど精神的に私を思つてゐてくれたか、そんな事はすこしも頓着してゐなかつた。私は小間使の容貌とても、其[illegible]しい目付の美點よりも、寧ろ大きい口付の缺點の方をよく知つてゐた位で、萬一秘密が現はれて手[illegible]を取られるとか、或は止むを得ざる事情が私に結婚でも强ゆるやうな事になつたら、私はどうしやう。疑念が產出す恐怖心の高じた瞬間には、私はどんな制慾の苦惱でも其れを忍ぶ方が、却て容易であると思ふのであつたが、學校の歸り道に美しい女を見たり、淫卑な新聞の記事を讀んだり、殊には夜更けて私の部屋へ〇〇〇〇〇女の姿に接すると、疑念や恐怖は忘れずにゐながら、矢張湧き起る慾情のまゝに關係を絕す事が出來なかつた。

私は民法や刑法講義の筆記を濟書する時など、折々こんな事を考へた事がある。個人の罪惡は犯す以前に於て、それだけの準備方法をして置けば、理論上どうしても曝露されべきものでない。裁判事件の如何なる實例に徵しても、罪の發覺は探偵者の機敏を證するよりも、必ず何處かに犯罪者の用意の缺乏を示してゐる。私はつまり學生の間だけ、一個の女性をば何等の後難なく弄んでゐたいと云ふ、誠に自分勝手な、誠に怪しからぬ、時々は自分ながら淺間しい考へを抱いてゐたので、然しそれが道徳上は許さないとしても、實理上は決して不可能の事でないと思はれたのである。

全く不可能の事では無かつた。私が最初關係した小間使は半年ほどたつて、實父が大病とやら云ふ事て、暇を取る爲め迎ひに來た母親につれられて、八王子在の家へ歸つてしまつた。まづ何事もなく濟んてしまつたのかと思ふと、私は云ふ可からざる安心と其れに伴ふ一種の疲勞につれて、惡い事をした、かわいさうな事をした、折があつたら親しく出會つて罪を謝したいやうな氣もすれば、又災難がいよいよないとなつて見ると、今度は自ら進み出て、かの娘の生涯を保護してやりたいやうな心持もしだした。私は恐らく此の瞬間ほど、劣情から離れて彼の娘の容貌其の他凡てを美しく優しく思つた事はあるまい。出代りに新しく奉公にきた小間使は東京の町の者て、以前のよりはずつと様子がよかつたに關らず、私は別に手を出さうともせず、いつも妙に氣が沈んてしまつて、學校の事も女の事も世の中が凡てつまらなく悲しく思はれた。

三ヶ月程して、八王子の娘から一通の手紙が屆いた。お屋敷にゐた時分の事は夢のやうな氣がする。

ふつゝかな田舍の娘の身には、都の若樣のお情が一生忘れられない。いかな憂苦勞をしても最一度東京へ出て、一目なりとお目にかゝりたいと云ふやうな事がこま／＼と書いてあつた。私は再び空恐しくなり、寸時も早く何處にか姿を隱さねばなるまいかと思つた。無論返事なぞ出しはせぬ。若しつまらぬ後日の證據になつては大變だと思つて、其のまゝ強いて心を冷靜にしてゐたが、すると又二三ヶ月間たつて、今度は娘の母親から私の家へ當てゝ一通の端書が到着した――長年お世話に相成り候娘事、同じ在のさる處へ目出度く嫁入したとの禮手紙である。あゝ、私にして若し、幾分でも宗教的觀念のある人であつたら、地に跪き天を仰いで感謝の涙に咽んだであらう。一個の處女を弄んだ大罪惡が私の身の上に何等の懲罰も應報もなく過ぎ去つてしまつたのかと思ふと、私はいつそ不思議な氣味惡い氣もすれば、同時に又、この分で行けばもう締めたものだと、ます／＼大膽不敵になつて、私は出代りに來た第二の小使に目をつけ始めた。

丁度學年試驗の成績が分つて、以後三ヶ月は暑中休暇にならうと云ふその晩の事。夕立の過ぎた後黃昏は一しほ涼しく、蒼い夕闇の光の中に垣根の夕顏が眞白く咲いてゐる。晩飯をすまして一人、緣側に腰をかけてゐる。隣と地境の高い樫の植込から、涼しい風が木の葉をゆすりながら流れて來て、何とも云へぬ程心地よく、單衣の裾をまくり上げた兩足兩脛の皮膚を撫でる。垣根の外には女の聲がして行水をつかふ水の音が聞える。蟲の音が其れにも驚かず、早や秋の夜らしく鳴き初めた。私は其の日の午前に、試驗の成績を見にと學校へ行つた時、生徒控所の壁に、牛乳配達をしてゐた同級の學生が苦學

と勞働過度の結果病氣になつて死んだについて、校友會の有志者が葬式の寄附金を募集する旨の掲示を讀み、世の中には氣の毒な書生もあると思つた、其の事も今てはもう跡方なく忘れてしまつた。私はどれだけ私の身の上が幸福てあるのか、そんな問題をも考へなかつた。考へる必要もないので、私は二三日中に兩親始め一家中が避暑に行つた留守になつたら、心のまゝに小間使に近く事が出來やう。最初は何と云つて切出さう、次には如何なる手段をめぐらさうかと、次第に暮れそめる夏の空、燦きだす星の光を眺めながら、他愛もなく其の事ばかり考へ詰めてゐた。折から突然、あわてた風て訪ねて來たのは例の親友岩佐てある。

「君、どうしたんだ。今日は學校へも來なかつたぢやないか。」

「實によわつた事が出來た。どうしたらいゝだらう。」

岩佐の樣子が如何にも穩かならぬので、私も語調をせかして質問すると、

「あの西洋料理の一件ね、お富がコレになつたのだ。」と岩佐は手眞似をして俯向いた。

「さうか、それア大變だ。」私は恰も自分の事てもあるやうに吃驚したが、僅に思返して、

「君、然し其ア事實たしかなのか。」

「三月目になるんだとさ。」岩佐は俯向いた顏を上げる勇氣さへなかつた。

「仕方がない。其ぢや君、仕方がないから逃るさ、丁度夏休みだから、何處へてもいゝ、鼬の道をきめてしまふのだ。さうすれば、よし先方の親が君の家へ何とか云つて來ても當人の君さへ居なければ、ど

うする事も出來なからうぢやないか。」

「さうだね。其より外に方法はないかね。ぢや僕は房州に行かう。」

岩佐は後の事を私に頼んで其の翌日房州へ旅行した。この一件から、私も再び身の上が空恐しく思はれて、折角手を出しかけた小間使にも當分見向きもせず、兩親と共に大磯の別莊へ避暑に行つて、秋九月の半、學校の始まる三日程前に東京へ歸つて來た。

早速其の後の樣子をさぐる爲め、私は裏神保町の西洋料理屋へ出掛けて見ると、不思議や其の家はたつた夏三月の中に代が變つて、汚らしい支那料理屋になつてゐた。近所で事情をきいて見ると、お富の家はつまり營業が思はしくなかつたので、今では芝邊へ引移したとばかり、委しい事が更に分らなかつた。私は驚きもする、喜びもする。直樣岩佐に向つて厄難已に去つたから、安心して歸京しろと云ふ手紙を發送した。

五

それなり私達二人は娘お富の消息を知らなかつた。やがて定期の年限に學校を卒業して岩佐は銀行、私は會社に雇はれて、土曜日、日曜日と云へば必ず二人連立つて東京中の遊廓から待合料理屋をば散々遊び歩いてゐた結果、時々はいまはしい病氣にさへ感染した事もあつたが、そんな恥づ可き秘密は誰一人知るものはなく、私達は二人とも其の社會の先輩から望を囑されて、教育のある無垢の令孃をば、其の親達が懇望して、私達放蕩者の嫁に與れた。そして子供まで設けた。私達は初めて登樓したかの吉原

の小格子の名も、小間使の名も、西洋料理屋の娘の事も、いつか忘れ果てゝ、こゝに早や十年。

岩佐は職務上の所用があつて、二三日前靜岡へ行つたさうであるが、其の時停車場前に小綺麗な休茶屋を出してゐる女房の様子が、何處となく見覺えのあるやうなのに、其れとなく聞いて見ると、間違ひなく昔の西洋料理屋の娘お富であつたと云ふ事である。岩佐は其日までも思ひ出せば流石に心疚しい私生兒の事を聞いて見ると、あれは四ヶ月目に流産してしまつた。其の時分から一家の生計がいよ〳〵つかなくなつて、お富は靜岡の藝者になり、間もなく落籍されて、今では多少の財産も出來、子供もあり、奉公人の三四人も使つてゐる有福な休茶屋の内儀になつて居るのであつた。

* * * * * *

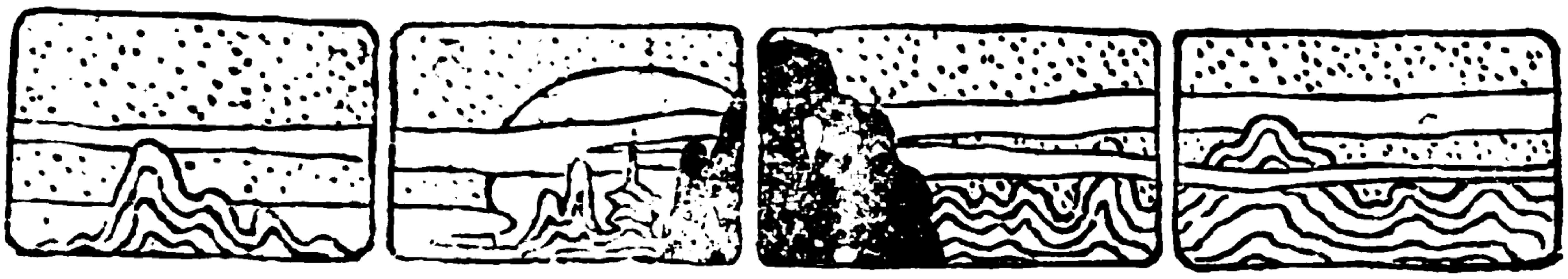
「祝盃を上げざるを得ないぢやないか。ねえ、君。僕はたつた今新橋へ着いたばかり、まだ家へも歸らんのだ。何しろ一刻も早く君に逢つて話がしたいと思つて電話をかけたのだ。我輩の昔の罪惡もとうとう消滅してしまつたよ。僕がお富を弄んだと云ふ事が、お富の身の上には少しの不幸にも幸福にもなつては居ないのだ。世の中は實に不思議なもんだね。あの時さうと知つてゐたら、僕は今日までこんなに良心に咎めて苦しみはしなかつたのだ。」

岩佐は云ひ終つて盃を私にさす。私は一口飲んでから答へた。

「宗教家や教育家が學生を嚇すのと、實際の世の中とは可笑しい程ど違つてゐる。バイブルなんぞ見ると、噓一ツついても早速地獄へ落ちさうな氣がするが、僕達見たやうに散々惡い事をし盡しても、お互の

身の上に少しも應報がないやうでは、聖書や論語に對しても何だか氣の毒のやうな心持がする。眞實の事を云へば、僕等の妻なぞは少し深い考へがあつたら、一日だつて心持よく僕等の妻になつちや居られなからうのに、今日ては何も彼も夫の昔を知つてゐながら、こんな人に身をまかしたのかと別に口惜しいとも悲しいとも思はない樣子で、大に滿足して幸福にやつて居る。實に不思議なもんだよ。君のところの子供は皆な健康かね、僕なぞはとても子供なんか出來まいと思つて居たが、もう二人になつた。醫者に見せた處が少しも惡い遺傳病なぞはないさうだよ。はゝゝは。僕も祝盃を上げなくちやならんね、はゝゝゝは。」

私達二人は遂に藝者まで呼んで祝盃の數を重ねた。（完）



恐怖（アンドレイエフ）

上田敏

沈默

一

春の夜鳥の歌が響きわたる五月のある月の良い晩、敎父イグナチウスの妻は夫の書齋へ入つて來た。顏に苦痛の色を浮べて、洋燈持つ手も震へて居る、夫の傍へ來て、そつと手を肩に掛けた。急上げる啜泣を怺へながら、

――貴方、エラちやんに會つて下さい。

向直りもせずに、敎父イグナチウスは眼鏡越にぢつと妻を見詰めた。妻は空いてゐる手て、絶望の身振をしながら、低い長椅子の上に、ぐたりと座つた。

まあ、ふたりとも何といふ……無情な人たちだらうと、緩くり言つた、終の言葉には殊に力が籠つてゐた。如何にも人の好ささうな瘇んだ顏も今は懊惱を堪へるので、皺が寄つ

てゐる。夫や娘の酷たらしさを面て見せてゐるやうだ。

親父はからからと笑つて立上つた。本を閉ぢて、眼鏡を外して鞘に收めて、ぢつと考へ込んだ。銀毛も所々には雜つてゐる長い黒髯は、立派な波を打つて胸に垂れてゐる。

――さあ、往かう。

オルガ・ステパノヴナは急いて立上つた。怯づ怯づして吃りながら歎願した。

――貴方、叱るのはお止しなさい。知つていらつしやる通り、あの子は……

エラの室は屋根裏にある。狹い木梯子は親父のどつしりした足踏の度毎にぎしぎしいつて曲つた、背も高し、骨組も頑丈な大男だから、天井に衝突るまいと、屈んで行くと、妻の白い上衿が顔を擦るので、さも卑しむやうに眉を顰めた。エラと話をしても、不結果に終るとは知つてゐる。

――何故、またいらしつたの、と眼に手を當てゝ、エラは尋いた。白木綿の夜着の上に載つてゐるもう一の手は、如何にも白く透きとほつてゐて冷たさうなので、殆どそれと見別が付かない。

――エラちやん、と迄は母も言出したが、其先は、歔欷あげて、もう言へない。

――エラと一言、親父は無愛想な強い聲を無理に柔らげて、――エラ、どうおした、言つて御覽。

エラは默つて居る。

――エラ、お母様や予には、少しぐらゐ打明けても宜いては無いか。お前を可愛いく思つて居るのは解つてゐるだらう。それとも予たちより近しい人が外に在るのか。何が悲しい。言つて御覽。予は齡

もとつてる、經驗もある。屹度安心させてやるよ。それて此方も亦安心する。齢の寄つたおつ母樣を見ろ、この通り弱つてゐる。

――エラちやんや。

――予も同然だ、といふ聲は、何か其中でぴしと干割たやうに震へて、――予も矢張苦しい。勿論、何か心配があるに違無いが、然しどういふのだ。それ許りは現在お前の生の親にも解らない。それて濟むか。

エラはいつまでも默つて居る。親父は念入に髯を擦つて居る。指がわれ知らずに髯の中へ沒れて了いはしないかと氣にして居るやうだ。

――予の強い反對にも背いて、お前は聖得彼堡へ出たのだ。――そんな不孝者でも予は勘當しなかつた。金も充分送つたては無いか。其後も良いお父樣てはなかつたか。おい、返事をせんかと言ふに。そら見ろ、これが聖彼得堡の庇蔭だぞ。

親父は沈默した。何ても偉大な戰慄す可き頑強な、底の知れぬ危險が想像され、見ず知らずの冷酷な人間の群衆が、此都といふ思想に連れて現はれて來る。而もエラはたつた獨て上京して、何か厭な目に會つて歸つて來たのである。さう思ふとこの恐ろしい不可解の都に對して、氣も狂ふばかりの憎惡は親父の心頭に發する、又何を言つても沈默て通すわが娘に對しても憤怒の情が嘔逆げて來た。

――聖彼得堡とは何の關係もありません、とエラは不機嫌に答へて、眼を閉ぢた。――私なんともあ

りませんわ。もう遲いから就寢なつた方が宜いてせう。

——まあ、エラちやん、と母は歎息して、——どうおしなの、言つて御覽なさい。

——おつ母樣、とエラは苛立つた。

——よし、お前は何にも言ひたくないのかね、と冷かすやうに親父は尋いた。

エラは床から起上つて、口調鋭く、

——お父樣、私は貴方やおつ母樣を實に難有思つて居ます。然し……今少し氣が靜いて居ます。直に癒るてせうから、まあ御眠みになつた方が宜いてせう。私も先へ御免蒙りますから。何れ明日かまた他の日に御話しませう。

——歸らう。

親父は俄破と飛上つたので、椅子は轉じて壁に衝突つた。妻の腕を取つて、

——エラちやん。

——おい、往かうてえば。此女はもう神樣を忘れて居る。そんな奴には對手にならん。……さあ來い。

殆ど力づくて妻を引張つて、梯子段を下りた。夫の後から少し緩くり下りて行くオルガ・ステパノヴナは忍泣きに、

——ても、貴方が惡いのだ。あんなに意氣張なのも、貴方の氣象を受けたのだ。貴方の所爲てすよ。あゝ、何の因果だらう。……

妻は泣出して、幾度も眼を瞬たゝくから梯子段がよく見えないので、丁度崖の縁を傳ふやうな足取であつた。

此日よりして、イグナチウスは娘の事をちよんびりとも言はなくなつた。娘の方でも氣が付かぬやうだ。前と同じやうに、一室に閉籠つて寢てゐたり、又は眼病女のやうに掌を顏に當てて、室内を往つたり來たりした。一體笑談を言つて、笑ひ暮らすのが好きなおつ母樣は、二人の沈默に氣を腐らせて、怯づ怯づ狼狽へてゐた。

エラは時々散歩に出たが、前の談があつた一週間の後、ある晩、例のやうに外出したつきり、歸つて來ない。其晩、鐵道線路へ飛込んで、身ふたつに轢殺されたのである。

教父イグナチウスは自分で其葬式を營んだ。妻は教會堂へも來なかつた。エラが轢死の報を聞くや否や、卒倒して、手足は痲痺した。薄暗い室の中に倒れた儘、時を隔いて打つ鐘の聲を聞いて居た。葬式の行列が教會堂から家の前へ來て、讃美歌を歌つた時、手を擧げて十字の印を切らうとしたが、手がいふことを聞かない。エラよさらば、と言ひたくも、舌が口中に重つたるく死ねてる。唯其時の態度が人人には如何にも落着いて見えたから、眠てゐるやうだとも言はれる。但し眼だけはちやんと開いて居た。

葬式の時、教會堂へは此教父の知己でも無い人までが集つてゐた。誰も皆非業の最期を遂げたエラを氣の毒に思つたが、日頃あまり人望の無い老教父の音聲や樣子に大悲痛の徴候を見たいといふ好奇心を持つてゐる人も多數であつた。此教父は根が慳貪で無愛想で傲慢の風があるし、罪ある人を容赦なく面

責するかと思へば、又猜深い欲張の心から、出來るだけ檀徒の金を絞取らうとする癖があつた。それが今大打擊を受けて苦しんでゐるのを見に來た會葬者の眼には、娘の死が二重の罰のやうに見える。第一には殘忍な父として、第二には自分の骨肉をも罪から救ふことの出來なかつた不取締の敎父としての罰である。滿場の視線が集つて居るのを感じた此敎父は、幅廣の頑丈な肩を怒らして、死んだ娘の事を思ふよりは、自分の威嚴を崩すまいと一生懸命に氣を張つた。

——頑固爺めと、顎で呃つて罵つたのは、指物屋のハルセノフだ。箱の代五留の貸がある。

敎父イグナチウスはしやつきりと直立濶歩して、送葬を濟せて、歸つて來た。唯妻の室の入口では、少し屈んだが、それは家の戶が大抵丈より低く出來てゐる所爲だとも言へる。外の光と內の暗がりとの激變で始めは殆ど病人の顏も見えなかつたが、よく視てゐると、落着いた妻の眼に涙ひとつ無いのに惘れた。眼には悲も怒も無い。——眼は物言はず、執拗くも沈默を守つてゐる、羽蒲團にぐつたりと沈んだ大きな體と同じく。

——おい、心持はどうかい。

然し唇は默つてゐる。眼も亦默つてゐる。親父は病人の額に手を當てゝ見た。額は冷たくしつとりとしてゐるが、手の觸れたのを感じた樣子も無い。手を離すと曇つた双眼が睨んでゐる。瞳孔が甚く開いてゐて、眼中總體が黑くみえるが、悲も怒も見えぬ。

敎父は冷いやりして、恐くなつて來た。

——ちよいと、予の室へ行くよ。

座敷を通拔けると、其處はいつものやうに綺麗に整頓いて居て、白い布を被せた背中の高い安樂椅子は經帷子に包まれた死人と見える。窓には鐵の鎖で吊した鳥籠が下つてゐるが、籠の戶は明放して、なかは空だ。

——ナスタシヤ、と呼んだ。自分ながら、あまりに無愛想の聲だと思つた。娘を葬つたばかりの、此陰氣な家のなかで、自分ひとりが、かうびんびんして居ると思ふと、極が惡いくらゐだ。

ナスタシヤ、と今度は少し低い聲で呼んで、——おい、金絲雀はどうした、といふと、泣明したものて、甘蔗の莖のやうに鼻を赤く膨らした下女は、突慳貪に、

——解つてますさあ。逃げたのです。

——何故また逃がしたと、眉を顰めて、恐い顏をした。

ナスタシヤは泣出した。頭に被つた手拭の端で、淚を拭きながら、しくしく泣の下から、

——あれは魂ですわ。……お孃樣の魂だもの。……どうして止められませう。

成程あの始終頭を俛れて歌つた黃いろの金絲雀はヱラの魂とも思はれる。あれが逃げてゐなければ、どうしてもヱラが死んだとは思はれない。そこで下女がなほ氣に喰はなくなる。

——あつちへ去つてろ、と怒鳴付けると、ナスタシヤは戶迷をしたので、後からまた、——馬鹿め。

二

葬式の日が濟むと、それからは、沈默がこの家を占領した。それは閑靜と異ふ。閑靜とは音のしない事だ。話は出來るが、話したくないので、默つて居るのが沈默である。敎父イグナチウスは妻の室へ來て、あの眼にぢつと見詰められると、鉛のやうな空氣に頭や肩を壓へられて、かう感じた。娘の遺した樂譜を開けて其聲の形見を見たり、藏書を一々調べたり、聖彼得堡で畫かせて持つて來た着色の肖像畫を見ても、同じ考が起る。此肖像を觀る時には一定の順がある。まづ光線の強く當つてゐる頰のあたりを熟々見た。すると、死んだ娘の頰の上に、いつ出來たとも解らぬ引搔いた傷を思ひだして、其度每に、あれはどうして出來たのだらうと考へる。若し列車に引搔かれたのなら頭も傷を受けた筈、而も死骸の頭は全く無傷であつた。

事に依つたら、誰かゞ足を突掛けたのか、又は死體を持上げる時、つひ爪を當てたのか知ら。

エラの死樣を精しく考へると、恐ろしくなつて來るので、敎父はまた眼を肖像畫に移した。黑い綺麗な睫毛で瞼の下に陰が出來てゐるから、白睛がくつと際立つて、双眼は喪の時の黑框に圍まれてゐるやうだ。確に才はある無名の畫家は此畫に奇體な表情を與へてゐる。此畫と觀者との間に微に透明の薄板が入つてゐるやうで、まあ譬へて言ふと、洋琴の塗蓋の上へ、夏中の埃が眼に見えぬ細かい箔を置いて、磨いた木地の光を艶消にしてゐるやうだ。或る位置に此畫を据えて見ると、眼がいつまでも踵いて來る。眼は何とも言はぬ、默然としてゐる。而も其沈默は實に明瞭してゐて、聽けば聞えさうに思はれた。

そして親父も實際沈默を聞いてゐるやうに漸々思つて來た。

毎朝彌撒の禮拜が濟んだ時、敎父は座敷へ來て、一寸鳥籠や、平常見慣れた家具に一眼くれた後、此家の森として居るのを聽く。實は一種不思議なはなしてある。籠は閑雅に優しく默つてゐて、其沈默の中には、悲と涙と又、陰氣な笑聲があるやうだ。壁に添つて寢て居る妻の沈默は執念深く、重たるく、空恐ろしい。——暑い日にも慄とするやうな恐ろしさだ。遠長い沈默は娘エラの無言である。墓の如く冷たく、死の如く不可解の沈默とはこれだらう。それて、此沈默は自分て何か言ひたいのを言ひ得ずに苦しがつてゐるやうて、一生懸命に發言しようと焦るが、器械のやうな鈍な強い物が之を無言にして居る。

——何だ馬鹿馬鹿しい、とむつと來るので、丈を延して椅子を離れた。窓の外の廣場は圓石を組合せて敷いてある。其向は窓の明いてゐない大倉庫の石垣て、角に馬車の止つてゐるのが蠟細工の一群に見える。何故あの馬車は止つてゐるのだらう。何時間經つても人つ子ひとり通らない。

三

外てはイグナチウスも同僚や檀家やらの大勢の人と口を利かねばならぬし、折には知人の家て骨牌遊もするし、祭典の時は讀經の音頭を取つた。然し家へ歸ると、宛も終日默つて居たやうに感じる。其理由は、一番自分に大事な話をしなかつたからてある。これは夜つぴて、心に思ふ事て即ちエラの死んだ原因てある。

今になつて、到底解らないとすれば夫迄だが、どうもさうは思切れぬ。否、寧ろまだどうかして解る

だらうと考へるので、此頃は毎晩まんじりともしない。あの厭な晩、夫婦でエラの床へ行つてどうか「譯を聞かして呉れ」と頼んだ事を憶出して此語の所迄來ると其先は實際あつた事を變へて想像する。あの場の光景が判然殘つてゐる。兩眼を閉ちると、エラは床から起上つて媚然、何か云ひさうに見える。然し何と言つてゐるのだ。エラが將に言はうとしたあの一語で、萬事が定まるのだが、それはもう直傍迄來て居る、胸の動悸を靜めて、耳を假したなら、聞えさうに思はれる。而もまた其語は同時に自烈體ほど遠くの遠くにあるのだ。イグナチウスは床から出て、手を組んだ儘突出した。

――エラ、……

沈默が之に答へた。

ある晩、イグナチウスは一週間以上も會はなかつた妻の室へ來た。枕元に腰を掛けて、あの恐い眼光を避けながら、

――婆樣、エラの話をしよう、いゝかね。

眼は默然としてゐる。イグナチウスは嚴肅に權威ある調を以て、罪障懺悔の人に語る如くに、

――お前はつまり予がエラを殺したやうに思つてる。予は知つてるぞ。然し考へて見なさい。お前よりも予のエラを愛し方が少なかつたか、お前は妙に誤解して居る。……成程予は嚴し過ぎた。それでも娘の言ふ通りにしてやつたよ。彼が家を飛出して、あの……彼地へ行つた時、勘當もしなかつたとは、よくよく自分で親の威光を踏潰したものだ、予は溫順しく頭を俛れた。其時お前はどうした。お前も彼

に行かずに居て呉れろと頼んだてはないか、あんまり泣くので、予が默れと叱つたぐらいてはないか。あんな不人情な娘になつたのが予の所爲だらうか。予は始終神樣や謙遜慈愛の話を言つて聞かせたでは無いか。

イグナチウスはちらと妻の眼を見て、また顏を背向けた。

——エラはてんて悲しい所以を予に打明けて呉れない、予に何が出來よう。なに、命令、——命令もした。頼め——頼みもしたさ。うん、解つた、お前の言ふ通りにすれば、あの小娘の前に膝を衝いて、年寄老婆のやうに泣けば宜いのだつたらう、あれの頭の中で……うん、どうしてそれが予に解るかい。人で無しの不孝者めが。

イグナチウスは拳を擧げて膝を打つた。

——情も愛も無い女だ。うん、さうだ。予はどうでも宜い。予は勿論壓制家だ。然しお前はどうだ、彼奴は少しでもお前を大事にしたか、あんなに泣いて、威光も何も無くなしたお前を大事にしたかな。

イグナチウスはせゝら笑つた。

——さうだとも、お前を愛したのさ、あんな死狀をしたのもお前への孝行だらうよ、怪しからん無樣な死方じやあないか。鼻先を足蹴にされる犬つころのやうに、塵や、泥の上で死にやあがつた。

イグナチウスの聲は嗄枯れて來た。

——予は耻かしいわい。表へ出るのも耻かしい、祭壇の前に立つも耻かしい。神々に對して耻かしい。

この無情極まる不孝女が。死後迄呪つてやるが宜い。

親父が振廻つて見ると、妻はもう氣絕してゐた。數時間の後、やつと吹返したが、其時双眼はやはり緘默してゐた。親父の言を覺えてゐるか、どうか解らぬ。

この晩は風の無い暑い深とした六月の月夜の晩であつた。イグナチウスは梯子段を上つて、忍足にエラの室へ行つた、妻や看護婦に聞えないやうに。

エラの死後、此屋根裏の窓は閉切つてあつた。室内の空氣は乾燥して熱つてゐる。晝間、日に燬れた鐵板の屋根の反射が薄すら匂つて、久しく人の棲はなかつた此室には、何と無く投遣の風が見える。木柱や家具や置物から、微かに黴の臭が立つ。さし入る月影は叮嚀に灰汁洗のしてある床板を照して、室の隅々にぼうつと薄明を漂はす、その光で透して見ると眞白な淸潔した床の上に大小二の枕があつて、ふうはりと幻のやうだ、實物とは見えない。窓を開けると、新鮮の空氣の波がたつぷり入つて來て、土の匂、程近い大河の匂、菩提樹の花の匂はさつと押寄せた。極微かに合唱の聲が聞える。多分船遊の歌だらう。薄白い影のやうに、素足のまゝ、そつと、此人の居ない床へ忍寄つたイグナチウスは膝を打つて、枕の上に倒れて、エラの頭のいつも戴る所を抱締めたまゝ、いつまでもぢつとして居た。遠くの歌の聲は漸々微かになつて、終に消えた。教父は黑い長髮を肩の上、床の上に垂れて、突伏してゐた。

月が傾いて室がずつと暗くなつた時イグナチウスは頭を上げた。久しく心に秘めて、自分も覺が無くなつてゐる全身の愛を聲に托して自分で聞くのでない、宛もエラが傍で聞いてゐるやうに、

——娘、解つたか。娘と言つてゐるよ。可愛いエラよ、お前は予の心だ、予の血だ予の命だ……齢を取つたお前の……齢を取つたお前のお父様はこれ、白髪になつて弱つて來た……

親父の肩はぴくぴくして、重つたるい體は震へた。身震を怺へて、小さい兒に物を言ふやうに、極優しく、

——齢を取つたお父様が……お前に頼みだ……いや、後生御願だ。お父様はこの通り、泣いてる。今迄泣いた事の無い予が泣くのだ。お前が苦勞したり悲んだりすると、予もさうなる。自分の時より辛いのだ。

親父は頭を振つた。

——自分の時よりは、ずつと辛いよ。齢を取つた予だもの、予が死んだつて何でも無い。唯お前は……あんな纖細い氣の弱いお前が死ぬなんて……お前は覺えてゐるかい。指に何か刺して血が出た時、泣いたては無いか。毎朝起きぬけに、予の手を抱いて呉れたねえ。どうして悲しいのだ。どうぞ話を聞かして呉れ。この予の手で握潰してやるから。この手はまだ強いぞ。

親父の髪の毛は動いた。

——どうか聞かして呉れ。

室内は深としてゐる。遠くの方で長く曳張る汽笛の音がした。

親父は眼を張つて見廻した。目前にあの千切れた死體が現はれはしないかといふやうてある。徐ろに

起上つて覺束無い手付て頭を抑へたが、開いた指は力が籠つて蝮になつてゐる。戶の方へたぢたぢと步いて行つて、語氣荒く、

——聞かして吳れ。

沈默が之に答へた。

四

翌日は一人で早く食事を濟した後娘の死んでから始めて、墓參をした。暑い日であつたが、何分靜然して人通も無いので、此旱乾した日は明るい夜と言つても宜いくらゐだ。例の通り、敎父は步くにも氣を張つてゐる。むづかしい顏をして左右を顧みながら、はて、これでは先と變化も無いなと思ふが、近頃の足元の危なくなつた事や、凛烈な寒氣が氷らせたやうな髯が急に白くなつたのには氣が付かない。爪先上の眞直な路を通つて墓地へ行く。突當の穹窿の門が其入口である。常備たい開いた儘て、煌々と幽の光つてゐる黑々した口のやうだ。

エラの墓は墓地の奧、砂を敷いた路の盡きる所にある。人も忘果てゝ放棄つてある塚の間を、ぎざぎざに縫ふ狹い道を通つて行くのである。こゝかしこが歲月の爲に傾いた、石碑や、曲つた鐵柵もあるが唯大きな重い石を地面に轉がしてあるのは實は耄けた陰氣な惡戲だ。これて地面を壓潰す積かしら。エラの墓はさういふ石の一に立掛けてある。黃ばんだ芝生が生へてゐて、四方だけ靑くなつてゐた。秦皮は楓樹と枝を交へ、榛實の樹の叢立も葉の戰ぐ嫋やかな枝を墓の上に擴げてゐる。敎父は隣の墓に腰

を掛けて、周圍を見廻した。一天雲も無い寂寞の空には大日輪の熱圓盤が全く靜止したやうに輝いて、他の何物にも譬へ難い大沈默の威は天地に充ちてゐる。風が凪いで木の葉の死んだ時、墓地によくある沈默である。閑靜では無い眞の沈默とはこれだ。沈默は墓地を領して、其境界の石垣までも廣がり、更に之を突破つて、町の方へも溢れてゐる。かの執拗くも無言でゐる眼の所に達して、始めて盡きるのか。

敎父は戰慄した、肩を聳かした。眼はエラの墓の上に注いだ、風が野原の方から吹付けた、短い、色の褪めた草の莖には、まだ土が付いてゐるが、終にこゝへ根を張ることが出來なかつた。この草の下、二米突の所に、エラが實際居るとはどうしても思はれぬ、こんなに近いとは、到底考へられない。妙に不安の念が起る。無限の暗い深みへ落ちて、とこしへに消去つたと思慣れたあの娘が、今自分の直傍に居る……こゝに居るのでは無い、もう決して出て來ようが無いとは、どうにも合點がゆかぬ。此時、今、口迄來て居る一言を掛けたら、又は一種の手付で招いだら、あの美しい婀やかなエラが現はれるだらう。否、娘ばかりでは無い、恐ろしい位判明とこゝに埋つてゐるのが解る、諸の死者は、此冷たい嚴かの沈默の中から甦へるだらう。

敎父は鍔廣の帽子を脫いで、波うつ長髮を撫でながら、極低い聲で、

——エラ、

人に聞かれては極が惡いとて、十字架の墓標の前を覗いて見た。誰も居ない。今度は少し聲高く、

――エラ
いつものそつけ無い、威張つた聲だ。こんなに確かりと命令するのに、何の返事も無いとは不思議である。
――エラ。
聲は常に高く辛抱強く呼んでゐる。終に默つて了つた時、どうも一寸の間、地の下で微かな答があつたやうに敎父は思つた。もう一度周圍を見廻した後、耳の上の髮の毛を搔上げて、刺々しい草の上へ耳を付けて見た。
――エラ、聞かして呉れ。
敎父が歸宅した頃は、もう日が暮れて、燈火がオルガ・ステパノヴナの室に點いてゐた。埃だらけの帽子も脫らず、着物も更へずに、妻の傍へ行つて跪づいた。
――婆樣や……オリヤ……赦して呉れ、予は氣が違ひさうだ。
泣く事が無い人の常として、絕望煩悶のあまり、敎父は卓子の緣に頭を打付けた、稍あつて、顏を上げたのは、こゝに一大奇蹟が起つて、自分を慰める爲、妻が口を利くだらうと思つたからである。
――赦して呉れ。
大いな體を妻の方へ寄せると――灰色の眼に出會つた。其眼には同情も憤怒も無い。赦して呉れてるかも知れぬ、憐れんでるのかも知れぬ、然し其瞳の色の中には憐愍も無い、宥恕も無い。眼はとこしへ

に不變の沈默を守つて無言である。

悽愴たる沈默は寂びしいこの家の上下を領した。

里子

ヷリヤは腰を掛けて本を讀んでゐる。體の半分ぐらゐある大なき本で、黒い活字の列は廣く行間を明けて居て、頁毎に挿繪がある。頁の上の方を讀むには、卓子の殆ど端まで延掛らねばならぬ。ヷリヤは椅子の上に膝を衝いて、小さなぼちやぼちやした指で、一字一字突いて行くが、稍ともすると、他の行へ外れて了ふので、原の字まで引返すのが一仕事である。此本の編輯者が思ひ知らなかつた、かういふ偶然の事情の爲、非常に面白い本であるにも拘らず、ヷリヤの讀書はなかなか捗取らなかつた。

　此本にはボウといふ大力の童子が、他の子供達の手足を捉まへようとして巫山戯ると、それを皆が一生懸命に逃廻るといふ、恐いやうな、又可笑しな話が書いてあつた。ヷリヤが熱心に此物語の筋を追つて讀んで行くのを見ると、恐い物見たさといふ一種愉快な感がある上に、まだ其先が尚一層面白からうといふ信仰が加はつてゐるやうだ。其途端に讀書は不意に妨げられた。おつ母樣は餘所の女の人を連れて入つて來たのである。

——そら此所に居ますよ、とおつ母樣の眼は今しがた泣いたばかりの涙で赤くなつてゐる。金縁を付けた手巾はまだ其儘手に持つてゐる。

——おゝ、可愛いヷリちやん、と此女の人が、子供の頸を抱締めて、額に眼の上に、堅い薄唇を強く押付けて接吻する其風は、まるで例のおつ母樣とは異つてゐる。おつ母樣の接吻は輕くそつとして手速いが、此知らない人のは顏を吸取るやうだ。ヷリヤは顏を顰めて、この煩さい可愛がり方を無言で受流したが、本の邪魔をされたのが腹立しい、此女の人が厭に、丈ばかり高く、骨つぽい指に深爪を去つてゐるのからして、第一氣に入らないし、香水の匂が鼻を刺すやうに強いのも厭だ。おつ母樣はいつも心持の好い匂がする。

漸との事て、女はヷリヤを放したが、子供が額や眼を拭いてゐるのをぢつと見詰めて、まだちよんびりはしてゐるが、もう既に筋の通つてゐる鼻や、同じ年頃の子供のよりも、ずつと濃い眉毛、黑い大きな眼、顏全體の眞面目くさつた樣子を眺めて、何を急に憶出したか、女は泣きだした。其泣き方もまるでおつ母樣のとは異ふ。少しも相好は崩さずに、それて涙が出るわ、出るわ、ひと滴、口の邊へ傳はる頃には、後から別のが追付いて流れるやうに、相踵いて出て來る。女は終に泣き已んだ。泣出すのも早いが、已むのも早い。

——ヷリちやん、私知つてますか。

——うゝん。

——でも先に來たことがあるのよ。二度も來ました。覺えてゐませう。成程先に來た事もあるかも知れない。然しそれを何で覺えてゐよう。此見ず知らずの人が、先に來たらうが、來なかつたらうが、ヴリヤには何の關係も無い事だ。第一種々な事を尋いて、本の邪魔をするのが宜くない。

——でも、ヴリちやん、私はお前のおつ母樣ですよ、と女は言切つた。

子供は吃驚して、母の方へ振向くと、それは何時の間にか室を出て了つてゐて影も見えない。

——ふたあり、おつ母樣があるかしら、と此知らない人に尋いて、——馬鹿な事。

女は失笑した。しかも其笑ひ方が氣に入らぬ。笑ひたくも無いのに、故意と胡魔化笑をしたのが、見え透けて居る。二人は暫らく無言てゐた。

——もう御本が讀めるの、學者だねえ。

ヴリヤは默つてゐる

——何の本を讀んでゐるの。

——王樣の子ボヴの御話てす、といふ子供の聲は眞面目て威嚴があつた。

——あゝ、嘸面白いのだらうね、一寸、談して御聞せなさいな、と女は微笑て尋いた。

其聲にも何と無く氣の詰まる僞の調子がある。母の聲らしく撰ねて、優しい愛を籠めようと勤めても、どこか慳貪な、つんとした所がある。又證の科や捌にも、妙な頓珍漢の所があつて、今も一心に、永く聽

からと身構して、卓子に倚掛つたは宜いが、ヷリヤが氣乘もせずに、話始めるや否や、女は起直つて、浮かぬ顔をする。丁度急に洋燈の火が消えたやうなので、ヷリヤは自分の爲まだボヷの爲に氣を惡くした。然し元來几帳面な事を密に誇つてゐる子供だから、讀んだ話の結末まで、急いて述了つて、

――これでお仕舞です、

――では、さようなら、好い子だね、さよなら、とヷリヤの顔に唇を押付けて、この變な女の人は歸り際に、

――また直に來ますよ、嬉しいでせう。

――えゝ、復いらつしやい、とヷリヤはお愛想に言つて置いて、早く歸つて呉れるやうにと、附足した。

――嬉しう御座います。

客は歸つて了つた。然しヷリヤが、後で讀かけの場處を漸とこさて探出した時、おつ母樣は室へ來て、おつと此方を視て居た。眼には涙が一杯て、終にわつと泣出した。今しがた、あの客が泣いたのは譯が解る。あんな無愛想な厭な風なら、われとわが身を耻ぢて泣くのも無理は無いが、然しおつ母樣までが何で泣くのだらう。實に不思議だ。

ヷリヤは頸を傾げて――ねえ、ちよいと、あの人は厭な人ね。僕のおつ母樣だと言ひましたよ。ふたあり、おつ母樣のある事があるものか。

――えゝ、そんな事はない。然しあの人の言ふのも本當です。あれがお前さんのおつ母樣ですよ。

――じやあおつ母樣は。

――私かえ、私は伯母さんさ。

これは又意外の事も聞くものだ。但しヷリヤは此新發見に對して、全く無頓着であつた。なに、伯母さんだと、うん、よし、伯母さんか、それで宜い、此語は子供に取つては、成人が感じるほど大した事で無い。然し今迄おつ母樣であつた此伯母さんは、さう無造作には解釋して居ないので、色々說明して聞せた。何故今迄おつ母樣であつたのが、今度唯の伯母さんになつたかといふ理由を述べて言ふには、ずつと前の前の事であつた、ヷリヤがまだ極小さかつた時分‥‥

――こんなに小さかつたの、この位、

ヷリヤは卓子の少し上へ手を上げた。

――いゝえ、もつと小さかつた。

――じやあ、ミネぐらゐ小さかつたの、と子供は無性に嬉しがつて、口は開く、眉は昂る、室の奥にゐる白の子猫を指さした。これは先週、人が持つて來て吳れた體ごと皿へも載りさうな猫である。

――えゝ、まあそのくらゐさ。

ヷリヤは笑つた。然し直と例の眞面目くさい顏になつて、丁度成熟した人が若い時分の馬鹿氣た行を、自分ながら見下げて言ふ如く、

――まあ、嘸、可笑しかつたでせうね。

さて、まだあの子猫のやうに小ぽけな可笑しな格好をしてゐた頃、今のあの女の人が同道して來て、猫の兒を呉れるやうに置いてゐつたそのヷリヤが、今こんなに大きく怜悧になると、歸して貰ひに來たのだと言ふ。

――お前はあの人と一緒に行きたいの、とおつ母樣の言終るも待たず、ヷリヤは屹と向直つて

――決して行きはしません、あの人は嫌だ、と言放つ。先のおつ母樣は喜んで眞赤になつた。

ヷリヤは復、本を讀出した。

子供はこれで此事はもう濟んだと思つたが、それは大間違で、あの妙な女の人は、血を吸取られたやうな勢の無い人は、何處とも無く湧いて出て、またふいと消失せたあの人は此平和の家を亂して、何とは無しに、不安の念を起させた。今は伯母さんになつたおつ母樣はよく泣出しては、ヷリヤちやん、お家が厭におなりかいと尋くし、又伯父さんになつたお父樣は白髮の二三本殘つてる禿頭を叩いては沸々いふが、それてヷリヤと對座の時は、此人までが、お前あの女と一緒に行くかいと尋いた。

ある夜ヷリヤは床に入つたが、まだ眠入らずにゐた時、伯父樣夫婦が、自分とあの女の事を話してるのを聞いた。伯父さんの、太いびりびり響く聲は、時々吊洋燈の飾硝子を震せて、靑や赤の小さい火は室を照らした。

――アナスタシヤ・フィリポヴナ、實に下らん事を言つては困る。あの子を渡す譯が何てあらう。第一、子供の爲を思つても、さういふ理は無い。あの女は何て食つてる。あの男に棄られてから……うん、あ

の太え奴め。あの子が彼方へ行けば、屹度不爲になるのは知れ切つて居らあ。

——でも、あなた、あれでも子が可愛いと言つてますよ。

——こつちはどうだ。此方でも、あの通り、可愛がつて居るでは無いか。お前もどうかして居るぜ。子供が煩さくなつたので、遣つて了ふのだと言はれても致方があるまい。

——怪しからん事を仰有います。

——まあ、まあ。もう怒るのか。さう激さずと、冷靜に此問題を決めようでは無いか。いゝかい、こゝに、えたいの知れぬ阿魔が子を產んだ、さて情夫には去つて了はれる、退屈で困る、そこで、「どうも濟みませんが、子供を歸して下さい。芝居へ行くには金が無し、せめてあの玩弄物でも歸して下さい」か、いや、さうは問屋で卸さないぞ。

——貴方、それはあんまりでせう。貴方だつて、あの人が可憫さうに獨ぼつちなのは知つてませう。

アナスタシヤ・フィリポヴナ、佛の顏も三度といふぜ。お前は子供の事をまるで忘れて居る。眞人間になるか、出來損になるか、關はないのか。間違つたら、首でも遣る、あの女へ渡せば、屹度出來損になる、無頼漢になる、……出來損になるぞ。

——あなた。

——後生だ。予の癇癪玉を破裂させるな。どうしてお前はさう人の言ふことを纏ぶしてとるのだ。何だと、「あの女は獨ぼつちだ」それが何だ。此方等はどうする。此方も獨ぼつちでは無いか。アナスタシ

ヤ・フィリポヴナ、お前は情無だなあ。どうしてこんな者と夫婦になつたのだらう。

『情無』と言はれた人はわつと泣出した。夫は免して呉れと頼みながら、何もさう予のやうな者の言つたことを氣にしなくとも宜からうと、詫びるので、女も靜まつて來ていふには、

——それでタロンスキイさんは何と言つてました。

グレゴリウス・アリスタルコヸチは復もや赫として、

——うん、彼奴も馬鹿野郎だ。法廷の判決次第でどうにもなると吐した。えゝ、どうだい、そんな事は聞かずと知つて居らあ。然し彼奴は囂々喚いてるばかりだ、金を欲しがるばかりだ。自由が利くものなら、あんな三百代言は……

この處で、アナスタシヤ・フィリポヴナは座敷の戸を閉めたので、後の談はヷリヤに聞えなかつた。然し永い間ヷリヤは仰向に寢ながら考へた。一體自分を連れて去つて、非道い目に會さうとするあの女は何者だらうと考へた。

翌日は早朝から、今にも伯母樣が傍へ來て、お前、おつ母樣の所へ行く氣かいと尋くだらうと待つてゐたが、伯母樣は何とも言はない。伯父樣も亦何とも言はない。唯二人とも例と異つた樣子で、頻に此方を見詰める風が、今にも死にさうな大病人を見納めにでもするやうに、無闇に抱寄せたり、接吻したりして、色摺の畫が澤山入つた大きな本を持つて來て呉れた。

女の人はとうとう來なかつたが、唯あの日から家の周に見張をしてゐるやうて、ヷリヤが表の敷居を跨いて出ようものなら、忽ち飛掛つて何處かの遠い遠い國へでも攫つて行きさうだ、眼が火のやうに燃えてる。龍が栖む恐い眞暗な所へ連れて行かれるだらうと思はれる。晩になると、いつもグレゴリウス・アリスタルコヸチは奥で調物をしてゐる、アナスタシヤ・フィリポヴナは編物に餘念が無い、ヷリヤは本を讀んでゐるが、先のよりは活字の細い本であつた。四邊はひつそり閑としてゐる。唯、折々紙を開ける音や、隣の室で、伯父樣の太いごほんごほんいふ咳が聞えて、草色の蓋を被せた洋燈は卓子掛の交織天鵞絨の上を、強く照らし、天井の高い室の隅には靜な底の知れぬ陰が一杯になつてゐて、葉を廣げた大きな花物の形は奇體の獸に見える。而も其後には更に大きな黑々した何物かゞ蹲踞んでゐさうだ。ヷリヤは頻と本を讀んでゐる。其見張つた眼の前には、綺麗な珍らしい圖が浮んで、憐愍、慈愛、殊に恐怖の情は自から念頭に上つて來る。

ヷリヤはルサルカといふ龍女を哀れに思つた。美しい王子を慕つて、其爲には姉妹をも海底の靜な住居をも棄てたが、思はすこしも王子に通じない。ルサルカは啞であつた。其後王子は綺麗な餘所のお姫樣と縁組して、お祝の宴を開いた。音樂は船のなかゝら湧き、宮殿の窓は一面に燈火で輝いた。ルサルカは暗い水底に身を投げて死ぬ。可愛くも哀れなルサルカ姫、口の利けない不具の、優しい、悲しいルサルカ姫よ。然しそれよりも尚暫々ヷリヤの眼には意地の惡い惡い魔法使が浮んだ。闇の夜に尖つた翼を延して、風を切る頭には、火の玉のやうな眼を光らせて飛廻る。室中どことなく出沒しては、あの花

物の後に隠れ、變手古な語で、口の内に何か沸々言ひながら、骨つぽい手でヷリヤを指さしたり、又、戸の隙間から覗いては、ヷリヤが床に入るのを待つて、頭の上で跳らうとしてゐる。又は窓の縁に倚掛つて暗い庭内に番をしながら夜風に嘯く聲も聞える。

かういふ意地惡の魔物たちは、いつもヷリヤには、あの女の人の顔になつて見えた。朝夕種々の人が家へ出入するが、歸ると直に顔を忘れて了ふのが例だが、あの顔ひとつは永く記憶に止つて消えない。面長の痩せた、黄ばんだ、まるで死人の顔で、あの滑るさうな似而非笑を見せる時は口の兩端に深く二條の皺が寄る。「あの女に連れて行かれては、とても命が無い」とヷリヤは思つた。

――あのねえ、と或日、本を傍へ寄せて、伯母さんに尋いた。――あのねえ、と平常の眞面目くさい調子で繰返しながら、面と對つて、伯母を見詰めながら、――僕はこれから復、おつ母樣と言ひますよ。もう伯母さんなんてえのは止します。あの人がおつ母樣なんて嘘でせう。ねえ、これがおつ母樣だ、あの人じやあない。

――それは又どういふ譯なの、とアナスタシヤ・フィリポヴナは縹致を賞められた小娘のやうにいそいそしてゐるが、其喜悦の中には、不安の樣子も含まれてゐた。どうも此頃は子供に對つて氣が差していけない。ヷリヤも妙に臆病な兒になつて、獨寝をひどく恐がつて、夜は魘されたり、泣いたりする。

――かうなんです。えゝと、一口には言へない。お父樣に尋いて御覧なさい。あれがお父樣だ、伯父さんじやあ無い、と子供はきつぱり斷言した。

——いゝえ、私の言つたのは本當ですよ。あの人がお前さんのおつ母樣です。

ヷリヤは考込んだ。暫らくしてグレゴリウス・アリスタルコヸチ其儘の口調で、

——實に下らんことを言つては困る。

アナスタシヤ・フィリポヷナはわつと笑倒けた。然し、床に入つた時、永く夫とも談合したやうで、其時夫は沸々不平をこぼしながら、三百代言や莫連女を罵つた揚句、妻と一緒に起上つて、ヷリヤがどんな風だか、見に來た。無言の儘、ながく子供の寢顔を眺めてゐた。グレゴリウス・アリスタールコヸチの手が顫々するので、蠟燭の火は跳つた。枕掛のやうに白い、小さな寢顔は爲に奇怪の觀を呈した。二人は此黑い隱立の無い嚴格な眼に睨められて、何か返答を促がされてゐるやうに感じた。

——ヷリヤ、と一聲、アナスタシヤ・フィリポヷナは恐々て、そつと呼んで見た。

子供は細く溜息をついた。然しぢつとして居る。或はこれきり、ぢつとして了ふのか知ら。

——ヷリヤ、ヷリヤ。

アナスタシヤ・フィリポヷナの聲に添つて、また更に夫の太い顫々聲が雜つた。

ヷリヤは眼を開いた。眩しいので、また閉ぢたが、眞蒼になつて、跳起きた。瘦つこけの細腕で、伯母の肥つた赤い頸玉に抱付いたまゝ、頭を胸に推付けて、固く眼を眠つたのは、自然に瞼の開きさうなのを心配して居るやうてある。

——おつ母樣、恐いよ、彼方へ去つちやあ、厭だ。

其晩は實に厭な晩であつた。ヷリャがまた寢付く頃には、グレゴリウス・アリスタルコヸチの喘息が起つて、呼吸も止まりさうであつた。冷たい濕布の下に、大々した胸が上下して、曉方まで咳は已まなかつたが、終夜の看病にぐつすり疲れたアナスタシヤ・フィリポヷナは眠る時、心の內で、もしあの兒が、居無くなつたら、とても夫は生きて居られまい、と思つた。

あくる日は、この家の大會議が開かれて、まづヷリャに本を讀む事を少しにさせ、他の子供たちと遊ばせようと決した。そこで近所の男の兒女の兒を呼集めると、皆は花を毟つたり、本を破いたり、椅子を倒したりして、小猿が檻を飛出したやうに顚倒廻へる。それをヷリャは眞面目に不安らしく見てゐたが、やがてアナスタシヤ・フィリポヷナの傍へ來て、

――どうも煩さくつて困る。こゝに坐つてゐた方が餘程宜い。

夜になると、また本を讀出した。グレゴリウス・アリスタルコヸチが手柔かに其本を取上げようとすると、ヷリャは口こそ利かないが、きつぱりと本を引戻した。そこで此急仕込の敎師は其方面の手を引いて、腹立しげに妻を叱る。

――おい、これが敎育といふものかい。アナスタシヤ・フィリポヸナ、お前は、子猫を育てるのは旨いが、どうしても子供には向かん。この兒の病氣は本が元だ、それを取上げる事も出來ないのか。つまりお前には敎育の才が無いんだ。

ある朝ヴリヤはアナスタシヤ・フィリポヴナの傍で朝飯を食べて居ると、グレゴリウス・アリスタルコヸチは食堂へ飛込んで來た。帽子を手に提げて顔は汗だらけだ。入口から嬉しさうに、

——さあ決つたぞ。却下になつた。

アナスタシヤ・フィリポヴナの耳環の玉は光つた。手に持つ小刀はがしやりと皿に鳴つた。

——まあ、本當、と締られたやうな聲で尋ねる。

グレゴリウス・アリスタルコヸチは、此吉報が本當だといふのを示せる爲に、鹿爪らしい顔を作らうとしたが、直に其決心を忘れて、滿面にさも嬉しさうな小皺を寄せた。卓子の椅子を引寄せて、帽子を傍へ置き、どつかり腰を下して、事ありげに二人を見て言ふには、

——いつも言ふが、あのタロンスキイは仲々の才物だ。浮と人には乘せられない。お前なんぞ、とても彼を欺すことは出來んぞ。まあ、やつて見ない方が宜からうぜ。

——ては勝つたのですか。本當に。

——そら、例の癖が出た。疑深い女だつちやあ、ありやあしない。法廷はかう宣告した。「アキモヴ夫人ノ起訴ハ却下セラル」其通、其通、なあ、大將、と子供の方を向いて、復、新に宣告文を引用した。——「訴訟ニ關スル一切ノ費用ハ其負擔タル可シ。」

——それじやあ、もうあの人に連れて行かれる氣遣は無いのですね。

——さうとも、さうとも。ほい、すつかり、忘れてゐた。お前には御本のお土産がある。

グレゴリウス・アリスタルコヸチは次の間へ飛込んで行く其途端、きやつといふ妻の聲で足を止めた。ヷリヤはぐつたり仰向に椅子の背に凭れて、氣絶した。

二

それからは樂しい日が續きどほしで、家の病人が快方に向いて來て、一同ほつと息をついたやうな有樣、ヷリヤもあの魔法使たちと全く關係を絕つて了つた。他から猿の子を貰つた時などは、誰よりも一番喧噪いだのはこの兒であつた。然しどんなに巫山戲た遊戲をする時でも、いつもの眞面目な癖は失せず、例へば亞米利加の土人ごつこをすると言つて、すつかり着物を脫いで、頭から足の先まで眞赤に塗らうとした事もある。かういふ風で遊戲にも敎育上の分子があるのを見て、グレゴリウス・アリスタルコヸチは自分も一つ仲間入が出來ると考へた。熊の役を演ては大した伎倆も出なかつたが、印度の大象に扮して、非常な成功であつたと言つても溢美では無い。其時ヷリヤは宛然カアリ女神の子に爲り了せて、無言の妙相神々しく、パパ背中に跨つて、折々そつとてかてかの禿頭を叩いた。

タロンスキイは控訴院といふ物があると、グレゴリウス・アリスタルコヸチに時々說明しかけて、それが事に依ると法廷の判決を破棄するかも知れないと注意した。然しヷリヤの伯父には、どうしても此理が呑込めない。法律は同一だのに、三人の裁判官の判決した事を、他の三人の裁判官が否認しよう筈は無いと言張る。それでもなほ重ねて辯護士が注意すると、終にはむきになつて、でもこのタロンスキイが付いてゐるては無いか、といふ反對の出來ない論鋒を向ける。

——第一、君が控訴院とやらへも出て呉れるだらう。そんなら今から愚圖愚圖言はずと宜いや。アナスタシヤ・フィリポヴナ、おい、お前も少し加勢して、この方を說いて呉れ。

タロンスキイは微笑する。アナスタシヤ・フィリポヴナは、靜かな物言て、そんな餘計な心配をさして下さるなと、少し辯護士を怨顔である。さて、時々あの裁判入費を拂はされた女の話も出て、いつも其時は「あの憫然な」といふ形式詞を付けた。ワリヤを連れて行く力を奪られてからは、今迄あの瘦せた顔を霧のやうに取卷いてゐた何と無く、恐い後光は、子供の眼にさへも脱れて了つて、もう並の人間に見える。不幸な女だと、度々聞かせられるのが、子供には何故とも解らないが、あの蒼ざめた顔が漸々近くなつて、次第に本物らしくなると、「あの憫然な」女が多少の興味を惹く。他にも色々憫然な女の話を讀んでゐるので、彼や此やを憶出しては、あの女の人に對しても憐愍同情の感を抱くやうになつた。多分あの人は暗い暗い室の中に獨でゐて、泣明してゐるだらう、丁度先日家へ來た時のやうに泣いて居るだらうと想像した。

さて三人の裁判官が判決した事を他の三人の裁判官が否認する事も出來ると見える。控訴院は原裁判所の判決を破棄して、幼兒を生母に戻せと命じた。續いて大審院は覆審の控訴を受領しなかつた。母がワリヤを迎ひに來た愈々といふ日、グレゴリウス・アリスタルコヸチは留守てあつた。實はタロンスキイの所へ往つて居て、長椅子の上に踏反かへつた儘、掛物の下から、てかてかの禿頭だけを出し

て居た。アナスタシヤ・フィリポヴナも一室に閉籠つて出て來ない。もうすつかり出發の用意が出來た時ヴリヤを送出したのは、家の女中であつた。ヴリヤは毛の付いた外套を着て、重い雨靴を履いてゐるから、足を動すのが不自由であつた。毛皮の小さい縁無帽の下には、頑是無い眞面目な眼、生白い顔が見え、憐れなルサルカ姫の話を書いた本を小脇に抱へてゐた。

骨つぽい丈の高いあの女は、頭から爪先までじろじろ見てゐたが、溜息をついて、

——まあ、ヴリちやん、大きくお成りだね。自分で自分を見違へるやうになるよ、と笑談を言ひかけた。ヴリヤは何とも言はない。唯帽子の曲りを正して、いつもは眼を見るのだが、今日は新しい母の口元を見詰めた。口が少し大き過ぎる。歯は細く綺麗だが、口元の二本の皺が、まだあつて、今度は先より深くなつてゐた。

——ちよいと、怒つてるの、といふ母の言葉には耳も假さず、

——さあ、行きませう。

——ヴリちやん、と泣聲上げて、アナスタシヤ・フィリポヴナは室の中から飛んで來た。眼は一杯の涙である。入口から腕を廣げて抱付いた。膝を衝いて、頭を子供の肩へ載せた儘、ぢつとして居る。動くは耳環の玉ばかり。

——ヴリヤ、さあ、出かけませう、と、突慳した聲で、丈高の女は子供の手を引張つた。——こゝはお前さんの居る所ではありません。この家の人はお前のおつ母様を非道い目に會はせたのだよ。……ほ

んとに非道い目に會つた。

　無愛想の聲の中には憎惡の語氣が充分籠つてゐる。出來るなら、この跪いてゐる女を足蹴にもしたいのだらう。

――不人情の人だちだ。獨つか無い子を奪つて了はうとした、とさも憎々しく呟いて、ヷリャの手を引張る。

――さあ、お出なさい。お前のお父樣のやうに、見棄ては厭だよ

――よく大事にしてやつて、とアナスタシヤ・フィリポヷナは追掛けて言つた。

　橇は徐ろに轍の中を進んで、珍らしい花、面白い本のある靜かな家から、ヷリャを遠ざけた。やがて其家も本の字のやうにどれも同しの他の家の中に紛れて、ヷリャの眼には永久に無くなつて了つた。其後は船に乘つて、河を通るやうな心持がした。河の兩岸は瓦斯燈の煌々する二の線で出來て居る。其二線が前の方て、重なり合ふから、丁度一本の絲に二列の眞珠を貫いたやうだが、進むにつれて、線は別れて行く。唯前と後とはまた新に結付くやうに見えた。それ後又一ところに止つたやうな心持がした。萬事がヷリャには不思議てならない。第一この自分が不思議、骨つぽいやたらに犇と抱寄せるこの女の人が不思議、又は周圍の凡てが不思議だ。

　片方の腕が倦くなつた。本を抱へた腕てある。然し今度のおつ母樣に持つてとは賴めなかつた。

終に到着した小さい一室は萬事が穢くつて見窄らしい。室の一隅にある大きな寢臺の傍には幕の付いた赤坊の床がある。ヴリヤ三才の時のとそつくりだ。

——寒いかい、お待ち、すぐお茶を拵らへますから。おや、まあ、此手の赤いこと。さあ、とうとうお母樣の所へ來ましたよ。嬉しいでせうと疊掛けて饒舌るが、氣の置ける不愉快の其笑顏には、實に一生の間、打擲の恐さに、强ひて笑はされた人の樣子が見える。

ヴリヤは自分ながらあまり露骨なのに惘れて、怯づ怯づと

——いゝえ。

——何。でもこんな玩具まで揃へて上げたのに。それ、この窓の上を御覽なさい。

ヴリヤは窓に近づいて玩具を見た。吝な紙製の馬は四肢が大き過ぎて鯱張つて居る。赤い帽子を冠つた間の拔けた笑顏の滑稽人形もある。鉛の兵隊さんが一打ばかり、片足上げた儘の姿勢で化石して了つたやうだ。ヴリヤは夙うに玩具遊をしないので、てんに始から餘り好かないのだが、然し今は慇懃にも其意を曉られまいと、

——えゝ、綺麗な玩具です。

然し母は玩具を見た子供の眼光に氣が付いた。例の厭な似而非笑をして、

——お前さんの好きな物がよく解らないのでねえ。でもこれは前の前に買つて置いたのですよ。

ヴリヤは默つて居る。何と返事をして宜いか解らない。

――ねえ、ヷリちやん、私は唯獨ぼつちなのよ。この世に賴る人も無い、相談對手も無い。それで此玩具なら宜からうと思つたのだよ。

――ヷリヤは默つて居る。此時忽ち女の顏は崩れて、涙が溢れた。滾々として、前後相踵いだ。地面が急に落込んだやうに、女は寢臺の上に身を投げた。床は重みてぎしぎし鳴る。片手を胸に、他の手を額に押當て、この憐れな女は、白つぽい眼て、前の壁を見詰めた。

――噫、獨ぼつちだ、獨ぼつちだ。

ヷリヤは屹として床へ近づいた。赤くなつた手を、骨つぽい母の頭の上に置いて、いつもの眞面目な口調で、

――おつ母様、お泣なさるな。これから僕が大事にして上げますよ。玩具はね、實はあんまり、好きては無いが、おつ母様なら、これから大事に大事にして上げますよ。ねえ、ちよいと、おつ母様、憐れなルサルカの話を讀みませうか。



暮春調二篇

木下杢太郎

落椿暮春

椿が落ちる…ぽた、ぽた、
晩春の午後二時頃。
盲唖院の白壁。
陰の紫。
生垣から見える園の外光。
冷い光に顫へながら、
木のもとに立つ盲目の黒き外套。

今し方鳴りやんだ鐘の響が、
エエテルが、春のにほひが……
盲目はまだ木のもとに立つてる。
涙ぐんだ灰色の眼が何だか少し笑つてる。
ああ盲唖院の白壁。
晩春の午後二時頃。
椿が落ちる…ぽた、ぽた。——

銀紅暮春調

銀に鏽びたる絃の音ぞ、沈々と
更けすむ夜のくれなゐの闇の面を
流るる、はた流るる、流るる。
磁の皿よ、ま白き、まろき、
そが上の色あをみたる女の首、
まんじりともせで何ぞ見る、
曲節の流をみる。——夜の樂律の印象。
ああ心、春の夜の管絃樂、

中にまじる三味線の
旋律の一列の
なやみ、なげかひ、義理、戀慕、
やがては、いづれ、ちりぢりに、
いや、ちりぢりに流れ消えゆくうら悲しさよ。

「われも昔は花の宴、
幸ある庭に侍りき」とぞ歌ひびく時、
皿の上なる女の首、ちち、ちちとうち笑ふ。

十時樂終る。
まだ殘る銀の印象、沈々と更け澄む夜。
ああ心、春の夜の鬱憂、
その重き紅の闇のあなたに、
若き、若き、青き白楊、
その梢——われは見き——
ほのかなる黄なる月の出。

和歌

○ 近藤元

春の月おぼろにすめりかなしみの底に沈みし二人てらして

神經のいらだゝしさよせめてものなぐさめにとて人中をゆく

今日もまた夕の街の雜沓に對して我れは眼をとぢてあり

汽笛の音電車のひゞき人の聲そのまゝにして夜となりにけり

君かなし高きにのぼり今更に汚れし街を眺めよといふ

我れながら狂人じみし行爲のこのごろうれし人中にゐて

いづれとも知らずわが身をからうじて電車に乘せぬおそろしきまゝ

あやまられ今日にいたりし我なりと思ひつくづく君をまもりぬ

疲れ果てぬ長う吐息しひたすらに死にゆくごとく寢につきしかな

○　山村龍子

天地に君在はさずば美き衣も蒔繪小櫛もわれは欲りせず

野の限り朝日はさしぬ草等みななつかしげにも面もたげけり

萬人に劣らぬ幸を我れも身にうけしと嬉し日をあふぐ時

屋のすみによせ集めある緒の切れし下下駄など眺め漠然と居り

一日を成したるわざのあまりにも小さきを知りて灯にそむき居ぬ

泣くと云ふ離き事をば少女子は覺えて直に行ひてあり

眞向ひて語らふ迄に馴れしよりふと故わかぬ淋しみを知る

烈日の光り張る廣き野に君と佇み云ふ事もなし

○　百田千里

やすらかに大天地に住むてふを先づくるしみの第一として

日の光とゞかぬ果に獨り住み物思はゞとひそかに思ふ

力なき心をいだきたゞ獨り辛うじて立つあめつちのまへ

ゆふぐれの柱によりて鐘きゝしそのさびしさの今もおもほゆ

ふとこゝろ夢よりさめて十七の若き男のかなしみに入る

思ふべき人もあらざるさびしさに空しく雨をきゝつゝぞ寢ぬる

丘に立つ大き杉より生れ來し人かも君は口を開かず

あたゝかき人いきれする夏の夜のちまたをゆけど心さびしき

○　町田不破

誰かある杆もて止めよ彼の月を斯くのたまひし殿もありけめ

日はまたも事新らしう我れに照る古りたるものを欺かんとて

うつくしき顔して君は生れ來ぬたゞ笑ふべく笑はしむべく

黒髪を垂れつゝ君も女てふ弱き名を負ひ我に對ふよ

柩まだ成らずと我れは僅かにも拒まれてありあわづかにも

土塊の一個をとりてつく〴〵と世をおもひみよ悲しからずや

○　湘南病客

闇くかつ淋しき道を行くごとく悔に充ちたりわが病める日は

つたなかり醜くかりにし僞りの我なりしかと醒めし時病む

日は沈み海は嘆きて暮れかゝる濱邊に立ちて人をしぞ思ふ

かゝりし日かゝりし夜をさへ忍び來しわがむくいには病重かり

飽き足りて餓を思へり我が心力ある手よ救はせたまへ

海みつゝ山みつゝたゞ濱にたつ久しからずやこゝろの病

○　井淵みたま

昨日今日得しにもあらぬ苦しみを胸にはゝぐむ涙たれつゝ

いとけなき戀をば得たる人のごとふし目に君を見ては喜ぶ

泣かんにも涙なき身を人のいふ賢しき我となりにけるかな

あゝもろき命のはてに死すと云ふつめたき印おきしは何日よ

○　太田生麥

天地に生きなむとしてはからざるこの悲しみに遇ひにけるかな

翌日待たば物成るごとき心地して春の一夜は安らかなりき

何時までを限りとなして知り得べき人の道ぞやかく思ふわれ（柴舟氏に）

前三月投稿の歌數甚だ多くして、一々掲載するに堪へず。止むなく、次號に延したるもの、その半以上に及べり。諸子の諒察を乞ふ。



竹の子飯

先人のすきを筍飯忌日　碧雲居
馬市の人に筍飯たきぬ　同
寺住みや筍めしに里戀し　同
旬のことに筍飯に會しけり　同
藪の神筍飯に祭りけり　同
馬子が茶屋竹の子飯もありにけり　茶青
立場茶屋筍飯を盛りてある　萩里
方丈や竹の子の飯の大團居　長雷
竹林に竹の子飯を炊ぎけり　驟雨
宿かれば竹の子飯や藪の寺　枯葉
若葉風に竹の子飯を吹きさます　梧樓
ひなめかす筍飯や京の宿　名香
竹の子の飯や酒糞の男衆　鶯溪
竹の子の飯する宵や下戸の客　香哉

竹の子の飯を茶摘の夕かな　京 青雲
筍飯女主人の強ゆるかな　哲郎
旅僧に竹の子飯や佛の日　起堂
母屋から竹の子飯や自炊居士　孤梢
小僧既に筍飯を五六椀　朔子
友來る竹の子飯の折よけれ　成功
金時と山姥篠の子飯の膳　胥山
祝ぎ事の筍飯も山居かな　流蔭
冷え果てし竹の子飯やが句成らぬ　芋人
法會はてゝ筍飯や余花の雨　朱村
村居して竹の子飯をほてりけり　南湖子
筍飯や入佛式を假の寺　痩佛
紺暖簾竹の子飯と由々しけれ　春夢
二三子が竹の子飯や詩仙堂　不言
がぶ飲むも竹の子飯の濫茶かな　尺水
生節に筍飯も初夏の宿　青坡
山宿に筍飯を所望かな　萍月
宵焚きし竹の子飯や夜半の客　耳山
草廬三顧竹の子飯の夕かな　素水
開墾や竹の子飯の土座晝餉　同
山旅籠竹の子飯の三日かな　小陰

葷酒入るを許さず筍飯を焚く　同
食ふ物に筍飯や山廻り　風水
魚來ねば温泉宿筍飯を日々　同
腹皷竹の子飯を過しけり　蓬雨
竹の子の飯にせばやの留守居かな　同
革袴筍飯の正座かな　雨圃
登第に竹の子飯を祝はれぬ　同
里の家竹の子飯に祭かな　照楓
竹の子のなき底飴の殘りけり　同
分ち食ふ竹の子飯や小重箱　同
僧房に竹の子飯や禪百話　春溪
遠足や竹の子飯に脚絆脱ぐ　同
所化納所竹の子飯に集ひけり　同
落柿舍や竹の子飯の後無沙汰　太郎
竹の子の飯や梅漬紅淺し　同
獨活膾竹の子飯も寺なれば　同
嵯峨日記や竹の子飯のホ句も見ず　同
竈祝ひ竹の子飯を配りけり　梅史
竹の子の飯や今年の一番茶　同
産見舞の竹の子飯や八つ時分　同
一筐の竹の子飯に安居かな　同

稚兒供養竹の子飯を晝餉かな　同
竹の子飯に峰入の無事迎へけり　同
高盛りて竹の子飯や下郎部屋　同
僧催主竹の子飯や法衣講　不可知
看板の竹の子飯や寺內茶屋　同
手辨當の竹の子飯や薪割　同
重物の竹の子飯や忌の見舞　同
大法會竹の子飯の末寺かな　同
竹の子飯食へば呉れけり寺緣起　同
竹の子の飯や異名の藪蚊寺　同
開講や竹の子飯のお振舞　同

本號應募者七十三名、句數總て千六十九句

募集課題

初夏　五月十日締切
螢　六月十日締切

定め

應募句は加賀國金澤市横山九番丁大谷正信宛の事
句數は一人十句以上三十句以下の事
締切當日までに當方へ屆くやう郵送の事



日糖事件と賣收運動

匿名氏

世間には今度の日糖問題を以て現内閣の政略と何か關聯があるもの丶やうに思うて居る向もある。然しそれは大間違である。そんな事は斷じてない。現司法大臣の岡部子は元來殿樣である。曾て山縣公と議論をして公に向て椅子を投げつけた事もあり、又伊太利に公使をして居た時に、武官を擲つて怪我をさせた事もある。これ皆殿樣の意氣として愛すべき、喜ぶべき事である。て、彼は風紀の釐革といふ事については一生懸命である。今度の一件なども全く其點から出たもので、内閣の政略とは何等の關聯なき事である。

洩れ聞く所によれば、初め檢事が日糖事件について檢擧をしかけた場合に、桂侯は非常に狼狽した。そして司法大臣に相談を廻した。どうか餘り急激にやらん樣にして欲しい。成るべく政治關係には手を觸れぬやうに願ひたい。さらでだに政友會の邪推を受け易い時に、こんな事を持出しては必らず誤解を招く、遠方からそろ〳〵と順序にやつて餘り世間の耳目を聳動しないやうにしたいといふ相談があつたといふ噂である。檢事の方でも、さうしても宜しい。此事件は大坂あたりにも關係のあることであるから、遠方からチョク〳〵やりませう、といふ事であつた。處が商人などいふものは頭も腹もない。引捕へて見ると、何もかも皆ベロ〳〵と饒舌つた。詰りそれで今度のやうな政治關係が出來るに至つたのである。

今度の事については大岡育造なども餘り寐覺はよくあるまい。又其他の大頭株にも麥飯の臭ひを嗅がねば

ならぬ義務のある人も隨分あるらしい。處が不幸にして、さういふ奴は罪を買はずに濟むであらう。それは何故かといへば、大同の臼井といひ、橫田といひ、大抵政友會との緣になつたのであるらしい。臼井は政友會と懇意であり、殊に三井の番頭や、淺羽靖などゝ昵懇の間柄である。橫田も亦政友會と懇意である。で、此種の人間が會社と政友會との緣となつて官營の贊成運動をやつたといふ噂である。それで日糖事件の「お滴く」といふものは一般政友會に普及したらしい。少きは四五百圓、多きは萬の聲を擧げて抑へ、又幹部の運動費なども日糖から取つたといはれて居る。多く取つた奴が檢擧されずに少く取つたものが却つて檢擧され、而して兩方の緣になつたものが最も嚴しくやられたのである。

確か引張られる五六日前に臼井が文明の政治家は盲從の美德がなければならぬ。今後益々盲從を以て政治家の美德とするに至るであらうと、盲從美德說を唱へた相である。成程、盲從或は美德と稱すべき價値があるかも知れぬ。けれども臼井のは盲從にあらずして、貨從（孟子には貨取といふて居る）だから困る。今後の成行がどうなるかは、非常の秘密にして居るから、分らんが、新聞記者などゝ大いに筆を振うて、かゝる機會を捉へて、政治界の腐敗を廓清するやうにして貰ひたい。

日糖問題について憶ひ起すは、明治の政界に於ける買收運動の起源である。初め國會請願があつて、猛烈に議會の開設を促し、其後議會開設となりて、政客の意氣中々荒く伊藤も山縣も困りきつた處に、陸奧宗光が伊藤に說いて曰く、今日の政治家が何が一番渇して居るかといふことをお考へなさい。彼等は永年の戰ひに疲れ切て了て居る。それで此際買收すれば屁でもない。直ぐに行はれる。一切私にお委せ下さいと獻策した。けれども伊藤も山縣も其頃は議員を高く買被つて其獻策を容れなかつた。處が窮鼠猫を嚙むの勢で伊藤も彌よ窮し切つた。其頃の日本の經濟界は非常に苦しいもので、到底今日の比較ではなかつた。竟に據

り處なく、試に賣收をやつて見た。處が陸奥の說いた通りて、御し難い顏をして居つた先生達も皆ボロ〲と降つた。これは與し易いといふので、こゝに政府が議員賣收の發端を開いたのだといふ事である。品川彌二郎の選擧干涉の時なども、政府では干涉などいふ猛烈な事よりも、賣收した方がよいといふ事であつたが品川は頑として聽かない、政府が其目的、政策を行ふに都合よき議員を出さんと運動するに何の不都合な事があるか、賣收などは實に憲政の基礎を危くし、且つ禍を子孫に貽すものである、政府の賣收策は憲政を民間より破壞せずして、却て勅命を奉じたる國家の宰相大臣が破壞するのである。彌二の息の續く限りはそんな事はせぬとて怒鳴り回つて、干涉を初めたのである。

それで、今度の一件なども會社のやり方は固より言語道斷で、之を懲らすのは當然ではあるものゝ、賣收の手初めを政府が自ら開き、而かも歷代の內閣が之を踏襲して居ながら、民間の餓鬼共を大騷ぎをして檢擧し、以て風紀を肅淸するといふ事は、ないよりはよからうが、政治上の威嚴といふものは之によつて保たはしないと思ふ。又政府自らも些か氣恥しい感がなからうかとも思ふ。今度の事件に檢擧されたものは一問題について賣收されたのであるが、而し議員の中には身體ぐるみ賣收されてるものもあるではないか。桂は曾て臼井を指して、あれは賣收した男だといふた事もあると聞いて居る。斯く考へ來ると、今度の事件のみをワイ〱いふのは聊か馬鹿氣たやうな氣がしないでもない。

教育家並に學生の父兄に告ぐ

星雲子

中學校、高等學校、殊に中等以上の私立學校に入
を志願するものゝ尠き事、今年の如きは、近年稀に
る所なりとの噂を聞く。一體ならば普通教育より進んで、中等若くは高等の教育を受けんと欲するものゝ數

は、年を逐うて增加せざるべからざる筈なるに、今年俄かにかゝる反對の現象を生じたるについては、其處に何等かの仔細なくては叶はぬ事也。其仔細を尋ねて或人は之を一般財界の不景氣に歸し、或人は是れ或は戊申聖詔の結果にあらずやなど疑ふ。前者の說幾分の道理あるを認むるも、後者の論の如きは何等の根底なきものに似たり。吾人は之が最も有力なる原因は他にあるべきを思ふ。即ち世人が今日の教育の効果に對する疑惑を以て、かゝる現象を生じたる根本の理由なりと信ずるなり。詳かにいへば世の父兄が學校教育に期待したる効果は、單に期待たるに止りて、實際に於ては、之を滿足するものにあらざるを發見し、其不信の結果、進んで中等若くは高等の學校に入ることを手扣へたるものなることを信ずる也。而してかゝる不信疑惑を起すに至りたるの理由は、教育其者の側にもあり、又父兄の側にもあり。結り教育は其盡すべき丈けのものを盡さず、父兄は其求むべからざるものまでも求めたるの結果、かゝる現象を生じたるにて、此反動的現象によつて、教育家も自ら教育の正當なる職分を反省するの機會を與へられ、世の父兄も亦、教育の正當なる價値を認識するの動機を供せられたりともいふべく、或意味よりすれば却て喜ぶべき事件なりともいひ得べき也。

教育が盡すべき丈けの事を盡さずとは何をいふか。即ち今日の學校教育を受けたるものが只書籍のみより得たる形式的學問に捉はれ、理窟は達者にいへども、實際の役には立たず、其癖、氣位は可なりに高く、職業と給料の選り好みのみして眞面目に働く氣なく、下宿屋の樓上か、又は父母の家に歸てブラ／＼無用の日月を送り居るもの隨分多數なるが如きは決して教育の名譽といふことを得ざる也。一般の父兄は親戚知己、若くは隣家同村に於て、かゝる青年の存在を見て、何某は澤山に金を費つて、何々の學校まで卒業はしたれども、未だに何の動口もなく、さりとて家事の手傳をするにもあらず、相變らず親の厄介になつてゴロ／＼して居るにあらずや。何某も何某も皆同樣也。何某な

どは精々道樂を仕盡して半途退學して歸れり。何某は親が一言へばベラ〳〵と百言も饒舌りて親を遣り込めるといふ噂也。それに比ぶれば何某の子息は小學校丈けで切上げたれども、今ては立派に店を預つて一人前の商人になれり。何某の子息も立派に小作人を指圖して親父の片腕となれり。家の子息などに錢金をかけて、もつと學問をさせるよりも、今から算盤を彈かせた方がと商人はいひ、鋤を擔かせた方がと百姓はいふの有樣とはなれる也。是れ吾人が今日の敎育其者が未だ盡すべき丈けの事を盡さずといふ所以也。

世の父兄が求むべからざるものまでも敎育に求むるとは何をいふか。即ち世の父兄が敎育を以て、大黒樣の寶槌の如くひたすら、金錢を産み出すの器械と心得、敎育を受けさせさへすれば、エライ月給取になつて、田地も買ひ、庫も建てらるべしと信じ、敎育の効果は金錢以外、人品を高め、精神的慰籍を得るの方法を與へ、人の生活の内容を豐かにするものにして、敎育の効果を正當に身にしめたるものにとつては、假令月給は少くて長屋住居をするとも、顏回の所謂簞食、瓢飲の樂を味ふを得せしむるものたるを思はず。夫れ故に錢にならず、金にならねば、直ちに敎育を無視し、之を呪咀するにも至る也。これ皆敎育の効果を正視する能はず、求むべからざるものを求めたるの結果にして世の一般の父兄の誤りなりと斷ぜざるを得ざる也。

已に敎育に盡すべき丈けの事を盡さゞるの落度あり世の父兄に求むべからざるを求めたるの誤謬あり。この二つのものが衝突すべき機運が益々切迫し、遂に今年に至て俄然、破裂して以て此現象を生じたるものと見るが最も道理ある判斷なりと吾人は信ずる也。

病根已に明か也、藥餌即ち投ずべし。一方に於て今の敎育をして今少し實用的ならしめ、一方に於て世の父兄をして敎育は必ずしも月給取を作るを目的とするものにあらざるを悟らしむべし。敎育の効果は玆にて益々揚り、敎育の眞義は玆に於て愈々顯はれ、而して今年の如き反動的現象は忽ち消えて、敎育の隆盛年と共に加はらん也。（完）



噂の種

醉興子

○語呂や地口で、巧みに諷刺的滑稽を連發し、眞面目な六つかしい理窟をも、面白く愉快に說いて聞かせる手腕に至ては、現今田尻博士の右に出づるものはあるまい。博士は遞信省は低信省にして一向に信用し難い官省なりといひ。敏腕家は鬢腕家にして腕が肩より出てずして鬢のあたりよりヌッと出てたる化物なりと笑ひ、ハイカラも頸の廻らぬ位は我慢もなるが、洋行歸りの先生などは眼の上までも高いカラをつけて來るので皆目眼が見えぬには困つて了ふなど丶嘲けらる。

○同博士の近著「方今の急務」は經濟上より我國運の現在及び將來を論じて、頗る明晰、何人も一讀すべき小冊子(パンフレット)であるが、其中にも隨分面白い語呂合や地口が少くない。米國は遠からぬ中に米を澤山產出するに至るから、名丈けの米國が變じて、實際の米國になり、又絹も盛んになるだらうから、さうすれば米利絹國と成りはすまいか、といひ、「ワザワザ棉を米國や印度に注文するとは、何チウとてあらう」と洒落れ、鐵の如きに課税するの誤りなるを論じて「天下の事物は鐵に關係せざるなしで、課税の影響は洗濯婆の針にまで及ぶ、鍋釜鍬鋤の日用具は勿論、大工左官石工の道具など何から何まで鐵の關係しない物はなく、海陸軍の艦船や鐵砲、それに鐵道事業等徹頭徹尾鐵のいらぬものはない。之に税を掛るなどは甚だ以て無テッポウな譯てある。現に我國では鐵の高い爲めに、百姓が木製の農具を用ゐて居るといふ事が書物に書いてある」など其一例である。又少し櫟るやうな氣味はあるが「我國の經濟狀態を卑近の例に譬ふれば、百圓の月給取りが

百五十圓の暮しをして、そうして高利貸から睨まれて居る樣なもので、こんな不經濟の事はない、あまり不經濟をやると自然即ち天に對して不敬罪となる、更にやり損ふとケイザイで濟まず重罪になる」なども才氣喚發して居る。博士の講義は下手な落語家より餘程面白いといふのは大學生の定評で、博士の受持のものは試驗を要らぬ事にしても生徒が缺席するものが多くない相である。

○小田内通敏氏の「趣味の地理、歐羅巴」は近來の最も面白き著書の一であるが、倫敦の敘述などは殊に巧みに出來て居る。「ロンドンはいかなる處であるか。昔あるフランス人は、一ヶ月此處に遊んでをつて、歸國の上、其有樣を書かうとしたが、どうも不明瞭な所があるので再遊した。そして三ヶ月ばかり滯在し觀察して、それから歸つて筆を執つたが、矢張り要領を得ない。そこで三度目には、三年間止つて、いろ／＼研究したが、どうしてもわからぬので、とう／＼筆を抛つたといふ話がある。地理書などには、「英國の最も舊い町、世界の最も大きな都會、世界の最も大きな港」と書いてあり、「宛然たる一箇の世界」とも、「大きな蜂の巢——人間といふ蜂が、無數に住んでゐる都」とも書いてある。ロンドンとても、昔からこんな大都會でなかつた事は、其名を見ても明かである。ロンドンはケルト語で、「沼澤上の城塞」といふ意味であるが、實際今から一千八百五十餘年前、ローマ人の居つた時代などには、此處は僅かにテームス河の左岸にある、城郭を回らした、一つの小さい町であつたに過ぎぬ。それが今では膨脹に膨脹を重ねて、附近の郊外までも含めて、人口は約七百二十二萬といふ、世界第一の大都となつた。かくて之を「グレーター、ロンドン」といふ。其町々を徒歩で歩き回ると、晝夜兼行でも一年以上もかゝり、町々の長さを延して見ると、ロンドンから歐亞兩大陸を横斷して、我が東京に達する位もあるといふ。」などは實に巧いものだ。著者が單に自然地理のみならず、歷史、政治、外交、文學、美術、等あらゆる人文に向て興味を持つて居ることは、どの頁の上にも

明かにあらはれ、或意味に於ては本書に名づくるに歐洲の人文史なりといつてもよい位である。中學程度以上の人には有益多趣味の好著である。

○大石と犬養と反目するに至りし、根本的理由は大隈のお臺所に對する利害衝突なりといへる人あり。恐らくは例の口さがなき京童の取沙汰であらう。

○某新聞社員竹越三叉氏を訪うて、山縣老公の勢力、未だなか〱衰へざるものあるを説いた。三叉氏徐ろに口を開いて、夫れ或は然らん、然れども昔話に之れあり、衣川に於て辨慶長刀を持て棒立し居たり。衆皆之を恐れて敢て近かず。されど其久しく動かざるを冴りて、恐る〱近寄れば豈圖らんや、既に立往生したるなりけりと。山縣老公或は此衣川の辨慶に似たるなきかと輕く笑ふ。之れは二三年前の事也。今に至ては三叉氏更らに皮肉なる批評を老公に加へるであらう。

新刊批評

▲日本百科大辭典（第一册）　三省堂發行

今の日本には辭典の効用を餘りに重大視するものと、餘りに過小視するものとの二組の人のみ多くありて、辭典は辭典として之に適當なる評價を下す人極めて尠きが如し。一つの事について總てを語り盡すは到底辭典のよくし得べき處にあらざるも、僅少づゝにても多くの事を語るは辭典以外に亦求むべからず。されば辭典のみを繙讀して能事畢れりとするの誤りなるは固よりなるも、多忙なる時に當つて辭典を利用することを知らざる人の愚も亦憫笑すべし。此數年來辭典の發行せらるゝもの極めて多きも、吾人の見たる範圍に於ては經濟雜誌社の日本社會事彙最も正確にして、此處に評せんとする日本百科辭典最も浩瀚にして且つ周到なるが如し「あ」より「えん」に至るまでの第一册より出でざるを以て未だ全豹を窺ひ能はざるも四六二倍版千三百頁の大册、エンサイクロピヂアジヤポニカと銘打てるを以て推すも、日本の大英百科辭典を以て任ずるの概を見るに足るべし。記事の不釣合、發音の誤謬等、若しアラを探せば之なきにあらざるも、日本に於ける最初の大計畫の大辭典に多少の缺點を寛假せざるは、せざるもの、誤り也。大英百科辭典も最初に於ては缺點少からず、今日に於ても尚幾多の缺點あり、吾人は本書を以て我國の文化が次第に進歩しつゝあるの一證となし、全部の完成を祈るもの也。只慾をいへば執筆者の署名の記事を今少し多くして欲しき事也。（[illegible]）

粋美にして、挿畫の鮮明なる、亦出版界の一異彩たり。（定價拾圓）

▲支那大文學史（古代篇）　兒島獻吉郎著　冨山房發行

支那の元始時代より六朝の末に至るまでの文學を記述論評せり。菊版千百五十頁の大册、量に於て先づ人を驚かす。寄送を受けてより僅かに數日、全篇を通讀するの機を得ざる故精評はなし難きも、處々拾ひ讀せる處を以て判ずるに、文章は時に佶屈なる文字を用ひ過ぎたる處あるも概して暢達といふべく、論評も亦縱横自在にして青年子弟に面白く讀ますに足る。但し著者の見地は儒教的、道學者的臭味を帶び、異臭味の人物を論評するに往々皮相又は浸漫に流れ、時には苛酷に失することなきやと思はしむる處なきにあらず。兎に角にも支那文學史中最も注目すべき著述といふべく精讀の上精評の機あるべきを信ず。（定價貳圓八拾錢）

▲史學叢說（第一集）　星野恒著　冨山房發行

星野文學博士の史學に關する雜著九十五篇を集めたるものにして、論說、考證、解題の三類に分ち、何れも史實に忠實なる學者の面目を見るべし。所說必ずしも異を樹てず、穩健の論を遣るに平明の文を以てし、却て學者の奥床しさを感ぜしむ。史學界を益するの多大なるは論なく、一般史學に興味を有する人にとつて必要なる讀み物也。（定價二圓廿錢）

▲對譯評註悲劇オセロ　菅野德助譯註　玄黄社發行

沙翁の譯書又は註釋書決して少からざるも、本書の如き完全にして忠實なるもの未だ日本に於て發行せられたることなし。一々原文の句法語法、結構を辿りて、譯文を附し、且つ懇切なる註釋及び、古來の有名なる評論と名優の型などを附したる用意、眞に賞讚に値す、此書を精讀攻究せば沙翁劇を讀むの骨を覺るべし。（定價一圓五十錢）

▲花袋集（第二）　田山花袋著　左久良書房發行

花袋氏の最近の短篇十八篇を集めて花袋集第二出づ。中にあつて、「祖父母」「兄」「弟」「おし灸」「土手の家」の五篇を以て最も傑れたりといふべく、「死屍」の如き感じのよき作にあらざるも又著者の筆力を見るべし。著者は概して兩性問題と生死問題に關することに最も得意の作あるが如し。花袋集第一集よりも進歩の跡著しきを見、漫ろに著者の努力の効果の大なるを驚嘆せずんばあらず。（定價一圓十五錢）

▲出產　德田秋聲著　左久良書房發行

秋聲氏の短篇十三篇を集めたり。之を稱して秋聲集第二といふて差支なきも、卷頭一篇の名を取て全篇に名けたるなり。中にあつて、「出產」「四十女」「日向ぼつこ」の三篇最も傑出し、「數寄」「大祭日」「リボン」等に亦氏獨得の境地を見る。生の疲勞、生の倦怠、暗き家、淋しき人を描くの技量に於て何人も氏の右に出づるものなかるべく、現社會の消極的半面は氏の作によつて、永く後世に味はるべし。（定價八十七錢）

▲父と子　相馬御風譯　新潮社發行

ツルゲネフの最大傑作と稱せらる「父と子」の翻譯也。譯者は先きに同氏の「その前夜」を翻譯して好評を博せる人、此篇は其内容に於て、其譯筆に於て、更らに一層大いなる好評を博すべき充分の價値あり。原作は固より十九世紀の最も傑れたる作物の一つにして、獨り歐洲のみならず

又我國の作者にも非常の影響を及ぼしたるものなれば、單に文學の作品として價値あるのみならず、又文壇の變遷を窺ふにも必要なる書也（トルストイは著者が此書の原稿を朗讀する時に居眠し、僞か眞か紅葉山人は此書を評して實に面白くない本で、あんなものなら何時でも書けるといひたりと傳へられ、花袋氏、白鳥氏などは曾て此位面白い小說はないといひたる由也。（定價一圓）

▲野心　　村山烏逕著　左久良書房發行

正直にいへば吾人は此小說を讀みかけて、讀み畢らずして罷めたり。女學校の內幕を書いたるものらしけれど、文章はイヤにひねくりて、而かも死文字多く、到底吾人の感興を引くべき力なし。吾人は書き方について著者の反省を求めざるを得ざるを感ず。（定價六十五錢）

▲新譯和英辭典　　井上十吉著　三省堂發行

從來刊行されたる和英辭典中最も完備せるものにして英語研究者を益すること多大なるべきを信ず。（定價一圓六十錢）

▲脚本不如歸　　柳川春葉脚色　今古堂發行

新派の忠臣藏と稱せらるゝ不如歸の脚本也。原著者德富蘆花氏と協議の上脚色したるものだけあつて小說の要所〳〵は落ちなく仕組まれ、在來の芝居で演ずるものより遙かによし。殊に第四幕片岡中將邸の前半などよく出來たり。（定價三拾錢）

▲美顏術獨習　　東京衞生協會編　古今堂發行

朝から晩まで顏の粉裝にのみ心を勞し、浮身を窶すは素より褒めた話でなけれど、垢面蓬髮を誇りとするも感心せず、適度なる身だしなみは少々位各自心懸けあつて然るべし。此節近頃流行りかけたる美顏術を獨習する爲めに作りたるものなるべけれど、主として化粧の說明、化粧品の選擇等について述べあるが如し。當否は我等門外漢の保證の限りにあらざるも多少の參考にはなるべし。（定價金五十錢）

▲肖像畫自在　　小松末水著　盛文堂發行

擦筆を以て肖像畫を寫眞的に模寫するの法を說明したるものにして、小册子なれども、斯道の志ある人には參考とならん。（定價廿五錢）

▲心靈の現象　　平井金三著　警醒社發行

心靈界に存する種々なる不可思議なる現象を擧げて、そが極めて人生全體に關係あるものなることを說述せり。（定價四十錢）

▲トルストイ小說集　　日高　操著　內外出版協會發行

トルストイの道話八篇を譯したるもの也。小說といふよりも道話集若くは訓話集などいふ方內容にふさわし。トルストイの訓話は小說としての價値は大なりといふを得ざるも、其記述の簡捷素朴にして其教訓の峻嚴剴切なる他に多く類例を見ざる處、何人も一讀するの要あり。（定價四十錢）

▲立志小說逆境の勇士　　細內新泉著　成功雜誌社發行

逆境に立てる人の苦闘を少年の志を勵ますやうに書けるもの也（定價四十五錢）

▲孤雁揷畫集（壹卷）

月張孤雁氏の挿畫を集めたるもの也。傑作と稱すべきは見當らぬやうなるも、面白きもの二三枚あり。(定價五十錢)

▲緑雲

吉江孤雁著
如山堂發行

孤雁氏の小品二十有五篇を收めたもの、孤雁氏は自然と人事、此二つのもの互に相影響しあふ關係に趣味をもつて觀察を怠らず、潜心してそれを筆にするのであるから、此用意になる作物には自ら他とは異なる一特色を有して居る、自然描寫の上に於ては何人も先づ君を推すといふ程の定評になつて居るが因つて來る處の差異は如上の點に胚胎するのである、之を讀んで一層その感を痛切ならしめる。(定價金七十錢)

▲少女の操

富嶋竹峰述
内外出版協會發行

ベルナルヂル、ド、サント、ピールの原著ポールとバーヂニアの譯、筆は可なりにこなれて居る、流暢の調見るだけの値はある。(定價金四十錢)

▲英語句讀法

高橋五郎著
實業之日本社發行

コンマ用法より始めて以下十七章に英語の句讀法を說明したもの、中には音節論の如き諸家の議論紛々たるものゝ如き、並び掲げ彼此檢覈し照合を盡した結果最も妥當と思はるゝ說を採用し居る如き、英語研究者に資する所大なるものだ。(正價六拾錢)

▲新時代の佛教

松原至文著
佛教圖書出版協會

四圍の空氣は漸次新智識を以て充たされんとしつゝある世に、佛教家獨り一宗一派の祖師の語錄に縋り註疏を頼るばかりにては、到底新時代の人間を救ふ事は出來ぬとし、自己の信ずる淨土眞宗の立脚地から一々時弊を指摘して警告したものである。(正價四拾五錢)

▲宇宙と人生

宮崎八百吉著
文榮閣藏版

最近科學の進歩の結果宇宙も人生も皆彼等の物質的法則の一條を以て律し去らんとする、けれども之を以ては猶ほその根本に横はる一個の謎を解くことが出來ぬとし、それより辿りて神の存在を認め、斯くして宇宙と人生とを神學的見地から判斷したもの。(正價金六拾錢)

▲退耕錄

澤柳政太郎著
丙午出版社發行

官途を止めて今は野に在る著者は、その感想に於ても亦今は敢ていたる人である、此に於て往時言はんとして言ふ能はざりし事並に、現在に於ける所感等を、雜多な問題に就いて自在に言ひ現はしたるもの、著者が自己の親しき經驗から省察をなした後に公にしたのであるから、一々味ふべき價がある。(正價金一圓)

▲宗教改革史

村田勤著
警醒社書店

宗教改革を中心として大波瀾を捲起せる十六世紀の全歐の天地を、各國別に四國の事情より詳密に說盡せるもの、著者は之が爲に十六年の心血を濺いだといつて居るが、如何にも群書を渉獵したる上更に周匝なる考察を用ひた跡が左もこそと窺はれる。(定價金貳圓)

▲乳人政岡續篇

碧瑠璃園著
梁江堂發行

前篇に續いて仙臺騷動の内容を小說體に脚色したもの、行文頗る流暢一讀を値する。(定價七拾五錢)

▲自彊術　堀内新泉著　實業之日本社發行

世波を啻に無難に滑ぎ行くのみか、更にその間に拔手を切りて成効せんには自彊術なければならぬとし、實世間の日常の小問題に觸れ一々その心得方を敎へたものだ。（正價金五拾錢）

▲風葉小品　小栗風葉著　隆文館發行

「花束の主」卷頭として以下二十三小品文を收めたもの、著者の文品の範圍にして佳調なるは世に定評ある事、特に此篇に於て繰返す必要はない大部分口語體ならぬ文章が收めてあるが、孰れも取つて一種の文範ともすべきものである。（定價金五拾錢）

▲鬼　石橋臥波著　裳華房發行

我國上世より近代に至るまでの、傳說若くは記錄に殘れる鬼を一々研究して、鬼に對する思想の變遷を明瞭にせるもの、曩に「夢」を著したる著者にして今又此著がある、吾人はその特種の研究に熱心なる著者の篤學を愛する。（定價金一圓）

關東大賣捌所

東京神田表神保町 東京堂
仝 神田裏神保町 上田屋
仝 京橋尾張町 東海堂
仝 日本橋呉服町 北隆館
仝 本郷本富士町 盛春堂
仝 京橋鎗屋町 良明堂
仝 日本橋本石町 至誠堂

關西大賣捌所

大阪備後町 盛文館
仝 京町堀 太華堂
京都佛光寺 東枝書肆

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金參拾錢
半頁	一回	金七圓
一頁	一回	金拾貳圓
表紙の二、三、一頁	一回	金拾五圓
表紙の四	一回	金貳拾圓

廣告一手取扱 神田三河町一丁目 博報堂

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外郵税八錢）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵税共		

▼但し特價號は規定以外別に代金を申受くべし▲

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十二年四月廿七日印刷
明治四十二年五月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一
發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地（電話下谷九一九） 反省社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

